

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第112集

道場・中村遺跡

2022

公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第112集

どう じょう なか むら
道場・中村遺跡

2022

公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、美祢市秋芳町岩永本郷に所在する道場・中村遺跡で実施した発掘調査の記録をまとめたものです。調査は、岩永本郷西地区の農地整備事業に先立ち、山口県美祢農林水産事務所及び美祢市教育委員会から発掘調査業務の委託を受けて、公益財団法人山口県ひとつづくり財団が実施しました。

調査では、弥生時代を主体とする集落跡から竪穴建物や土坑などが検出され、多量の弥生土器や石器などが出土しました。

とりわけ、弥生土器は、北九州・下関地域及び瀬戸内西部地域から県東部にかけての特徴を合わせ持つ独特の様相を示しており、地域の当時の暮らしや文化を知る上で、貴重な資料となるものです。

今後、この調査成果を、郷土史や文化財保護に対する理解、教育や文化の振興、学術研究等に広く活用していただきたいと思います。

最後になりましたが、新型コロナウイルスの感染拡大が一進一退を繰り返す中、発掘調査の実施並びに本報告書の作成にあたり、多くの御支援、御協力を賜りました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

令和4年3月

公益財団法人 山口県ひとつづくり財団
理 事 長 浅 原 司

例 言

- 1 本書は、令和3年度に実施した道場・中村遺跡（山口県美祢市秋芳町岩永本郷地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、公益財団法人山口県ひとつくり財団が山口県美祢農林水産事務所〔契約名：農業競争力強化農地整備事業 岩永本郷西地区 埋蔵文化財発掘調査業務、農業競争力強化農地整備事業 岩永本郷西地区 令和3年度 埋蔵文化財発掘調査業務〕と美祢市教育委員会〔契約名：農業競争力強化農地整備事業岩永本郷西地区に伴う埋蔵文化財発掘調査業務〕の委託を受けて実施した。
- 3 調査組織は、次のとおりである。

調査主体	公益財団法人山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センター		
調査担当	調査第一課 長	森田 孝一	
	調査第一課 主査	宮下 孝優	
	調査員	鷹野 あきこ	
- 4 本書の第1図は、南周防農地整備事業所提供の地図を元に作成した。第2図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「山口」、2万5千分の1地形図「秋吉台」を複製使用した。
- 5 本書で使用した方位は、国土座標（世界測地系）の北、標高は海拔高度（m）で示している。
- 6 本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 7 図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。
- 8 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

SI	： 竪穴建物	SB	： 掘立柱建物	SD	： 溝	ST	： 墓	SK	： 土坑	SP	： 柱穴
----	--------	----	---------	----	-----	----	-----	----	------	----	------
- 9 報告書作成の過程で、石器・石製品の石材については赤崎英里氏（山口県立山口博物館）に御教示を頂いた。
- 10 資料の鑑定・分析に関して、放射性炭素年代測定（AMS測定）、樹種・種実同定分析を業者に委託し、成果を第IV章に掲載した。
- 11 本書の作成・執筆は、森田・宮下・鷹野が共同で行い、編集は宮下が行った。なお、本書の執筆分担は、次のとおりである。

I	宮下	II	鷹野	III	森田（竪穴建物（SI 3～7）・溝・墓、石器・石製品・中近世の土器・鉄製品）	宮下（概要、竪穴建物（SI 8～11）・掘立柱建物）	鷹野（竪穴建物（SI 1・2）・土坑・柱穴、弥生時代以前の土器）	IV	業者委託	V	宮下
---	----	----	----	-----	--	----------------------------	----------------------------------	----	------	---	----

本文目次

I	調査の経緯と概要	1
	1 調査に至る経緯	1
	2 調査の概要	1
II	遺跡の位置と環境	3
	1 地理的環境	3
	2 歴史的環境	3
III	調査成果	7
	1 調査区の概要	7
	2 遺構	11
	(1) 竪穴建物	11
	(2) 掘立柱建物	24
	(3) 溝	25
	(4) 墓	27
	(5) 土坑	29
	(6) 柱穴	36
	3 遺物	39
	(1) 弥生時代以前の土器	39
	(2) 石器・石製品	47
	(3) 中近世の土器	53
	(4) 鉄製品	58
IV	自然科学分析	59
V	総括	71

挿図目次

第 1 図	道場・中村遺跡の調査範囲	1
第 2 図	遺跡の位置と周辺の遺跡	4
第 3 図	道場・中村遺跡基本土層図	7
第 4 図	1 区遺構配置図	8
第 5 図	2 区遺構配置図	9
第 6 図	3 区遺構配置図	10
第 7 図	SI 1・2 実測図	12
第 8 図	SI 3 実測図	14
第 9 図	SI 4・5 実測図	15
第 10 図	SI 4 遺構・遺物出土状況実測図	16
第 11 図	SI 6・7 実測図	19
第 12 図	SI 8 実測図	20
第 13 図	SI 9・10 実測図	22
第 14 図	SI11 実測図	23
第 15 図	SB 1 実測図	24
第 16 図	SD 2～4・11 実測図	26
第 17 図	ST 1～4 実測図	28
第 18 図	SK 9～11・15・22 実測図	30
第 19 図	SK25・29・31・39・50 実測図	32
第 20 図	SK43 実測図	33
第 21 図	SK53・58 実測図	34
第 22 図	SP83～85 実測図	36
第 23 図	出土遺物実測図 1	40
第 24 図	出土遺物実測図 2	41
第 25 図	出土遺物実測図 3	43
第 26 図	出土遺物実測図 4	44
第 27 図	出土遺物実測図 5	45
第 28 図	出土遺物実測図 6	46
第 29 図	出土遺物実測図 7	48
第 30 図	出土遺物実測図 8	49
第 31 図	出土遺物実測図 9	50
第 32 図	出土遺物実測図 10	52
第 33 図	出土遺物実測図 11	54
第 34 図	暦年校正年代グラフ（参考）	62

挿図目次

第 35 図	道場・中村遺跡の木材（1）	67
第 36 図	道場・中村遺跡の木材（2）	68
第 37 図	道場・中村遺跡の木材（3）	69
第 38 図	道場・中村遺跡の種実	70
第 39 図	道場・中村遺跡 1・2 区主要遺構	71

表目次

第 1 表	主な土坑一覧表	37
第 2 表	出土土器・土製品観察一覧表	55
第 3 表	出土石器・石製品観察一覧表	57
第 4 表	出土鉄製品観察一覧表	58
第 5 表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	61
第 6 表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)	61
第 7 表	道場・中村遺跡における樹種・種実 同定結果	64

図版目次

- 図版 1 遺跡遠景（南西から）
- 図版 2 遺跡遠景（北西上空から）
遺跡遠景（南東上空から）
- 図版 3 調査区全景（南上空から）
調査区全景（東上空から）
- 図版 4 調査区全景（上が北）
1・2区全景（上が北）
- 図版 5 1区北側全景（南から）
1区全景（北東から）
- 図版 6 2区全景（北東から）
3区全景（上が北）
- 図版 7 2区南壁土層断面（北から）
SI 1 全景（上が北）
- 図版 8 SI 1 全景（北東から）
SI 1 ベッド状遺構下面 全景（東から）
- 図版 9 SI1 炉全景（南から）
SI 1 炉土層断面（南から）
- 図版 10 SI 2 全景（上が南）
SI 4・5 全景（上が北）
- 図版 11 SI 4 全景（北東から）
SI 4 土層断面（北西から）
- 図版 12 SI 4 炉全景（南から）
SI 4 遺物出土状況（西から）
- 図版 13 SI 6 全景（北から）
SI 7 全景（東から）
- 図版 14 SI 8・9 全景（上が北）
SI 9 全景（西から）
- 図版 15 SI10・11、SB1 全景（左が北）
SI10 全景（西から）
- 図版 16 SB 1 全景（東から）
SB 1 全景（北から）
- 図版 17 ST 1 全景（西から）
ST 1 遺物出土状況（北西から）
- 図版 18 ST 2 全景（南東から）
ST 2 遺物出土状況（北から）
- 図版 19 ST 3 全景（南から）
ST 4 全景（西から）

図版目次

- 図版 20 SK10 全景（南東から）
SK10 土層断面（南から）
- 図版 21 SK31 全景（西から）
SK31 遺物出土状況（西から）
- 図版 22 SK39 全景（北から）
SK39 底部炭化物出土状況（南から）
- 図版 23 SK43 全景（南東から）
SK43 遺物出土状況（東から）
- 図版 24 SK43 遺物出土状況（南から）
SK43 土層断面（南から）
- 図版 25 SK50 全景（西から）
SK50 土層断面（西から）
- 図版 26 SK53 全景（南から）
SK53 遺物出土状況（南から）
- 図版 27 SK53 遺物出土状況（西から）
SK53 底部全景（北から）
- 図版 28 SK58 全景（東から）
SK58 遺物出土状況（西から）
- 図版 29 SP83 遺物出土状況（南から）
SP84 遺物出土状況（北から）
SP85 遺物出土状況（南から）
SP85 遺物出土状況（東から）
- 図版 30 SK82 全景（南から）
SK87 全景（南から）
- 図版 31 SK101 全景（南東から）
SK104 全景（北から）
- 図版 32 出土遺物（1）
- 図版 33 出土遺物（2）
- 図版 34 出土遺物（3）
- 図版 35 出土遺物（4）
- 図版 36 出土遺物（5）
- 図版 37 出土遺物（6）
- 図版 38 出土遺物（7）
- 図版 39 出土遺物（8）
- 図版 40 出土遺物（9）

I 調査の経緯と概要

1 調査に至る経緯

山口県美祢農林水産事務所により農業競争力強化農地整備事業（岩永本郷西地区）に伴うほ場整備工事が計画されたことを受け、山口県教育委員会が平成27年度・29年度に試掘調査を実施した結果、弥生土器を伴う竪穴建物や土坑・柱穴など、弥生時代から中・近世にかけての遺跡の広がりが確認されたため、工事に先立ち当該地区を対象とする発掘調査が実施されることとなった。

近隣遺跡では、同じく農業競争力強化農地整備事業に伴うほ場整備工事に伴い、本調査地の東・南側約300mにおいて、当センターが令和元年度・2年度に発掘調査し、本郷川対岸に弥生時代中期から中・近世にかけての遺構・遺物を発見している。

今回の発掘調査は、記録保存が必要となる2,380㎡について、山口県美祢農林水産事務所と美祢市教育委員会から委託を受けて公益財団法人山口県ひとつづくり財団山口県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

2 調査の概要

令和3年4月1日付けの委託契約締結をうけて諸準備を開始した。4月22日には美祢農林水産事務所との初回業務打合せ協議を行い、同日、美祢市教育委員会と現地立会による打合せを行った。



第1図 道場・中村遺跡の調査範囲

これ以後、表土除去および仮設事務所設置に向けた手続きを開始した。また、調査範囲が東西に3箇所に分かれることから、西から1・2・3区と呼称することとした。

重機による表土除去は6月7日から7月13日にかけて実施した。現地作業員の調達については地域理事の協力の下に人員を確保し、6月17日に作業員説明会を実施した。

作業開始に備え、発掘調査の拠点となる仮設事務所および器材庫等を6月24日に設置した。なお、仮設事務所に関わる備品搬入と内部電気配線は6月28日に実施、電気外部配線工事、水道配管等の設置は6月30日に完了した。

6月28日には山口県埋蔵文化財センターから現地へ器材搬入を行い、翌月7月1日から人力により調査区の壁清掃、遺構検出作業等を順次行った。弥生時代の竪穴建物の一部、中世の掘立柱建物や土坑、および近世の遺構等を検出した。

7月19日から遺構の掘り込みを行い、7月30日に国土座標杭を設置した。8月中旬から下旬まで長雨で遺構面が軟弱化し、発掘作業ができない日が続いたため、作業工程に遅れが生じた。各々の遺構完掘後に個別遺構図・写真記録の作成を順次進め、10月20日にヘリコプターによる空中写真撮影・写真測量を実施した。その後、更に未調査遺構の掘削や測量を行った。11月2日に器材撤収、11月5日に仮設事務所水道設備および仮設事務所電気配線の撤去、11月12日に仮設事務所・器材庫等の撤去を行った。遺跡全体の遺構確認作業を施したうえで、11月17日に現地における調査を終了した。

11月中旬から12月下旬にかけては記録類を整理し、調査と並行して洗浄した出土遺物の接合・復元を行い、実測・写真撮影して資料化し、報告書刊行準備を進めた。また、出土炭化材の年代測定・樹種同定等の自然科学分析を業者に委託した。あわせて、挿図・写真図版の作成や原稿執筆作業を実施し、3月下旬に本報告書を刊行するに至った。



重機による表土除去



重機による表土除去



作業風景



作業風景

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

道場・中村遺跡は山口県美祢市秋芳町岩永本郷に所在する。美祢市は山口県中央やや西寄りの内陸部にあり、四方を山に囲まれた地形を持つ。北部には中国山地の西端である長門山地、中央部には国内最大のカルスト台地である秋吉台、また秋芳町域南部には小起伏丘陵地の秋吉丘陵が広がる。岩永本郷は市域の中央南寄り、秋吉台の南縁に位置し、全域はおおよそ南北7km、東西3.5kmの範囲にわたる。本遺跡はその中でも岩永本郷東南域にある本郷盆地（岩永ポリエ）と呼ばれる南北1km、東西3.5kmの小盆地内にある。盆地北西域は標高約200m前後、南東域は標高約150m前後の丘陵に囲まれており、盆地床は標高約73～74mである。美祢市周辺では石灰岩地域特有の地形が発達するが、本郷盆地も石灰岩の溶食作用により発達したものであり、岩永台と呼ばれる盆地北西域の丘陵には多数の石灰洞や湧水地が存在する。

河川は、厚東川が秋芳町を貫流し、本郷盆地内には厚東川支流の本郷川が盆地中央を南西から北東に向かって流れる。また岩永台南裾からはカルスト湧水を水源とする小河川が東へ流れ、盆地北部で本郷川と合流する。本遺跡は岩永台から南東方向へ舌状にのびる低丘陵上に位置し、本郷川及び前述の小河川に囲まれた微高地となっている。

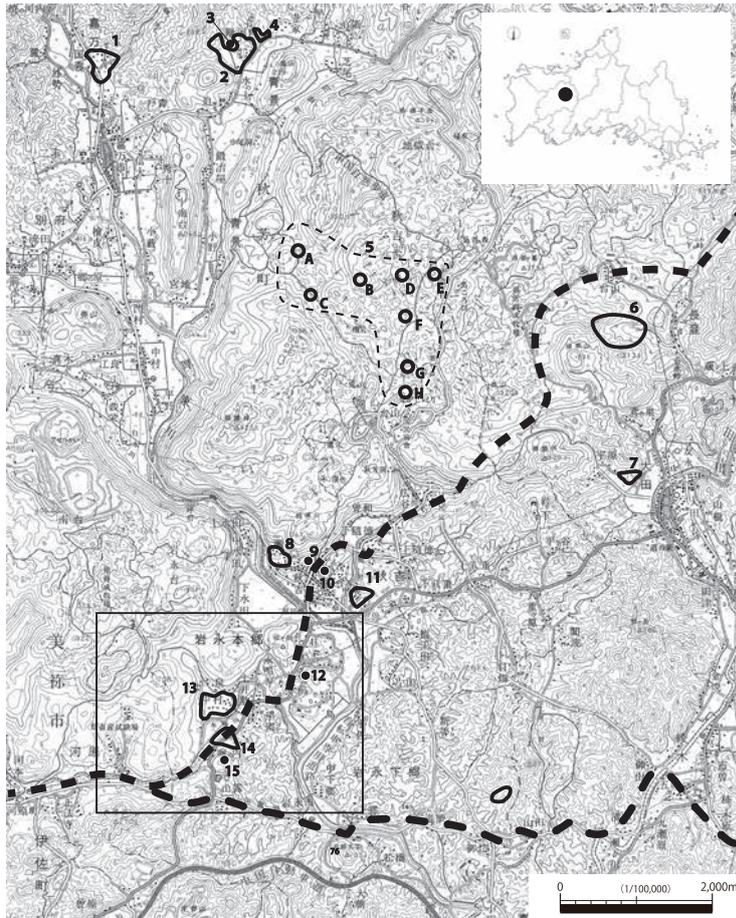
地質的には本郷川が流れる岩永盆地の中央部を境として大きく異なる。北西域は秋吉石灰岩と称される石灰岩層が広がり、一方南東域は砂岩・チャートからなる大田層群で、ところどころ石灰岩層が挟まる。また本郷盆地内低床地は砂礫土壌が堆積している。なお、気候は内陸性気候で冬と夏の寒暑の差が激しい。

2 歴史的環境

美祢市周辺に人々の活動がみられ始めるのは、旧石器時代であると推察される。秋芳町北部の秋吉台上の遺跡群では片刃礫器様の石器が採集されており、器形などから旧石器時代の遺物としての可能性が示されている。

続く縄文時代には、秋吉台上やその台麓を中心に遺跡数が増加するものの、現時点では集落跡は発見されていない。本郷盆地内で見つかった最も古い資料は、以前に道場・中村遺跡から出土した楕円押型文土器であり、縄文時代早期にこの地に人々がいたことが窺える。同遺跡では縄文時代に多用される形態の石鎌も多数採集されており、本年度の調査においても縄文時代晩期の浅鉢口縁部が出土した。

弥生時代になると人々の活動は瀬戸遺跡や松ヶ迫遺跡など、厚東川流域沿いやポリエ縁辺の丘陵、段丘上を中心に営まれるようになる。本郷盆地内でも遺跡数は急増し、西側丘陵裾部域にある的場遺跡や川東遺跡などで弥生土器が採集されている。特に、一昨年度の堀の内遺跡の調査では弥生時代の円形竪穴建物が検出され、弥生時代中期初頭～中葉とみられる土器が出土している。本年度の調査においても、弥生時代中期前半及び後期後半の人々の居住を示す資料が多分に発見されており、

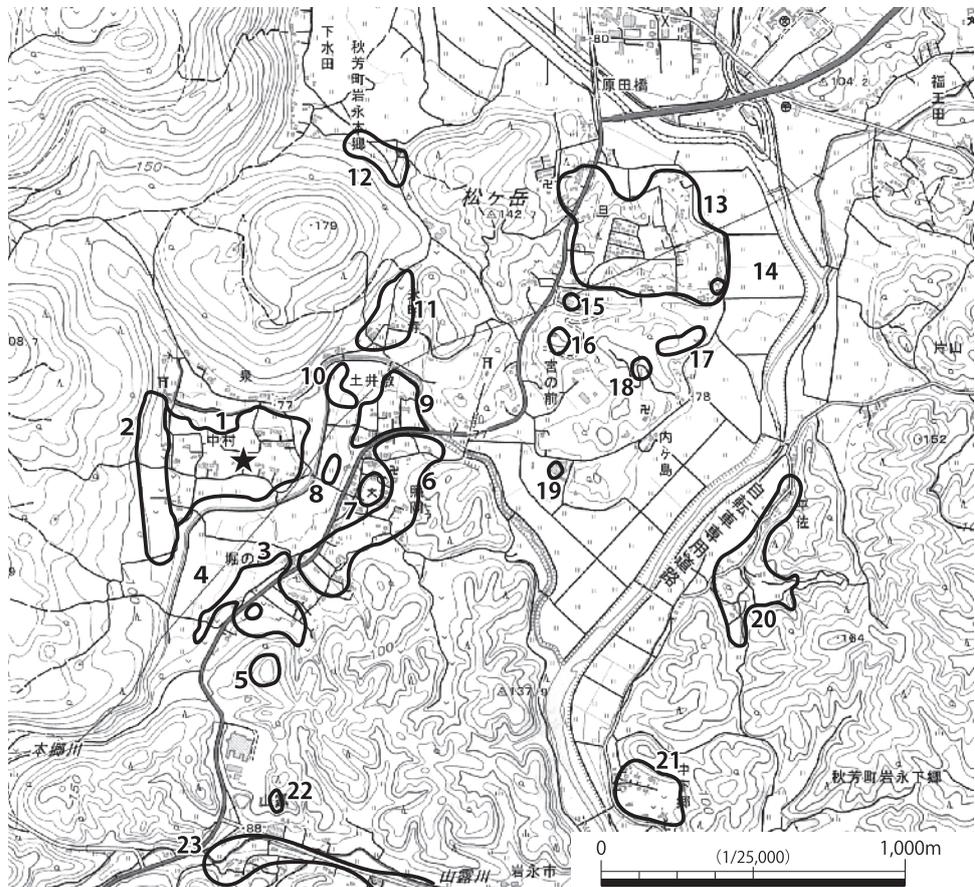


- 1 国秀遺跡
- 2 青景氏館跡周辺遺跡
- 3 青景城跡
- 4 殿河内遺跡
- 5 秋吉台遺跡群
 - A 出来水遺跡
 - B 笠木遺跡
 - C 船が窪遺跡
 - D 住居久保遺跡
 - E 下麻島遺跡
 - F 小郡久保遺跡
 - G 妙見原遺跡
 - H 長ジャグリ遺跡
- 6 長登銅山跡
- 7 平原第Ⅱ遺跡
- 8 瀬戸遺跡
- 9 秋吉八幡宮古墳
- 10 大里古墳
- 11 松ヶ迫遺跡
- 12 旦那式石棺群
- 13 道場・中村遺跡
- 14 堀の内遺跡
- 15 向山城跡

--- 赤間関街道（中道筋）
 —— 肥中街道

1 道場・中村遺跡
 (★は本年度調査地)

- 2 的場遺跡
- 3 堀の内遺跡
- 4 堀の内石棺群
- 5 向山城跡
- 6 川東遺跡
- 7 本郷小学校遺跡
- 8 国木遺跡
- 9 土井敷遺跡
- 10 飯畑遺跡
- 11 永明寺遺跡
- 12 下水田遺跡
- 13 旦那遺跡
- 14 旦那1号横穴墓
- 15 旦那2号横穴墓
- 16 旦那式石棺群
- 17 内が島遺跡
- 18 内が島石棺群
- 19 三戸遺跡 (三戸石棺)
- 20 平佐遺跡
- 21 中下郷遺跡
- 22 山露横穴墓
- 23 山露遺跡



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

水稲耕作に適した本郷川沿いの低湿地や微高地において集落が営まれていたと考えられる。弥生時代の墳墓は数が少ないものの、1962（昭和 37）年には、堀の内バス停留所付近で石灰岩を用いた堀の内箱式石棺群が確認されている。また盆地外周辺では北東側の丘陵に内が島箱式石棺群や旦箱式石棺群があり、丘陵南端の三戸遺跡では壺棺として使用された可能性のある土器が発見されている。終末期になると旦箱式石棺群において周囲に溝を持つ方形台状墓と思しき墳墓が出現し、個人首長の萌芽が察せられる。

古墳時代に至ると、後期に国秀遺跡のような大きな集落が出現し、大里古墳や秋吉八幡宮古墳の存在から、在地豪族の台頭が窺えるようになる。今のところ本郷盆地内で古墳は周知されていないものの、道場・中村遺跡に隣接する的場遺跡では、耳環や鉄鍬頸部とみられる鉄器片など、古墳の存在を示唆する遺物が採集されている。また盆地外ではあるが、内が島丘陵の南端部においては三戸石棺と呼ばれる鉄鍬を副葬した古墳時代前半の箱式石棺が発見され、旦丘陵では旦 1 号横穴墓、旦 2 号横穴墓があったとされる。山露横穴墓では現在でも玄室が確認でき、須恵器、鉄製刀子、人骨などが出土している。古墳時代の集落跡に関しては、一昨年度の堀の内遺跡の調査で古墳時代後期の竪穴建物が検出された。

古代律令制下では、この地特有の地質により長登銅山跡をはじめとして各所で金属生産を行うようになる。岩永本郷は長門国美祢郡五郷の一つであり、厚狭郡久喜郷に属したとの説があるが、岩永本郷の名の由来が古代の郡郷制に由来するものかは不明である。古代の遺物としては、一昨年調査した川東遺跡や土井敷遺跡で須恵器が出土している。また、盆地外周辺では本郷川左岸の三戸遺跡でも古代の須恵器、緑釉陶器の出土がある。

中世になると、この地は武蔵七党の一つ猪俣党に属する岡部氏の所領地となる。1220（承久 2）年、長門国岩永地頭職に補任された岡部景澄は堀の内に居館を構え、後に大内氏に仕えることとなった。下る 1551（天文 20）年、大内義隆が臣下陶晴賢に叛かれた際には、当時岩永の領主である岡部隆景が逃れる義隆一行を中村の即心庵に案内し、庵主により湯漬けがふるまわれたといわれる。なお、今回の調査で発見には至らなかったものの、史書にでる「中村」は本年度調査地の付近であるとされる。また昔はこの辺り湧水のため一面の沼地を形成し、即心庵のあった中村と呼ばれる段丘は一種の浮島の恰好をなしていたといわれる（田中 1969）。本年度調査地は本郷川とその支流に挟まれ、周辺より一段高い段丘上に位置し、特に 3 区付近の標高が最も高い。さらに明治 20 年の地籍図によると、調査区 1 区・2 区に道場、3 区に中村の文字が残ることからも、3 区付近が即心庵のあった段丘である可能性が高い。

中世の埋蔵文化財包蔵地としては、一昨年度、昨年度の堀の内遺跡、土井敷遺跡、川東遺跡から、掘立柱建物をはじめとして中世の遺構や土師器、瓦器、中国陶磁器が出土している他、盆地北部に立地する永妙寺遺跡でも遺物が採集されている。本年度の調査においても、調査区 2 区で平安時代後期から室町時代とみられる掘立柱建物が検出されており、わずかであるが土師器、瓦質土器が出土した。

大内氏滅亡後、岩永本郷は毛利氏の支配下になり近世を迎えることとなる。近世の岩永本郷は岩永下郷と合わせ「岩永郷」のち「岩永村」の名で称されることとなり、萩藩領のうち、美祢宰判に

属した。萩藩の産業は、四白と称して、米、塩、紙、蠟の生産が中心となる。しかし岩永本郷含む秋芳町域では、土地的理由も相まって塩は勿論紙、蠟の製造もわずかであり、米や麦中心の農業が主体となった。

なお、1862（文久2）年に作成されたとされる『美禰郡細見繪図』をみると、本年度の道場・中村遺跡調査区がある一帯は「道場組」となっており、「山内山三郎知行入交り」（石高104石3計4升）との記載がある。絵図によると道場が北側の岩永台南裾、中村が南側の本郷川右岸すぐ横となっており、明治20年の地籍図とはやや異なることが分かる。

また特筆すべき点として、盆地内南縁側に萩藩が江戸時代初めに萩と赤間ヶ関を結ぶため整備した赤間ヶ関街道の中道筋が通っていたことが挙げられる。中道筋は萩と下関を最短で結び、さらに吉田において山陽道に連絡することから主要連絡道として活躍した。吉田往還とも呼ばれるこの道は、幕末には吉田松陰や高杉晋作をはじめ、維新の志士が多く利用している。なお、岩永本郷には宿場はおかれておらず、秋吉宿と河原宿の中間地点にあたる。

近現代では、江戸時代から続いた岩永村は1879（明治12）年、岩永本郷村と岩永下郷村に分かれる。1889（明治22）年、両村は再び合併して岩永村に戻り、村役場は盆地内の照岡に置かれた。1955（昭和30）年の町政施行で岩永村は秋吉村、別府村、共和村と合併し秋芳町となり、2008（平成20）年、平成の大合併により、秋芳町は旧美祢市、旧美東町と合併して美祢市となり、今に至っている。

現在の岩永本郷は国道435号が東西に通い、周辺地域を結ぶ。産業は古来同様農業を主としている。盆地北縁においては、石灰岩質で排水の良い土壌を活かして梨栽培が盛んに行われており、「秋芳梨」のブランドとして特産となっている。また、近年ではリンドウの花の栽培も積極的に行われている。

引用・参考文献

- 角川日本姓氏歴史人物大辞典編纂委員会 1991『角川日本姓氏歴史人物大辞典 35 山口県』
- 秋芳町教育委員会 1991『秋芳町史』
- 秋芳町教育委員会 1995『秋芳町の遺跡 秋芳町内遺跡詳細分布調査結果の報告』
- 秋芳町地方文化研究会 2014『美禰見繪図』（復刻版）
- 田中 芳 1969「秋芳町における義隆関係の伝承」『秋芳町地方文化研究』第5号
- 平凡社 1980『山口県の地名 日本歴史地名大系第36巻』
- 山口県教育委員会 1982『山口県百科事典』大和書房
- 山口県埋蔵文化財センター 2019『堀の内遺跡 川東遺跡 土井敷遺跡』
- 山口県埋蔵文化財センター 2020『堀の内遺跡2』
- 山口県文書館 1962『防長風土注進案』第17巻 美禰宰判

Ⅲ 調査成果

1 調査区の概要

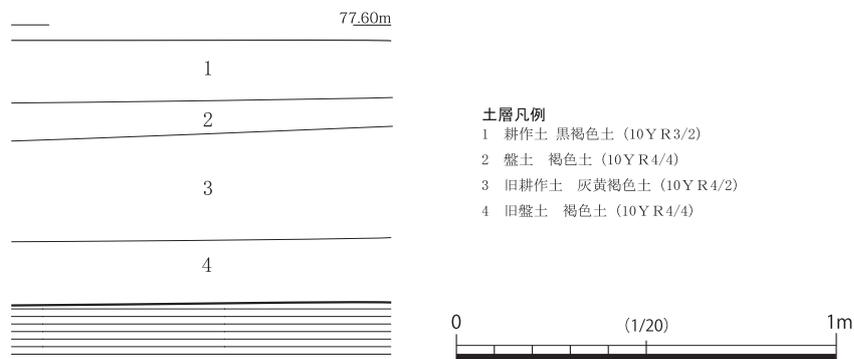
道場・中村遺跡は本郷川の右岸に位置し、標高約 76.0～78.0m に位置する。調査区は北から南へ緩やかに傾斜し、調査区内の遺構検出面では標高約 76.50～77.25m で、その比高差は約 0.75m である。旧地形では、北側が現況よりも高かったことが基本層序で確認できるが、中・近世の水田造成のため、削平されている。

調査では、弥生時代中期・後期の竪穴建物 11 棟、貯蔵を目的とした土坑、古代から中世の掘立柱建物、溝、墓、土坑、柱穴などの遺構が検出された。古代・中世の遺構や遺物包含層からは、弥生時代、古墳時代後期、奈良・平安時代から中世・近世にかけての遺物が出土している。

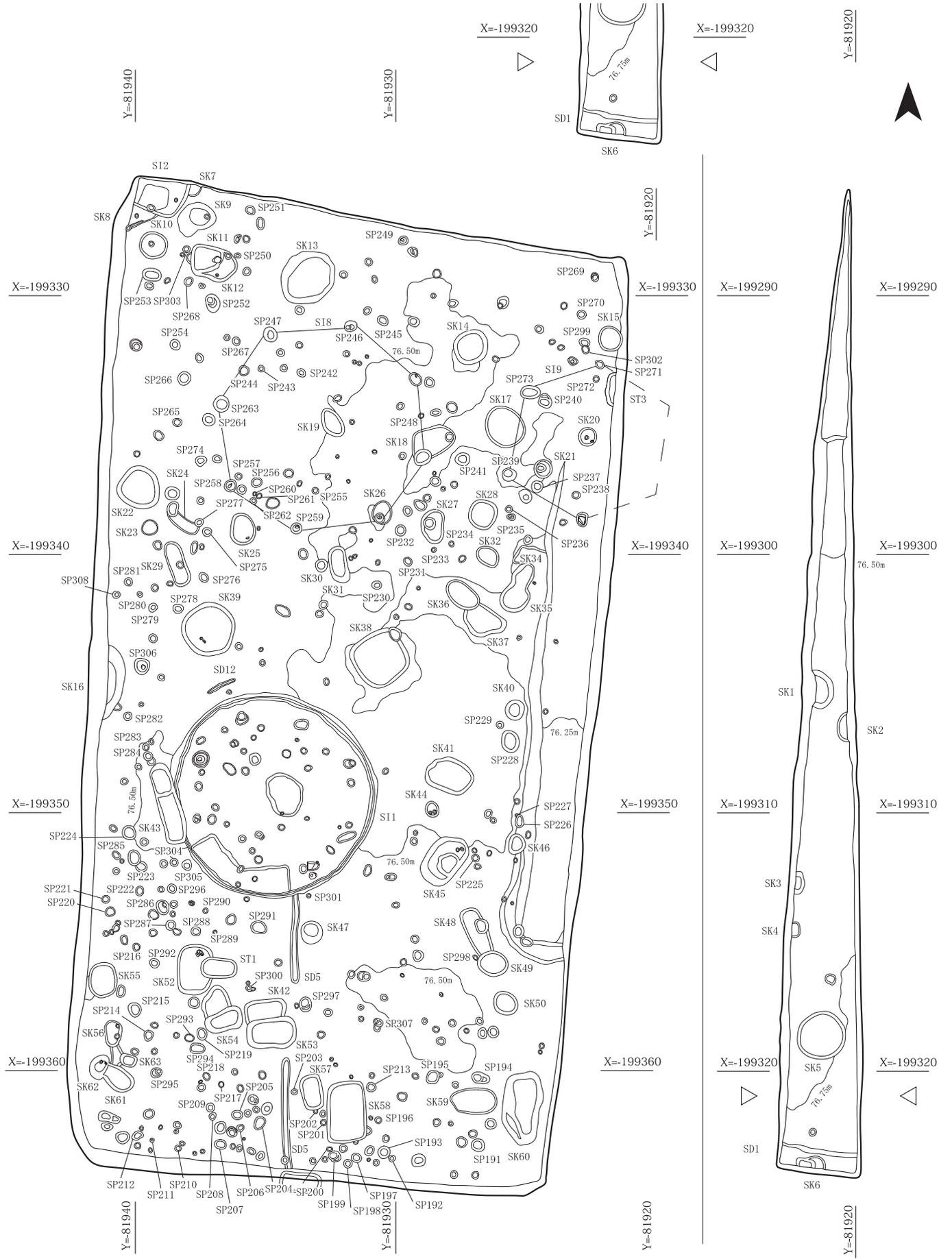
遺構の分布からは、集落は各時代を通じて広い範囲に渡って展開していたことが判明し、出土遺物からは、道場・中村遺跡が弥生時代中期・後期から古代・中近世にかけて幅広く営まれた集落の一部であることが明らかとなった。

検出された遺構は、竪穴建物 11 棟、掘立柱建物 1 棟、溝 10 条、墓 4 基、土坑 102 基、柱穴約 1,500 個と多く、遺構密度が高い。時期は竪穴建物については弥生時代中期を中心として後期、掘立柱建物、溝、墓などは古代から中世が主体である。土坑は弥生時代の貯蔵を目的とする土坑と、中世の集落に伴う墓を含めたものが混在し、柱穴も同様の傾向を示す。本郷川左岸の微高地に、各時期にわたって集落が形成されていた様相をみることができる。

調査区では、2 区の南壁で基本層序の観察を行った（第 3 図）。耕作土下には盤土、その下層に旧耕作土・旧盤土が堆積する様相が明らかとなった。道場・中村遺跡周辺は中世から近世の水田造成による削平により、特に北側の包含層・旧耕作土・旧盤土の残りが良好ではなく、一部の竪穴建物跡は壁面の確認ができないほど削平されていた。しかし、残された検出遺構・遺物からは縄文時代から弥生時代中期・後期、古代から中世・近世に至る各時代の活発な集落活動が展開されていたものと推定される。



第 3 図 道場・中村遺跡基本土層図



第4図 1区遺構配置図

X=199330

Y=81890

Y=81880

Y=81870

X=199330

X=199340

X=199340

X=199350

X=199350

X=199360

X=199360

Y=81890

Y=81880

Y=81870



第5図 2区遺構配置図

Y=-81760

Y=-81750

Y=-81740

Y=-81730

X=-199390

X=-199390

X=-199400

X=-199400

X=-199410

X=-199410

X=-199420

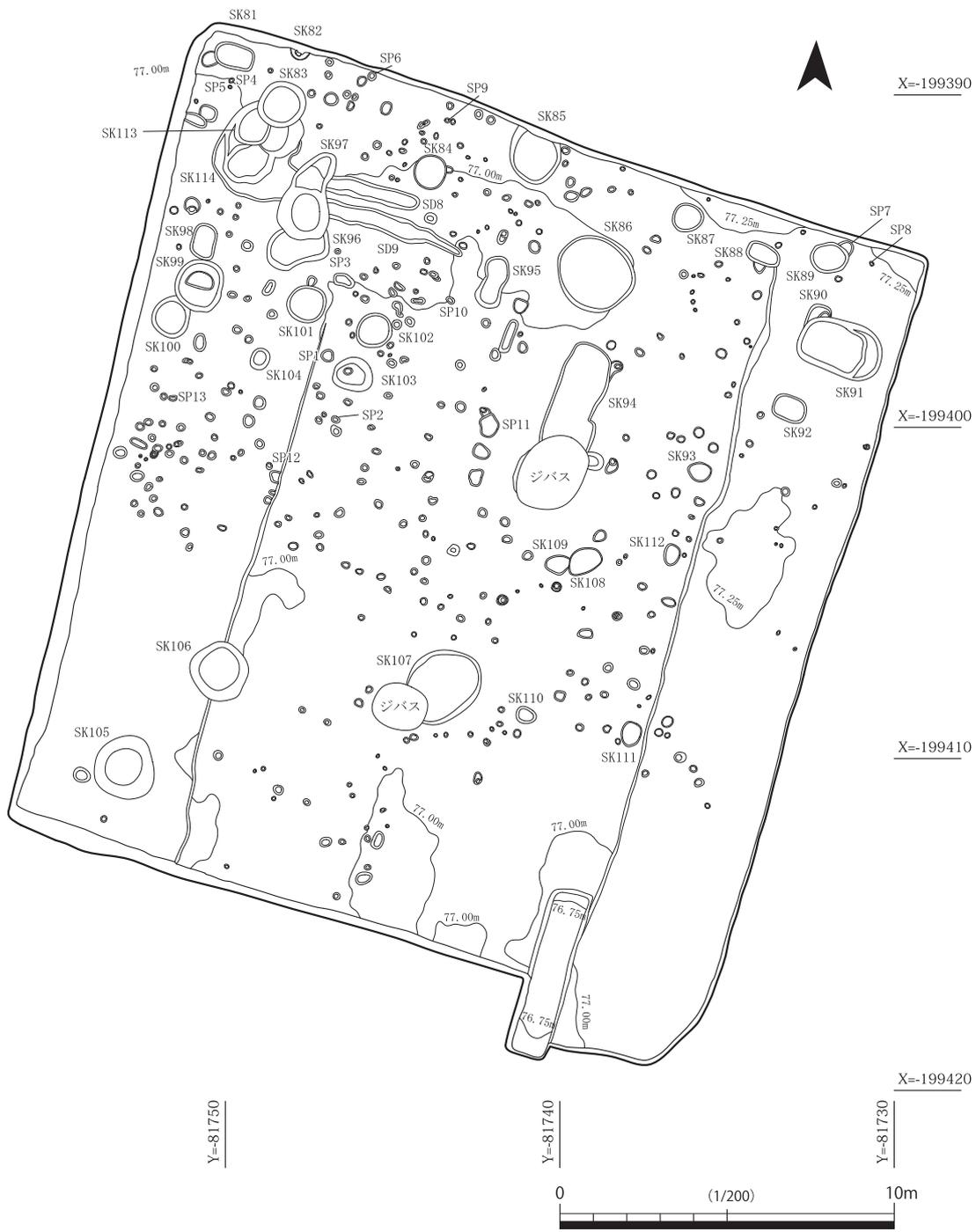
X=-199420

Y=-81760

Y=-81750

Y=-81740

Y=-81730



第6図 3区遺構配置図

2 遺構

(1) 竪穴建物

竪穴建物は1区で4棟、2区で7棟の計11棟が確認された。床面が確認された竪穴建物については、いずれも壁高が低く、後世の農地開発などで上部が大きく削平されていると推定される。また今回、1つの土坑を中心に柱穴が円形状に配される4か所の空間部分を竪穴建物跡（SI 8～SI11）として報告している。これらについては、柱穴列が竪穴建物間の空隙に位置している点、柱穴内埋土及び柱穴内の石灰岩の検出状況が1区の円形竪穴建物と酷似している点、柱穴列中央に中央炉跡とみられる被熱痕を持つ小土坑が確認されている点を踏まえ、床面と壁面を削平された円形竪穴建物であると判断した。時期は、平面形が円形のものが概ね弥生時代中期前半、隅丸方形のものが弥生時代後期後半と推定される。

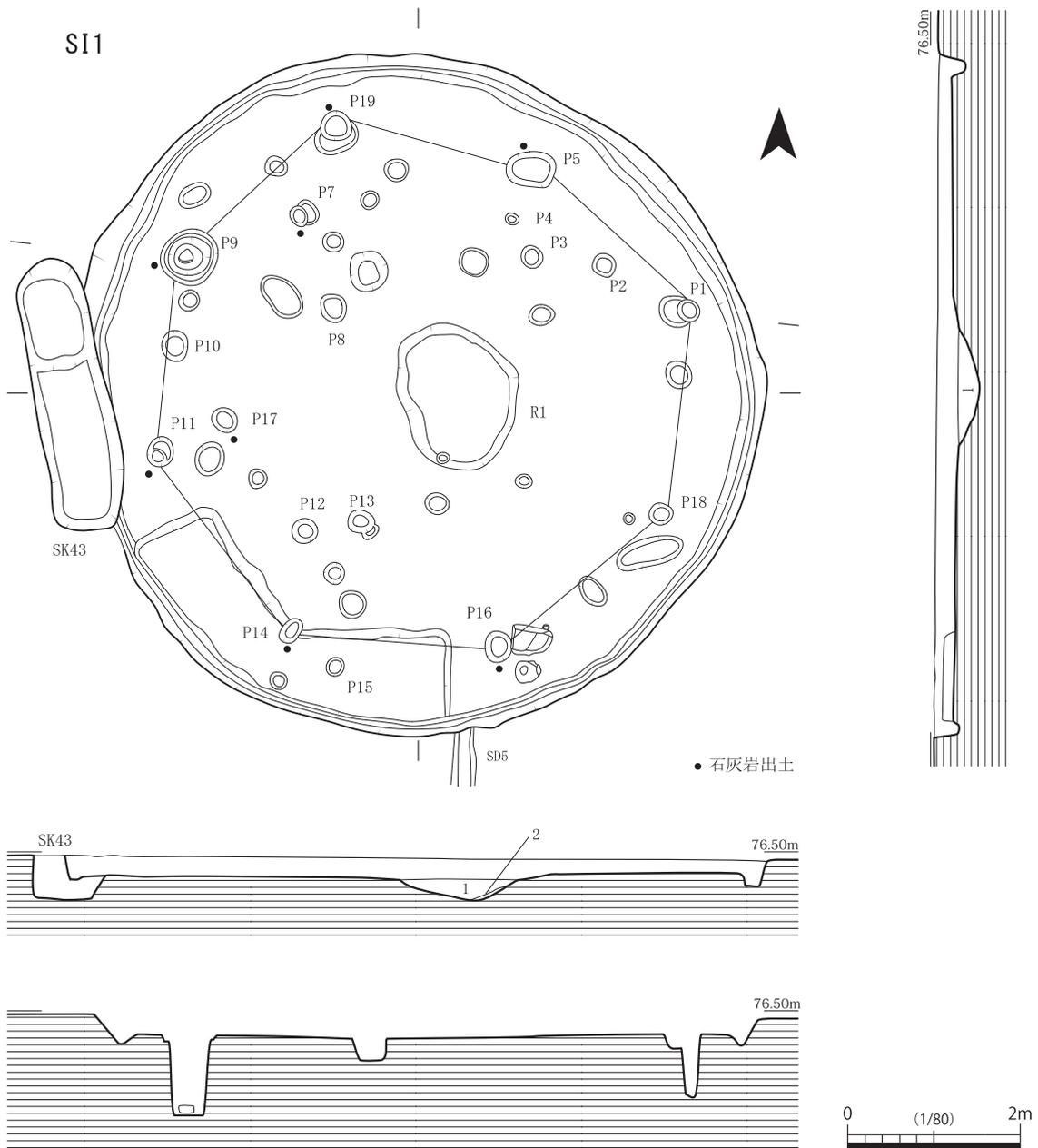
SI 1（第7図 図版7～9）

1区中央やや西よりに位置する。平面形は円形を呈し、規模は遺構上面で長軸8.02m、短軸7.75m、検出した床面上で長軸7.51m、短軸7.30mであり、床面積は43.0㎡である。床面までの深さは、後世の削平により全体的に浅くなっていると推定されるが、現状、検出面から床面まで北側で12cm、南側で24cm、中央部で18cmを測る。床面の標高は約76.3mで、建物内埋土は単層で、小ブロックで橙色粘質土の地山が混入し、炭や焼土を少量含む暗褐色（10YR3/4）土が堆積する。

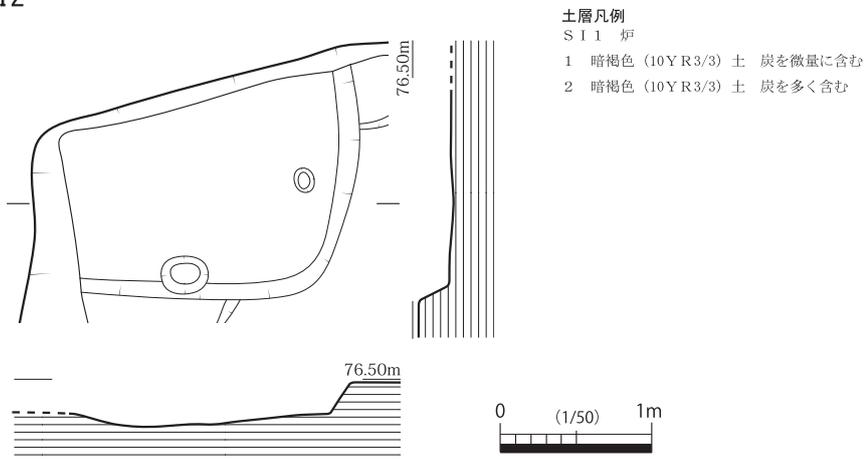
確認された床面に貼床は確認できず、地山面で検出した。床面外周には排水の役割を持つ幅20cm前後の壁溝が全周を廻る。溝の最深は北東隅にあり、床面から13cmを測る。一方、最浅は南隅で2cmである。また、ベッド状遺構が建物内南西側に設けられている。造作は盛り土によるもので、規模は中央間で長さ約3.95mを測り、壁全周の約1/5弱を占める。幅は南東端で約90cm、北西端は約95cmである。形状は外側が壁溝に沿っているために縁辺が弧状を呈するが、内側の縁辺は主柱穴P14を中心にして両サイドが直線的に伸びている。なお床面との高低差は約10cmである。

主柱穴については、8個確認した。いずれも壁溝寄りに位置し、壁溝との距離は平均約37cmと比較的狭い。主柱穴の平面形は、正円形、不整円形、楕円形がある。いずれも垂直に掘り込まれるが、P9のみ二段掘りになっている。また主柱穴の平面形の大きさは25×65cmが最も小さく、最大は63×65cmで平均径37cmを測り、床面からの深さは95～105cm、平均約78cmである。柱間間隔はP1から時計回りに、2.17m、2.15m、2.16m、2.34m、1.83m、1.80m、1.90m、2.11mであり、平均は約2.06mである。

建物内中央付近からは長軸178cm、短軸138cm、床面からの深さ24cmを測る土坑が検出された。平面は楕円形で、断面形が浅いすり鉢状を呈する。土坑内の埋土は2層に分かれ、炭を微量に含む暗褐色土の下に炭を多く含む埋土が堆積する。埋土中から炭が多量に検出されたことに加え、床面に炭の付着や被熱の痕跡がみられたことから、土坑が中央炉として機能していたことが窺える。なお、この炉の南側と西側の床面上でも焼土面を認めているが、炉として機能した痕跡であるかは不明である。



SI2



第7図 SI1・2 実測図

建築部材については、P 13 から出土した炭化材の樹種同定の結果、クリの木材が含まれている可能性が高いことが分かった。また、8本の支柱穴のうち、P 16、P 14、P 11、P 9、P 6、P 5の底面に石灰岩の自然石が入っていた。石灰岩は本遺跡が秋吉台カルスト台地の縁辺部にあたることから、石材としては容易に入手できるものである。石灰岩の検出状況については、P 9のように、上部に平坦面を持つ大型の石を底面に据えるものの他、15cmほどの自然石が複数投げ込まれたような状況のものがあり、一様ではない。なお、前者については礎石として用いられたものと推察される。SI 1のような石灰岩の検出状況は後述の推定竪穴建物（SI 8～SI11）と一致しており、本遺跡における円形竪穴建物の特徴ともいえる。

また、ベッド状遺構下の床面を調査した結果、複数の柱穴が検出され、ベッド状遺構を設置するまでに本建物で一定の居住期間があったことが察せられる。

出土遺物は総じて量は少ない。特に床面上はわずかであり、建物内南側壁溝近くにおいて倒位の弥生土器甕下半部（2）、その北側から長さ46cm、幅34cm、厚さ約10cm程度の大きさで、比較的滑らかな器面をもつ台石のほか、弥生土器の高杯脚部（3）、磨石（78）などが出土した。また中央炉内からは弥生土器の底部を検出している。埋土中の遺物としては、弥生土器小片のほか、打製石斧（69、72）、石包丁（51）、紡錘車（109、110、111）、砥石（86、92）、磨石（79）、石器剥片（99、104、107、108）などの石器類がある。なお、建物内での遺物の少なさと完形の土器の出土がみられないことから、多くの生活道具等は建物廃棄時に持ち出したものと想定される。また石器未製品や石器剥片、磨石、砥石が多くあることから、居住時に建物内において石器製作を行っていた可能性が高い。

本建物の時期は、出土遺物に詳細な時期を比定できるものが少ないために決めかねるが、支柱穴であるP13から検出した炭化材に放射性炭素年代測定（AMS法）を実施した結果、暦年較正年代（1 σ ）はBC 88～AD 9の年代値が示された。これに加え、SI 1によって切られるSK43との関係から、SI 1の時期はおおよそ弥生時代の中期初頭を除く、中期前半にあたると思われる。

SI 2（第7図 図版10）

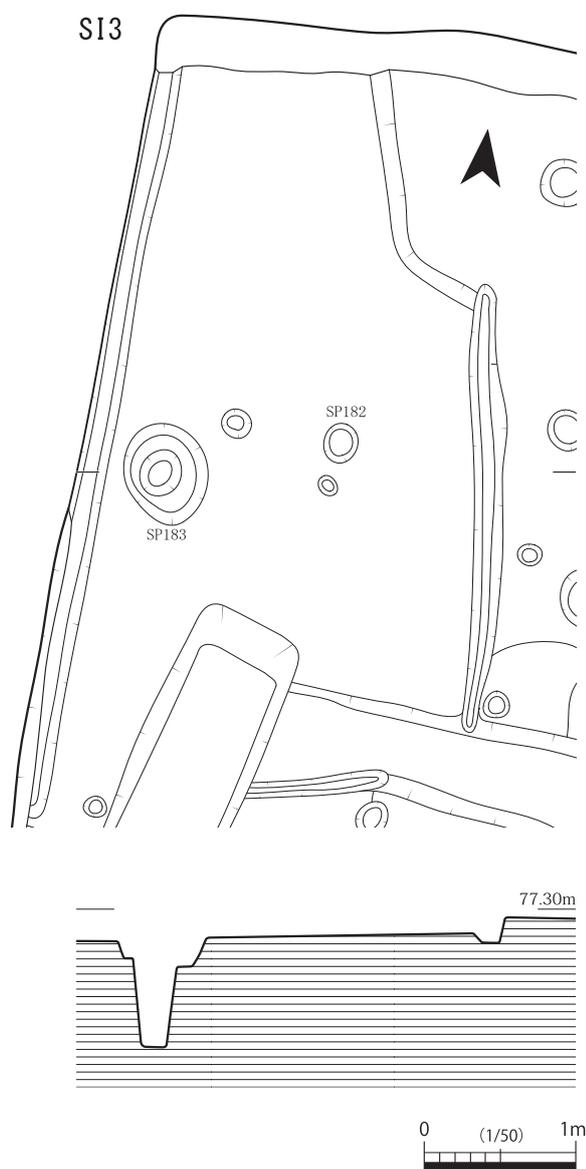
1区北西隅に位置する。ほとんどは調査区範囲外にあり、建物の南東隅部分のみ検出した。埋土は地山の小ブロック及び若干の炭を含む黒褐色（10YR2/2）土の単層である。全体の平面形は隅丸方形と推定され、現状での規模は198cm以上×155cm以上、深さは検出面から15～20cmを測る。壁溝、貼床はなく、検出範囲がわずかであるため、支柱穴も確認できなかった。遺物は弥生土器の細片が少量出土したのみで詳細な時期決定は難しいが、2区に存在する平面形が隅丸方形を呈するSI 4の存在から、それと大きな時期差はないと推測する。

なお、SI 2の南側にはSK 8が重なるが、その肩部は北東－南西方向に伸び、比較的直線的な壁を成している。また壁面直下には長さ116cm、幅8cm、深さ12cmの小溝があり、検出面から深さ約8cm前後を測る床面は概して平坦である。そのため、小溝を壁溝として想定すれば、SK 8は竪穴建物の一部の可能性が考えられるが、ここでは検出範囲が限定的なため、その判断は保留した。

SI 3 (第8図)

2区の北西隅に位置する。平面形が方形または隅丸方形と推定するものであるが、建物内の西側が調査区外にあり、また北側も大きく削平をうけているため、建物の南東隅コーナー付近の検出に限られた。規模は現状で南北3.3m以上、東西2.65m以上を測り、建物内の埋土は細かい地山の土が混じる暗褐色(7.5YR3/3)粘質土の単層で、床面までの深さは検出面から最深で11cmにとどまる。床面は概ね平坦を呈し、貼床ではなく地山面で、標高は約77.15m前後である。また南北方向および東西方向にのびる壁溝の一部と思われる2条の小溝を検出した。前者の溝の残存は長さ2.96m、中央幅23cm、深さ10cmで、その南端は近世のSD2に切られている。なお後者の東西溝はSD2およびSD4と重なり、残存長が97cm、幅13cmを測り、深さは2cm以下でかろうじて検出できたものである。

なお、床面で炉は確認できなかったが、SP183は主柱穴の一つと考えられるものである。径66cm×55cmの平面不整円形の掘り方を有し、中央部に径27cm×30cm、深さ73cmの柱穴を有する。なお、



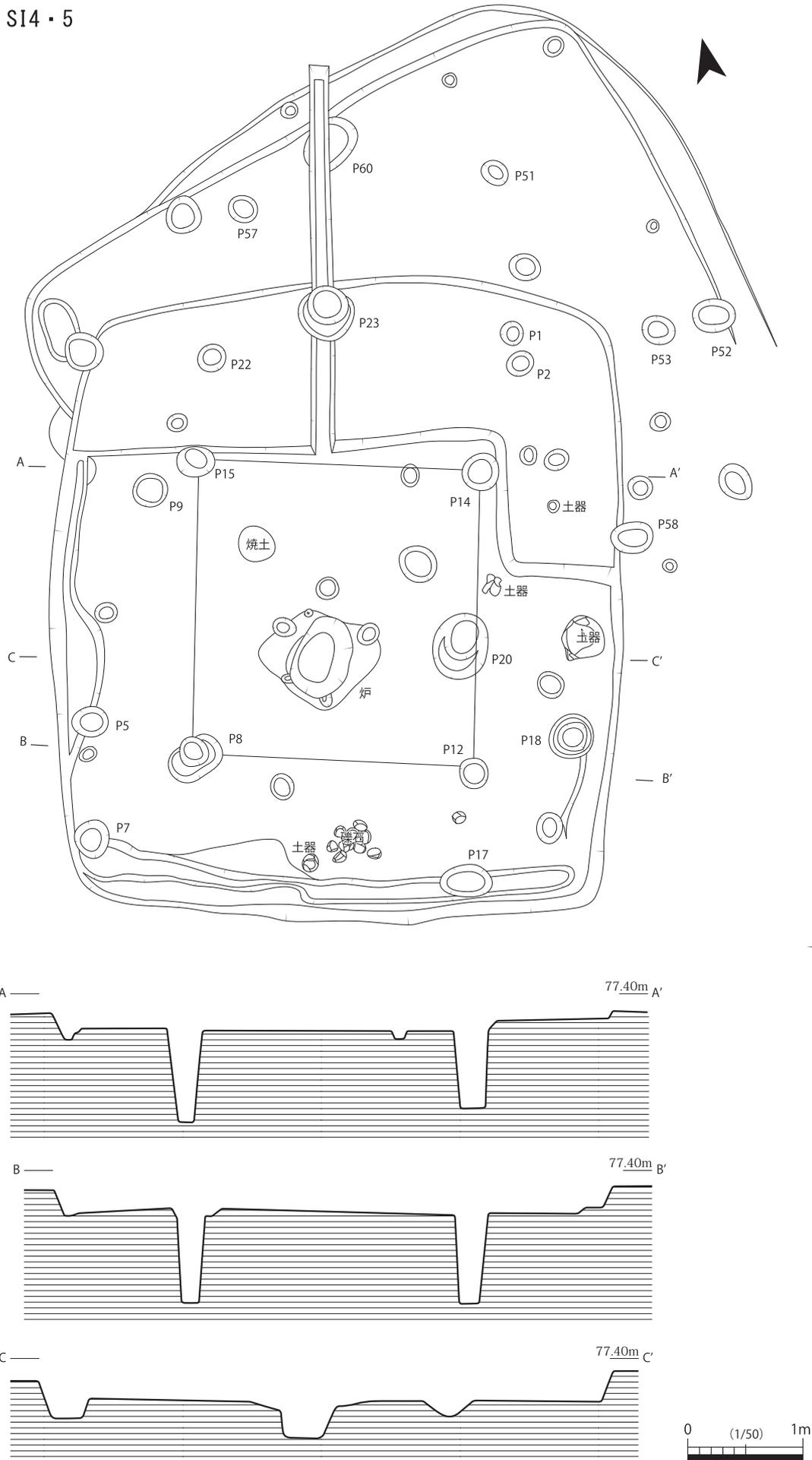
本建物は南側でSD4と切り合うがその先後関係は明かにし得なかった。また建物の時期は、出土遺物がごく少量のために特定できないが、埋土や平面形などから、SI4と大きな時期差はないと推察する。

SI 4 (第9～10図 図版10～12)

2区中央部に位置し、北側にSI5の一部が重複している。平面は概して隅丸長方形で、北壁はやや弧状を呈している。規模は長軸5.58m、短軸4.96mを測り、床面積は27.7㎡となる。各壁の長さは北壁4.34m、東壁5.03m、南壁4.36m、西壁5.0mで南北側に長い。建物内の埋土は上下2層に分けられ、床面直上層は黒褐色(7.5YR3/2)粘質土(少量の炭・地山の土を混じる)で、厚さ15～26cmを測り、その上には黒褐色(7.5YR3/1)粘質土が厚さ5cm前後で覆う。

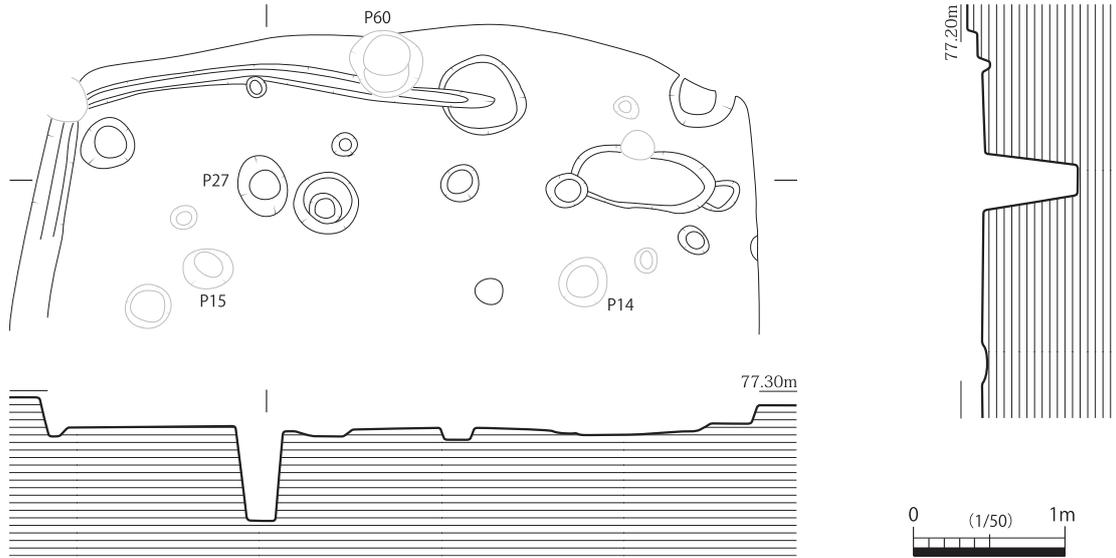
床面は貼床でなく、地山面で検出した。床面の高さは標高77.0～77.1mにあり、検出面からの深さは14cm～30cm前後で、南東隅付近が最も深い。また建物内の北側から東側北寄りにかけて平面形がL字状を呈するベッド状遺構が設けられている。その造作は地山の土である黄橙色(10YR8/8)粘質土が多く混じった暗褐色(7.5YR3/3)粘質土などによる盛り土で行われており、規模は北辺側中

第8図 SI 3 実測図

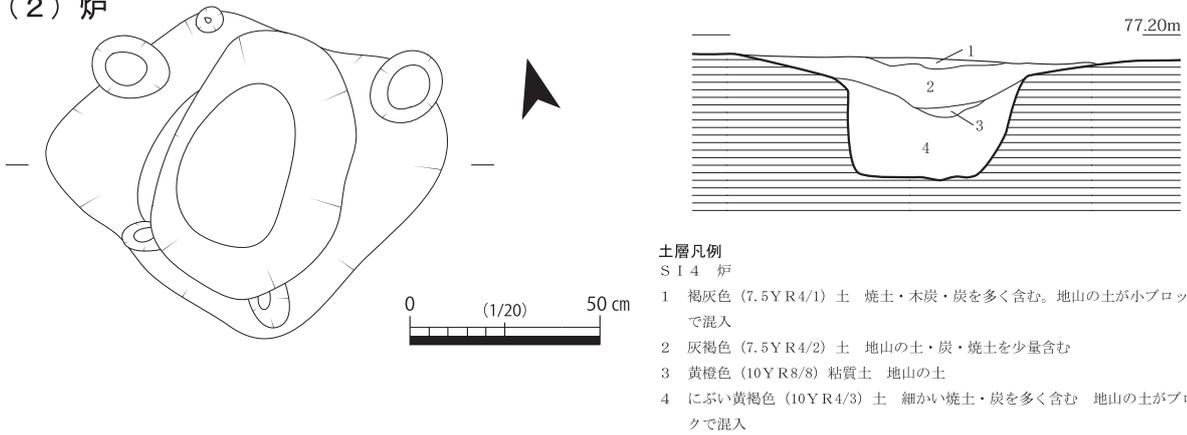


第9図 SI4・5 実測図

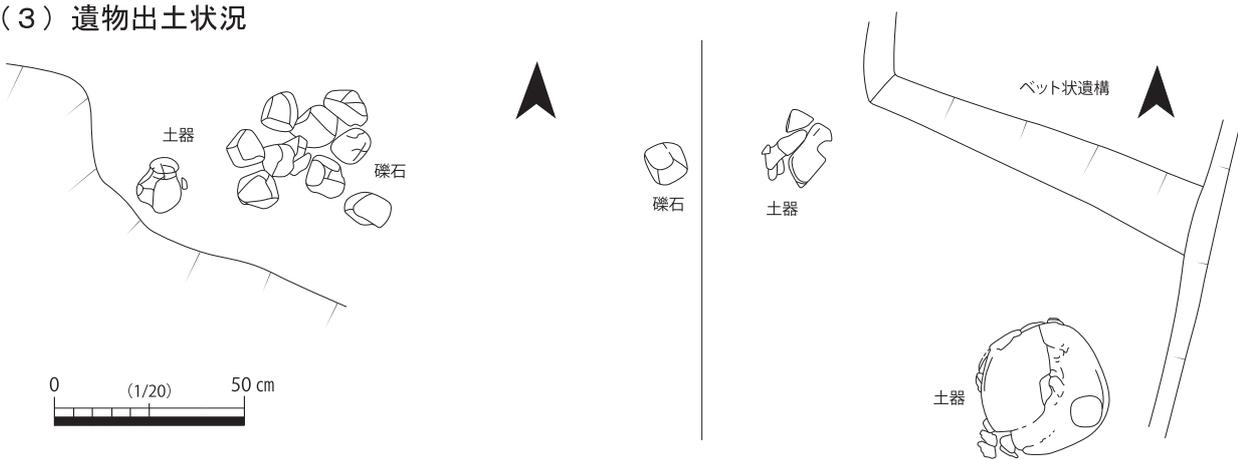
(1) ベッド状遺構下遺構



(2) 炉



(3) 遺物出土状況



第 10 図 SI 4 遺構・遺物出土状況実測図

中央部で幅約 1.42m、高さ 13cm、東辺側で 1.02m、高さ 12cmを測る。またベッド状遺構の上面は検出面から深さ 6～10cm程度で、覆土は住居内埋土上層の黒褐色（7.5YR3/1）粘質土のみ堆積する。壁溝が南壁下から西壁下、またベッド状遺構下の西半部にかけて検出した。幅は均一ではなく約 15～40cmで幅があり、南西隅のコーナー部分では途切れている。深さも床面より南壁側で最深 11cm、西壁側で 19cmを測る。

主柱は 4 本で、P 8・P 12・P 14・P 15 の柱穴がこれにあたる。主柱間は北東－南東（P 14－P 15）2.65m、南東－南西（P 12－P 8）2.45m、南西－北西（P 8－P 15）2.52m、北西－北東（P 15－P 14）2.44mを測り、建物形状と同様に南北間でやや長い。主柱穴の平面形は概ね円形で、大きさは径 25～30cm前後、平均径 27.5cmである。深さは 69cm～83cm、平均径 78cmを測る。掘り込みはいずれもほぼ垂直であり、根石等を有するものは認められなかった。

床面中央部で炉と推定する土坑を検出した。全体形は約 83cm×80cmの不整形を呈し、その中に 71cm×46cm、深さ 33cmの平面楕円形の深い穴を有する。坑内の埋土は細かく 4 層に分かれるが、上下 2 層に大別することが出来る。上層は褐灰色土と灰褐色土からなり、前者の土は坑内中央最上部に限られ、後者は土坑全体を覆う。下層は中央穴の埋土で、その大半は細かい焼土や炭を多く含むにぶい黄褐色粘質土からなり、地山の土もブロックで混入する。また下層の上位中央にはわずかに黄橙色粘質土の地山の土があり、上層との境になるその上面には炭の堆積が極薄くみられた。結果、炉は当初、深い穴の部分で、一定の使用期間後にその部分を埋め、浅くして建物廃棄時まで使用したと考える。なお、土坑内部の壁面および底面は被熱による硬化はあまりみられなかった。また、炉の肩部には小柱穴および杭跡かとみられる小穴が深い穴を取り巻くような位置に複数存在する。これらは炉に関わるものと推定するが、その機能等は定かでない。

出土遺物としては弥生土器があり、東壁側のベッド上面から壺（5）、東壁中央部近くの床面上からは口頸部を欠き、底部が上になった胴径約 34cmの中型壺（7）、また南側中央壁溝付近から完形に近い小型壺（4）などが出土した。ただし、土器類は埋土中も含めて総じて少量、小片であり、そのため、大半は建物廃棄時に持ち出されたものと推察する。なお、南壁寄りの床面上で拳大の礫石 10 個が出土し、うち 9 個が意図的に集められた状態のまま検出された。本礫石の用途としては、つぶて石あるいは土器の支えや柱の固定に用いたなど考えられるが定かではない。

本建物の時期は、詳細な時期を比定できる良好な土器が少ないために確定ではないが、弥生時代後半から終末期にかけてのものとする。なお、放射性炭素年代測定（AMS 法）の結果、中央炉から検出された炭化材の暦年較正年代（1 σ ）は AD130～AD214 の値が示された。

SI 5（第 9 図 図版 10）

2 区中央部に位置する。建物の南側が SI 4 および後世の削平で大きく削られており、建物内北側の床面と北壁から東壁北半部にかけての部分を検出した。全体の平面形は隅丸方形と推定され、北壁は長さ 5.25m、東壁の残存長は 3.20mを測る。建物内の埋土は細かい地山の土が混じる暗褐色（7.5YR3/3）粘質土の単層で、床面は貼床でなく地山である。床面までの深さは大部分が検出面からわずか 5～7cmで、標高 77.16cm前後にあたる。SI 4 のベッド状遺構の上面との高低差はあまりない。また床面では壁溝および炉は認められなかった。さらに主柱穴が 4 本柱と想定すれば、床面

東寄りある P 61（深さ 66cm）と SI 4 のベッド状遺構下の西寄りで検出した P 27（深さ 63cm）が北側東西筋を構成（柱間 2.7m）する支柱穴の可能性を有する。ただし、南側の 2 本については既に消失していたことを含め、今後十分な検討が必要である。なお、配置的には SP58 がその一つと考えられるが、本柱穴内からは中世の土師器が出土しており、時期的に異なる。

SI 5 の出土遺物には弥生土器、石器小剥片（姫島産黒曜石産）があるが、極少量である。そのため、建物の時期は遺物からは決めかねるが、建物の平面形や他の遺構との切り合い関係から、SI 4 より先行するものの、大きな時期差は無いものとする。

なお、建物北東側壁の外回りに外辺が弧状を呈する深さ 3 cm 前後の極浅い段差面が残存したが、SI 5 の建て替えの痕跡かなどは不明である。

SI 6（第 11 図 図版 13）

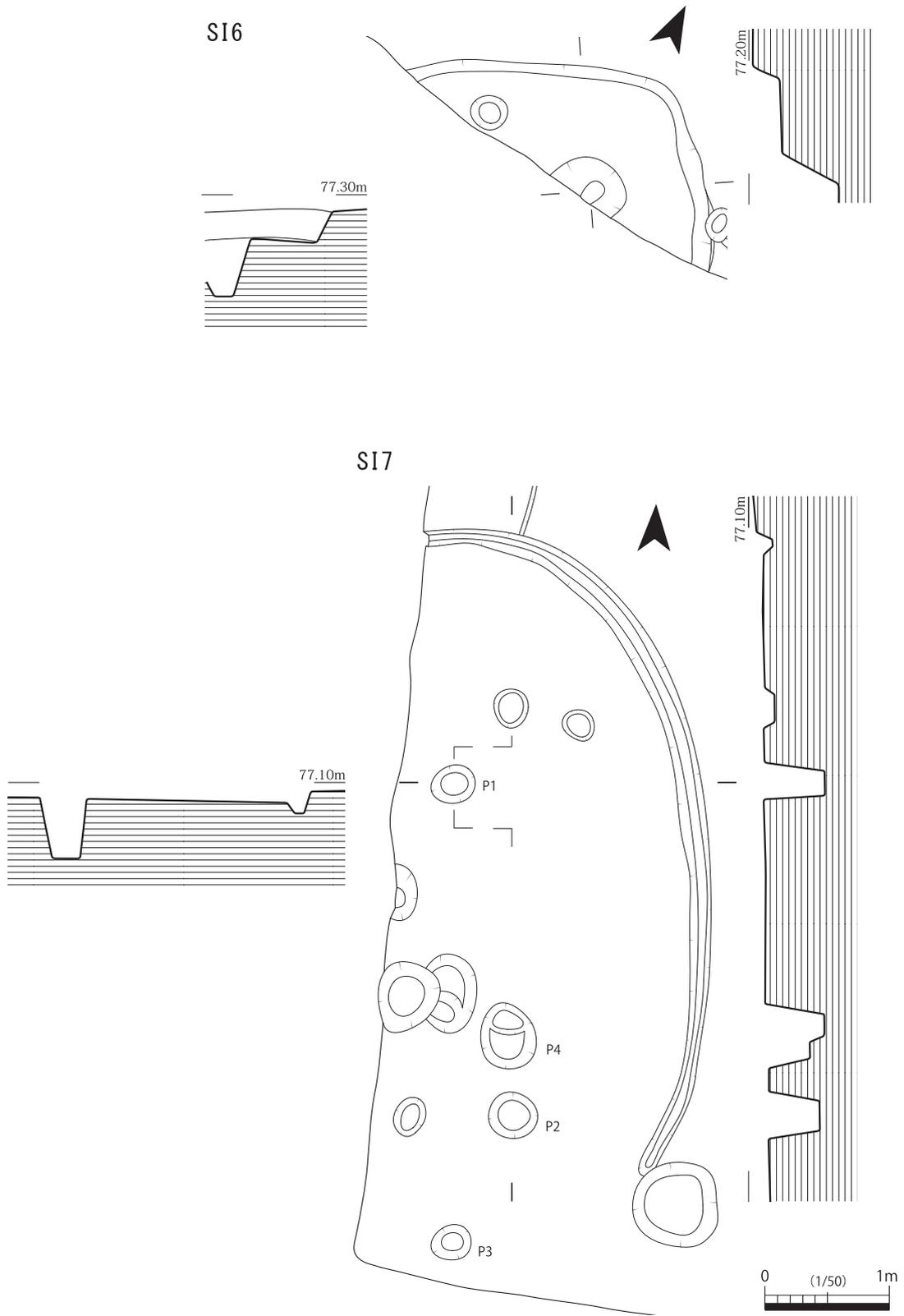
2 区中央南端に位置する。大半は調査区外で、隅丸方形とみられる北隅部分のみ検出した。埋土は暗褐色（7.5YR3/3）粘質土の単層で、検出した部分での規模は北西側壁の長さ 2.0m、北東側壁 1.53m を測り、床面までは検出面から最深 15cm である。床面は地山面で、壁溝は無い。ただし、調査区外壁面にかかる P 1 は床面で検出し、径が 50cm 以上、深さ 57cm を測ることから、支柱穴の可能性があると推察する。建物内での出土遺物には柱穴から弥生土器・炭小片が若干ある。建物の時期は遺物が少ないために決定しかねるが、埋土および建物の平面形より近接する SI 4 と概ね同様な時期ではないかと考える。

SI 7（第 11 図 図版 13）

2 区南東端に位置する。平面形は遺構の西半部が調査区外にあり、また南側は削平され、消失しているために全容は明かでないが、一部残存する壁溝の平面形状からやや楕円に近い円形と推察する。検出面での規模は長さ 6.4m 以上、幅 1.43m 以上で、床面の深さは検出面から最深 12cm である。壁溝は最大幅 22cm、深さは床面から最深 12cm を測る。建物内の埋土は壁溝も含めて、小石や砂粒、地山の土を小ブロックで含む暗褐色（10YR3/3）粘質土である。床面は地山であり、貼床はない。また炉は検出しておらず、支柱穴は確定ではないが、P 1（深さ 49cm）・P 2（深さ 42cm）がその可能性がある。出土遺物は弥生土器小片が少量ある。建物の時期は SI 1 と同様の平面形から弥生時代中期かと推察する。

SI 8（第 12 図 図版 14）

1 区の北西部に位置する。8 本の柱穴からなる円形の柱穴列で、中央部に土坑（SK19）が確認された。検出状況から、8 本の支柱穴を持つ円形竪穴建物であったと推定する。8 本の支柱穴の平面形は、円形、楕円形、不整円形があり、規模は径 40～80cm、深さは 20cm～60cm である。各支柱穴間の距離は SP247 から半時計回りに、2.61m、2.73m、2.45m、2.44m、2.83m、2.60m、2.64m、2.77m を測り、平均は 2.33m となる。なお東西、南北の支柱穴間距離は 8.0m であり、支柱穴の南北長から全容を推定すると、全長は約 9.8m、床面積は約 75㎡となる。推定規模は SI 1 よりも大型であり、今回検出した 11 棟の竪穴建物の中で最も大きい。また 8 本の支柱穴のうち、5 つの底部から礎石とみられる上面が平坦で大型の石灰岩、あるいは直径 15cm の石灰岩破片が検出されており、SI 1 の例と類似する。



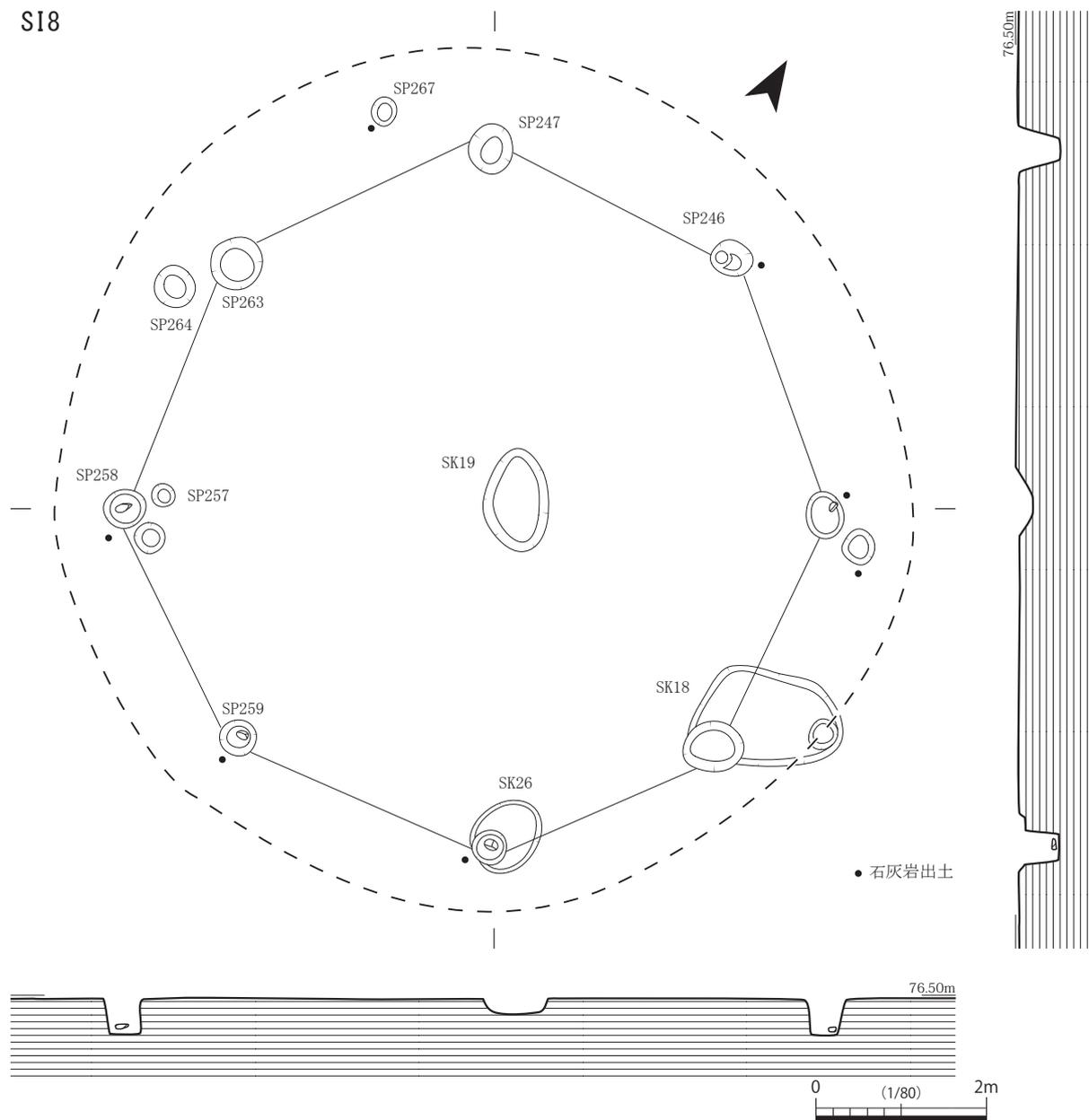
第11図 SI6・7 実測図

柱穴列中央部に位置する土坑（SK19）の平面形は不整形であり、規模は長軸 122cm、短軸 77cm、遺構上面からの深さは 28cmを測る。断面形は台形で、底面は中央に向かってわずかに傾斜する。土坑内埋土は 2層に分かれ、炭、焼土を多量に含む黒褐色（10YR2/2）粘質土の下に黒褐色土を少量含む褐色（10YR4/4）粘質土が堆積する。

主柱穴及び土坑から遺物の出土はほとんどなく、それぞれの埋土から弥生土器細片がわずかに出土するのみである。埋土中の遺物、及び SI 1 の存在から、遺構の時期は弥生時代中期前半と推察する。
SI 9（第 13 図 図版 14）

1 区の北東部に位置する。4 本の柱からなる柱穴列で、中央部に土坑（SK20）が確認された。遺構の東半部が調査区外にあるため全容は明らかでないが、6 本の主柱穴を持つ円形竪穴建物であったと推定する。確認された 4 本の主柱穴の平面形は不整円形あるいは楕円形を呈し、規模は径 20 ～ 60cm、深さは 20 ～ 80cmである。各主柱穴間の距離は SP271 より半時計回りに、248cm、277cm、

SI 8



第 12 図 SI 8 実測図

285cmを測り、平均は270cmとなる。なお南北の支柱穴間距離は6.0mであり、確認された支柱穴の南北長から全容を推定すると、全長約7.8m、床面積は約48㎡となる。また、4本の支柱穴のうち、2つの底部から石灰岩が検出された。

柱穴列中央部に位置する土坑（SK20）の平面形は円形であり、規模は70cm、深さは2cmと非常に浅い。土坑内埋土は焼土粒を少量含む暗褐色（10YR3/3）粘質土がわずかに堆積するのみであり、土坑の大部分は削平されていると推定される。被熱の痕跡も確認できておらず、中央炉として機能したかについては不明である。また、SP273からは出土した炭化材が検出され、樹種同定の結果コナラ属アカガシ亜属であることが分かった。

支柱穴及び土坑から遺物の出土はほとんどみられず、それぞれの埋土に弥生土器の細片がわずかに含まれる。また、SP273から出土した炭化材に対して放射性炭素年代測定（AMS法）を実施した結果、暦年較正年代（1σ）はBC43～AD25という結果を得た。遺構の時期については、概ね弥生時代中期前半と推定する。

SI10（第13図 図版15）

2区の北東部に位置する。5本の柱穴からなる円形の柱穴列で、中央部に土坑（SK65）が確認された。遺構の東部分がわずかに調査区外へ至るが、6本の支柱穴を持つ円形竪穴建物であったと推定する。確認された5本の支柱穴の平面形は円形、または不整形円形であり、規模は径20～60cm、深さは20～60cmである。各支柱穴間の距離はSP117より時計回りに2.16m、1.88m、2.34m、2.34mを測り、平均は2.18mとなる。なお東西、南北の柱穴間の距離は5.2mであり、確認された支柱穴の南北長から全容を推定すると、全長約7.2m、床面積40㎡となる。また、5本の支柱穴のうち、3つの底部から石灰岩が検出された。

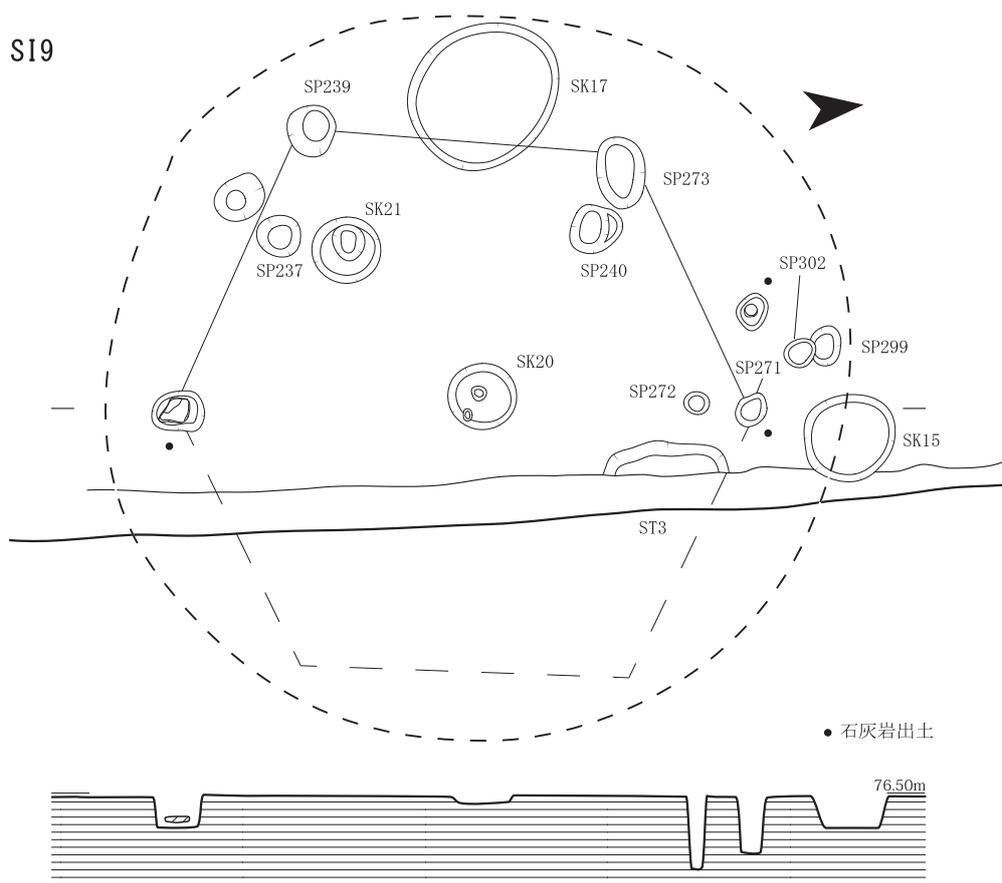
柱穴列中央部に位置する土坑（SK65）の平面形は不整形円形であり、規模は長軸106cm、97cm、深さ13cmを測る。なお、土坑は炉様の焼土坑であり、土坑内全体に被熱による硬化がみられた。被熱の痕跡から、SI10中央炉として機能していたと推定される。またSP117からは炭化材が出土しており、樹種同定の結果カナメモチであることが分かった。

支柱穴及び中央土坑からの出土遺物はほとんどなく、弥生土器細片がわずかに検出されたのみであるが、SP117から出土した炭化材に対して放射性炭素年代測定（AMS法）を実施した結果、暦年較正年代（1σ）はBC47～AD210という結果を得た。遺構の時期については、概ね弥生時代中期前半であり、放射性炭素年代測定の結果から、SI9とほぼ同時期のものであると推定する。

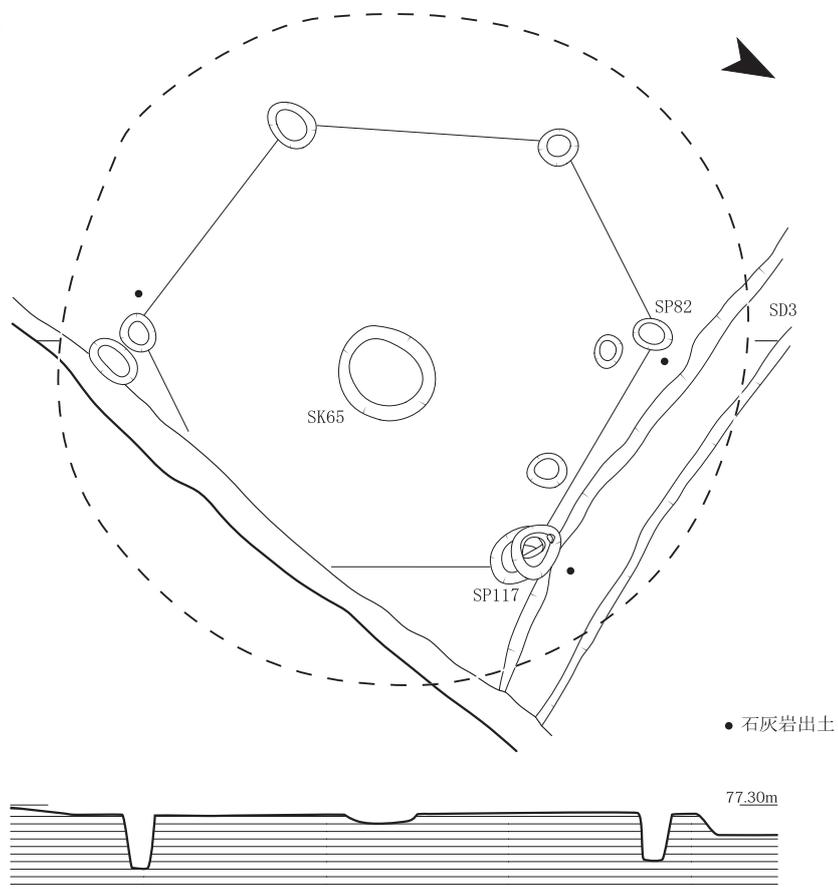
SI11（第14図 図版15）

2区中央東部に位置する。9本あるいは8本の柱からなる円形の柱穴列で、中央に土坑（SK64）が確認された。検出状況より、9本または8本の支柱穴を持つ円形竪穴建物であったと推察する。南西部の柱穴配列（SP35・37・45）がやや不規則であり、南側が入り口部で開口部が広いなどの要素を考慮すると、8本の支柱穴である可能性が高い。確認された支柱穴の平面形は円形、または不整形円形であり、規模は径20～60cm、深さ20～80cmである。支柱穴間距離はSP49より時計回りに2.35m、2.08m、2.33m、2.21m、1.92m、2.05m、2.39m、3.26m、1.64mであり、平均は2.25mとなる。なお支柱穴が8本であると推定した場合、SP184－SP37間の距離は4.73mである。

SI9



SI10

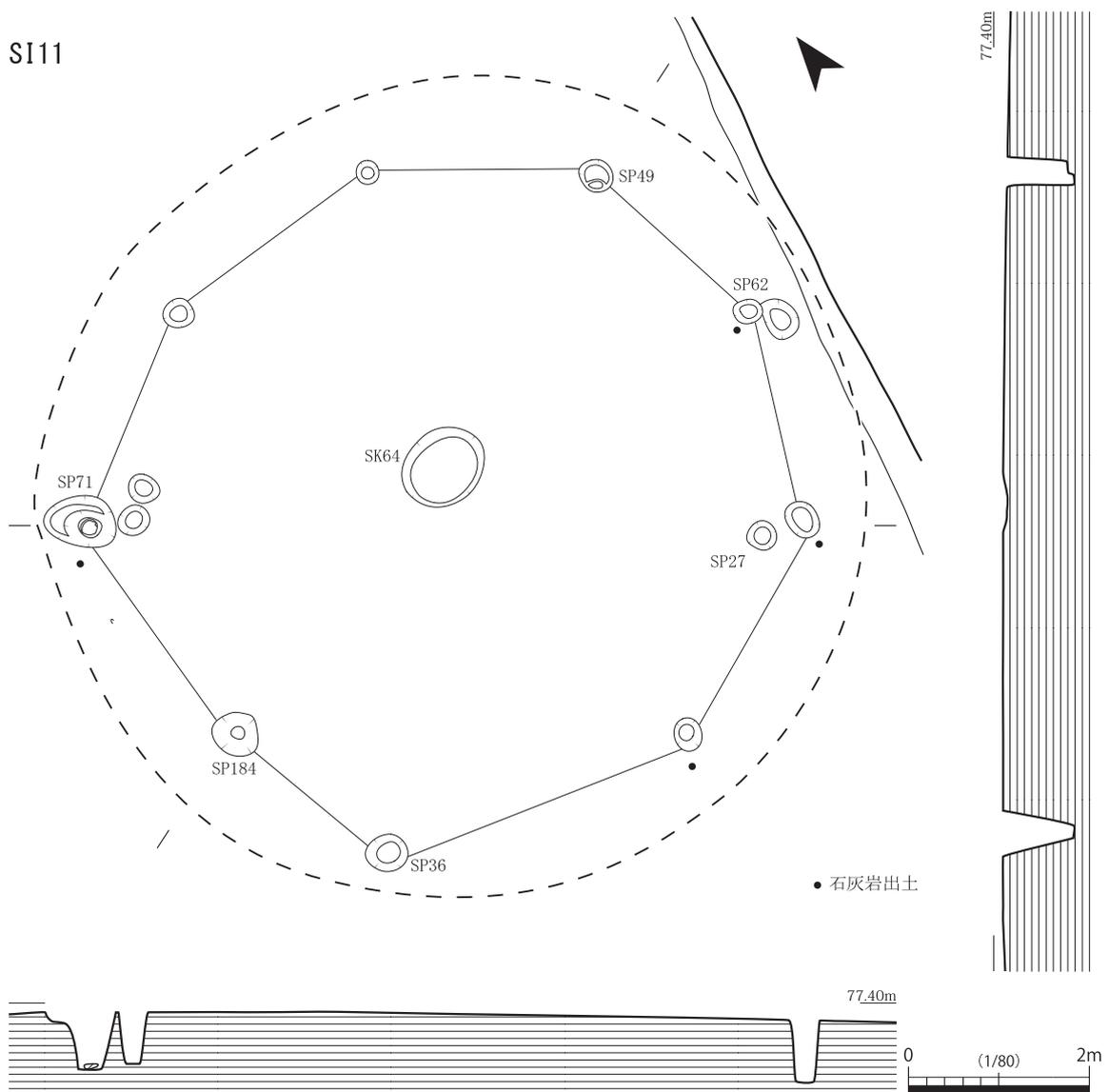


第13图 SI 9・10 实测图

東西、南北の柱穴間の距離は 7.5m であり、確認された主柱穴の南北長から全容を推定すると、全長約 9.0m、床面積 64㎡となる。この他、9本の主柱穴のうち、4つの底部から石灰岩を検出した。

柱穴列中央部に位置する土坑（SK64）の平面形は不整形円形であり、規模は長軸 98cm、82cm、深さ 8cmを測る。なお、土坑は炉様の焼土坑であり土坑内全体に被熱による硬化がみられた。被熱の痕跡から、SI11 中央炉として機能していたと推定される。

出土遺物はほとんどなく、弥生土器細片がわずかに検出されたのみである。遺構の時期については、概ね弥生時代中期前半か。



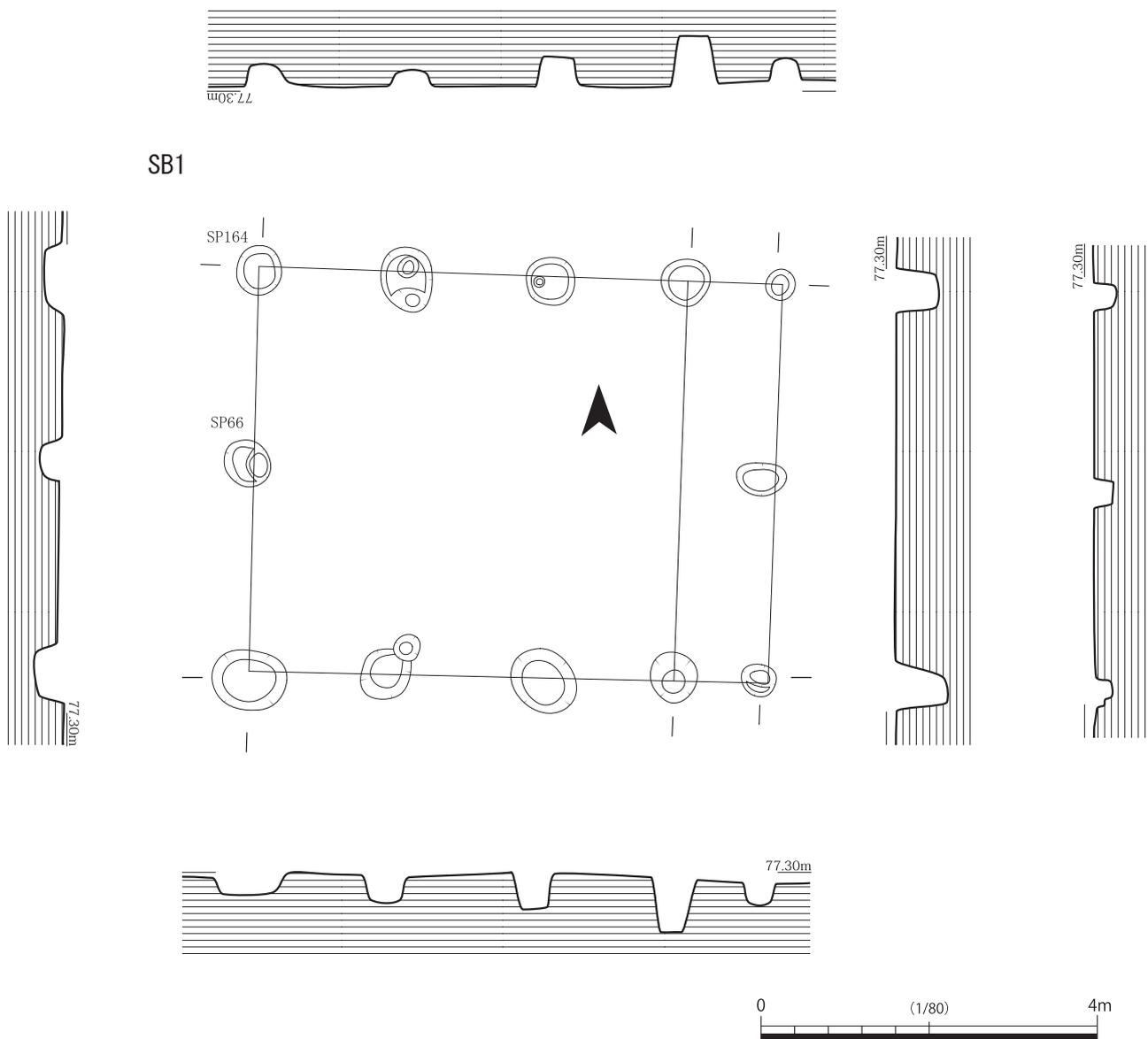
第 14 図 SI11 実測図

(2) 掘立柱建物

2区で復元できた掘立柱建物は1棟である。

SB 1 (第5図 図版15・16)

SB 1は2区北東部に位置する側柱の建物で、桁行3間(5.00m)×梁行2間(4.82m)を測り、東面に廂をもつ。総桁行4間(6.20m)、床面積29.88㎡を測る。柱穴間の平均は桁行方向1.66m、梁行方向2.40m、東側の廂部は1.20mを測る。柱穴規模は直径35～80cm、深さ20～70cm。棟方向はN2°Eである。各柱穴から土師器片・弥生土器片が出土したが、小片のため図化には至らなかった。時期は覆土の色調と出土遺物から、平安時代後期から中世と推定される。



第15図 SB 1 実測図

(3) 溝

溝は各区で検出した。時期は2区のSD 4・SD11などは弥生時代と推定するが、そのほかの多くは現有の農地にも関連する中近世以降の農業用水路跡等と考える。以下、主なものについて述べる。

SD 1 (第16図)

1区北側調査区南端に位置する。主軸は東西方向で、大半は調査区外である。長さ2.9m以上、幅80cm以上、深さ29cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘質土で、遺物に弥生土器・近現代の瓦がある。時期は近現代と考える。

SD 2・3 (第16図)

2区北側に位置する。両溝は東西方向に主軸があって並走し、東端は調査区外にのびる。SD 2は長さ20.16m、最大幅1.33m。最深9cmを測る。SD 3は長さ21.8m以上、最大幅1.12m。最深18mであるが、長さは遺構検出時に西端部分がSK97の上面埋土を掘り込んで、さらに約1.5mは伸びていたことを確認している。埋土は共に灰褐色(7.5YR4/2)粘質土の単層である。遺物はSD 2から東壁面より西に6.2m地点で、比較的残存度の高い瓦質土器の蓋(126)を検出した以外、弥生土器・土師器・瓦質土器・青磁なども出土したが、ほとんど小片で総じて少量である。SD 3の遺物には弥生土器・須恵器・土師器・瓦質土器・陶器・石器剥片があるが、大半が小片である。なお、両溝共に後世に上面が大きく削平されているが、流路方向は床面の高低差から西側から東側へと察する。時期は近世前半と推定する。

SD 4 (第16図)

2区西側に位置し、一部は調査区外に入る。北北東-南南西方向に主軸をとり、平面は細長い方形状を呈すると推定され、検出部分で長さ7.84m、幅87cm、深さ38cmを測る。北端はSI 3の南側壁溝を切っており、壁面は全体的に垂直気味に下がる。埋土は地山の土を小ブロックで含む黒褐色(7.5YR3/2)粘質土の単層で、遺物として中央部床面から約5cm上位より弥生土器の壺(67)を検出し、埋土中から高杯(68)なども出土した。時期は弥生時代後期。なお、ここでは溝としたが、山口市下東遺跡で類例があるように土坑の可能性もあり^{註1}、今後のさらなる検討が必要である。

SD 5

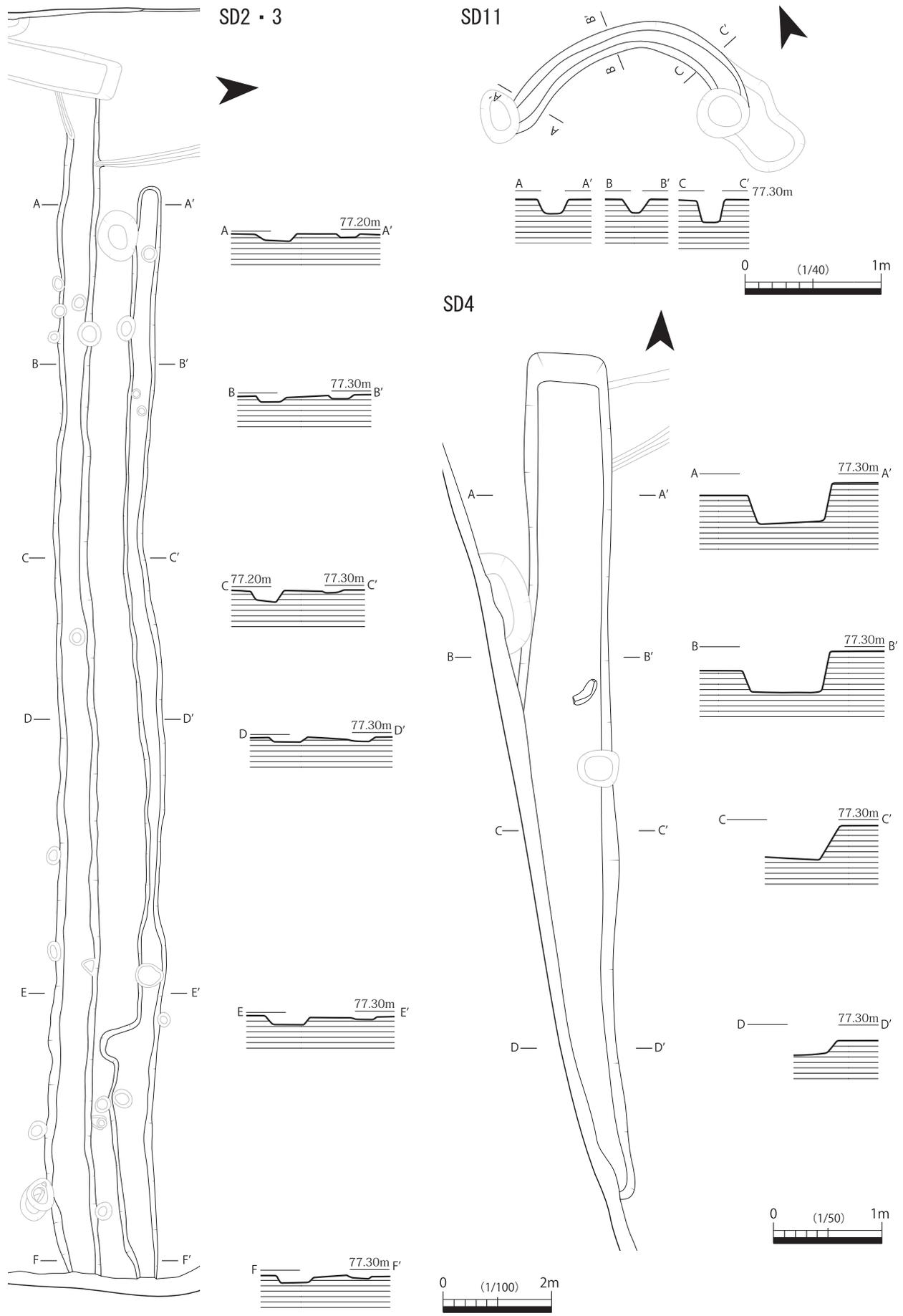
1区南側に位置する。北南に延びる浅い小溝で、北端はSI 1の一部を切り、南端は調査区外に入る。長さは途中で切れているが10.6m以上、幅30cm前後、最深6cmを測る。埋土は褐灰色(10YR4/1)土である。出土遺物は無いが、時期は埋土および主軸の方向などから近世以降とみられる。

SD 8・9

3区北西側に位置する。両者は並走して概ね東西方向にのびて、西端はSK97の埋土上面を切る。SD 8は長さ2.8m以上、幅57cm、深さ14cm、SD 9は長さ4.37m以上、幅66cm、深さ15cmを測る。埋土は共に灰黄褐色(10YR6/2)土の単層で、小石等はあまり含まない。遺物に瓦質土器が少量あり、時期は遺構の切り合い等から近世以降と考える。

SD11 (第16図)

2区中央西寄りに位置する。平面が弧状を呈する小溝で、長さ2.1m、幅20cm前後、最深16cmで、両端は柱穴に切られている。埋土は褐灰色(5YR5/1)粘質土の単層である。出土遺物は無いが、埋



第16图 SD 2~4 · 11 实测图

土および他の遺構との切り合いから弥生時代と推定する。

SD16

1区中央部、SI 1の北側に位置する。北東—南北にのびる小溝で、長さ1.17m、幅17cm、最深部は北東側で8cmを測る。出土遺物に剥片石核(97)があるが、時期は埋土から弥生時代か。

註

1. 山口市教育委員会 1997『下東遺跡』

(4) 墓

墓は1区と2区でそれぞれ2基ずつ、計4基を検出した。いずれも上面が後世に削平をうけて浅くなっており、深さ20～30cm程度にとどまる。人骨も全く認められず、被葬者の性別や年齢等は不明であるが、墓坑の規模からは成人のものであれば屈肢葬と推定する。また4基の内、3基からは木棺に使用したとみられる鉄釘または鉄鏝が出土した。さらに副葬品を伴ったものもあり、造墓の時期はいずれも中世と考える。

ST 1 (第17図 図版17)

1区中央南部に位置し、墓坑の一部はSK52を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、若干西側が幅広い。長さ139cm、中央幅78cm、深さ30cmを測り、長軸方向はN2°Wである。埋土は基本、暗褐色(10YR3/3)土の単層で、小粒状になった地山の褐色土を多く含み、炭、焼土が微量に混じる。

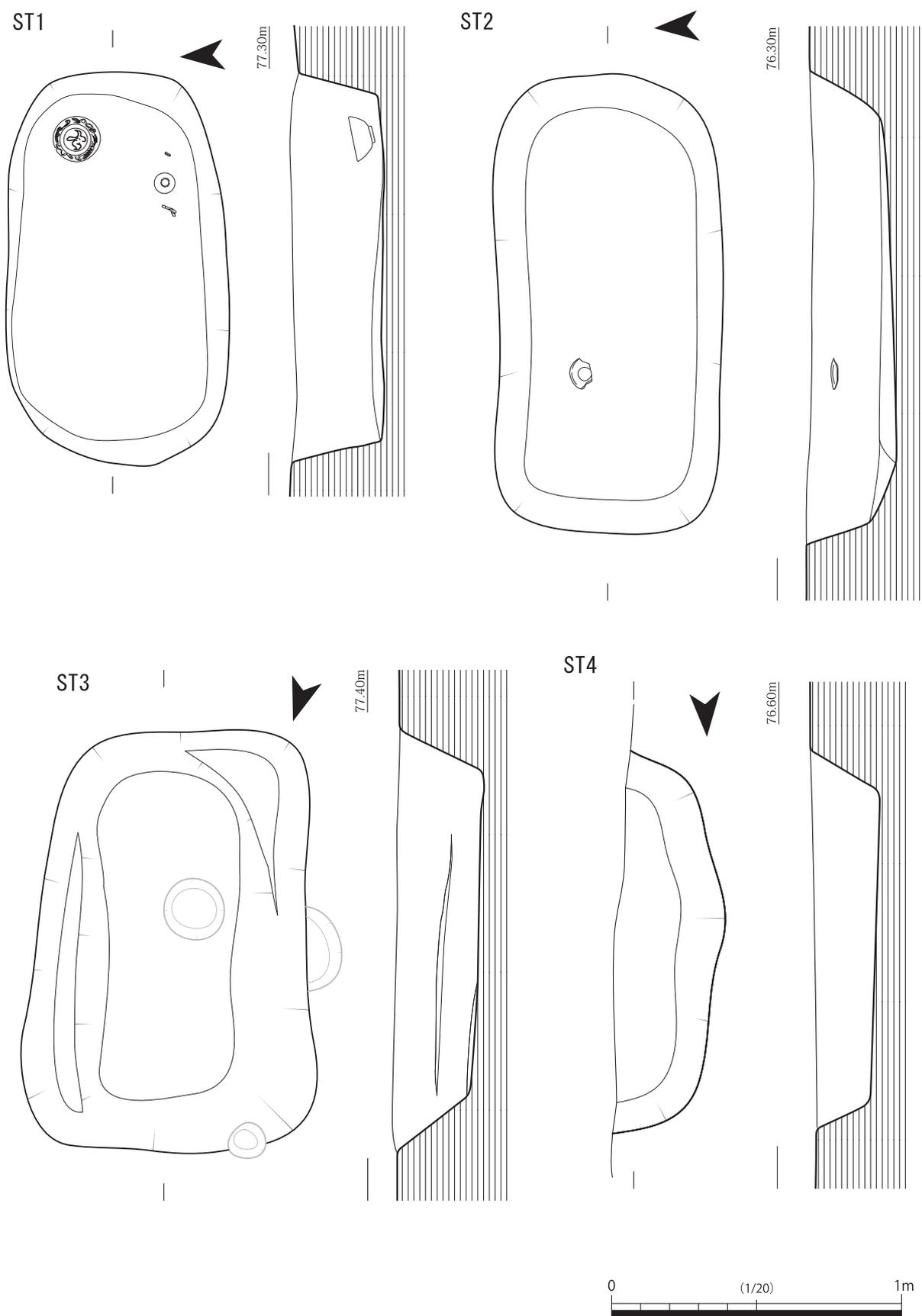
墓坑内の北東側から副葬品として、白磁小皿(129)を内に重ねた青磁椀(128)が床面から2～3cm浮いた状態で検出した。また西壁寄りには白磁の小型壺(130)もあり、合計3点の完形の輸入陶磁器が出土した。また小型壺の付近からは小型の鏝と推定する鉄製品を検出し(131・132)、このことにより棺の痕跡は確認できなかったものの、木棺が置かれていたと推察できる。なお、県内の中世土坑墓では、被葬者の頭部側に副葬品を配した事例が多くみられることから、本被葬者の埋葬頭位は東側である蓋然性が高い。時期は副葬品から12世紀中頃から後半代と比定する。

ST 2 (第17図 図版18)

2区北西部に位置する。平面形は隅丸長方形で、長さ160cm、幅77cm、深さ24cmを測り、長軸方向はN83°Wである。埋土は地山の土を多量に含む暗褐色(10RY3/3)土の単層で、炭が少量、焼土も微量に混じる。遺物として墓坑内のやや西側床面より約18cm上位で、燈明皿として使用したと思われる土師器小皿(122)を検出した。また埋土中からは他の中世土師器や弥生土器、須恵器の小片の混入も認められたほか、木棺に使用したと考える木質が付着する鉄釘1本(133)が出土した。時期は14世紀後半か。

ST 3 (第17図 図版19)

1区北東部に位置し、墓坑の約半分は調査区外におよぶ。平面形は長楕円形と推定され、長さ134cm以上、幅38cm以上、深さ24cmを測り、長軸方向は北北東—南南西である。埋土は黒褐色(10RY3/3)粘質土の単層で、小粒化した地山の褐色粘土をかなり多く含むほか、炭、焼土もわずかに混じる。調査した墓坑西半部では副葬品の検出がなかったが、埋土中から中世の土師器小片数点



第17図 ST 1~4 実測図

のほか、木質が付着する鉄釘 5 本（134・135）が出土した。時期は中世と察するが、詳細は不明。

ST 4（第 17 図 図版 4）

2 区中央付近東南側に位置する。他の 3 基と異なり、副葬品や鉄釘等の出土は無く、埋土の観察でも棺の痕跡は見いだせなかったものの、埋土が 2 区の ST 2 と同様に、また坑内から弥生土器に混じって中世の土師器の小片数点が出土している。本遺構の時期が中世である可能性が高いこと、さらには遺構の形状等も勘案して墓と推定するものである。墓坑の平面形は隅丸長方形で、長さ 146cm、幅 93cm、深さ 31cm を測り、長軸方向は N 16°W である。なお、床面および肩部で検出した柱穴は本遺構に付随するものではなく、弥生土器（46）は後世の混入と考える。

（5）土坑

土坑は 1 区で 61 基、2 区で 7 基、3 区で 34 基の計 102 基が検出された。このうち、1 区は弥生時代、3 区は近世から近代にかけてのものが多く、特に 1 区では弥生時代中期初頭から前半にかけて土坑群を形成していたものと考えられる。

1 区の弥生時代土坑の平面形は、円形と隅丸長方形・楕円形に大別される。円形土坑については、断面形が方形や袋状を呈し、深く掘りこまれるものが多く、検出状況から貯蔵穴として造作されたものと推定される。なお、袋状土坑は底面中央に柱穴が伴う場合があるが、本調査において土坑底面の中央柱穴が確認されたものは 1 基のみである。また、貯蔵穴と推定される土坑の中には埋土中から多数の土器が出土したものがあがるが、完形品を伴っておらず、出土状況からみて最終的に廃棄土坑として用いたと察せられる。以下、1 区南側調査区で検出した弥生時代の土坑のうち、代表的なものについて述べる。

SK 9（第 18 図）

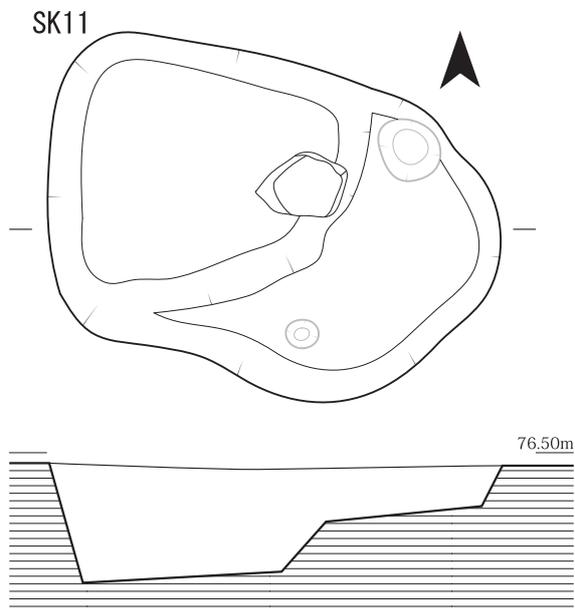
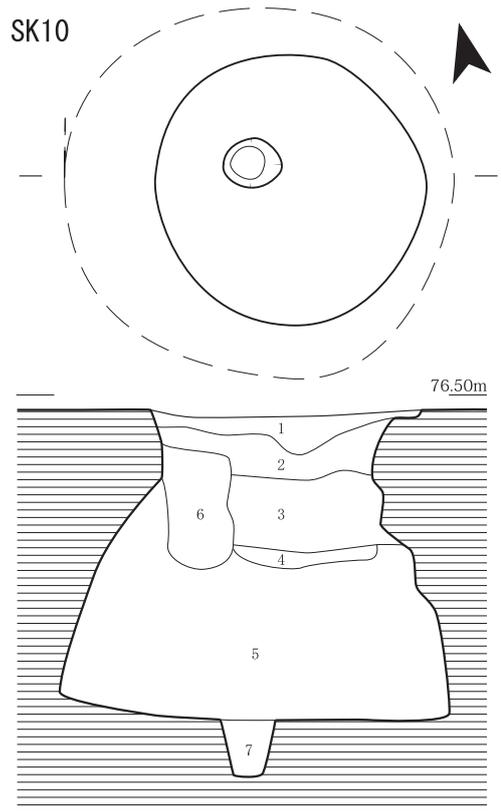
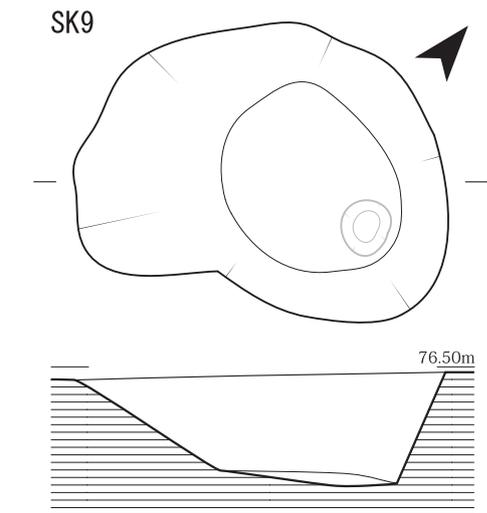
調査区北西隅に位置する。平面形は不整形で長径 145cm、短径 114cm、最深 46cm を測る。断面形は逆台形である。底面は東側へやや傾斜し、埋土は暗褐色粘質土の単層である。埋土には弥生土器甕（9）、石器剥片などの遺物が包含される。

SK10（第 18 図 図版 20）

調査区北西隅に位置する。平面形は円形で長径 109cm、短径 97cm、最深 122cm を測る。断面形は中央部がくびれた袋状を呈し、底面付近に最大径を持つ。底面は平坦であり、その中央やや北西寄りに径 23cm×20cm、深さ 22cm の平面円形の柱穴を有する。埋土は複層に分かれ、遺物は弥生土器、打製石斧、砥石、搔器など出土した。

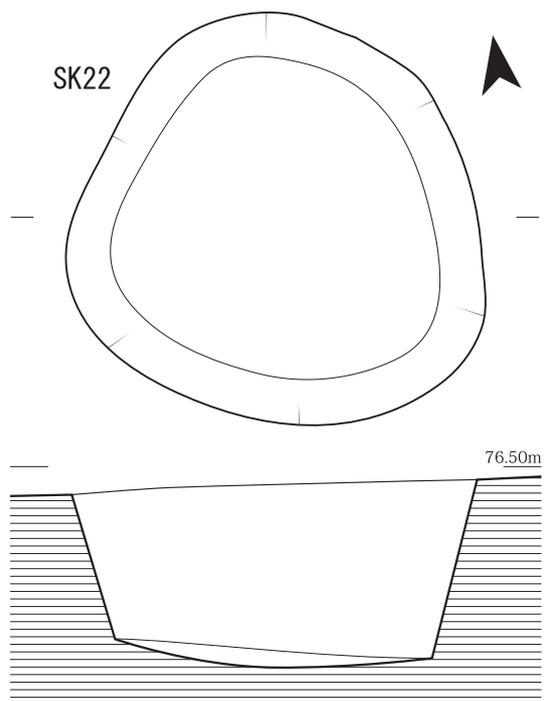
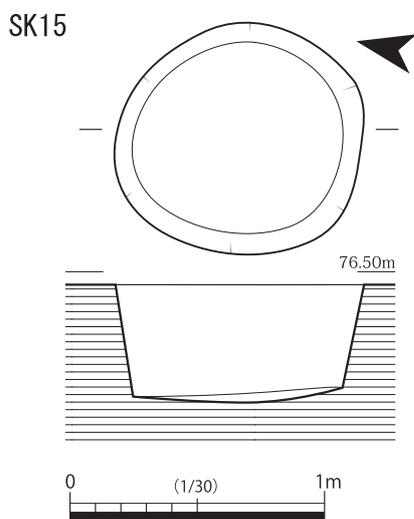
SK11（第 18 図）

調査区北西隅に位置する。平面形は不整形であり、隣接する SK12 と切り合う。長径 124cm、短径 120cm と推察される。断面は逆台形を呈し、底面は東側に若干傾斜する。埋土は炭化物を多量に含む暗褐色土と黄褐色土の 2 層に分かれる。遺物は弥生土器（11～13）、打製石斧、磨石（81）、石器剥片が出土した。



土層凡例
SK10

- 1 暗褐色 (10Y R3/4) 粘質土
 - 2 暗褐色 (10Y R3/3) 土 地山土の小ブロック・炭小粒を少量含む
 - 3 黒褐色 (10Y R2/3) 粘質土 炭小粒を含む
 - 4 黒色 (10Y R2/1) 粘質土 炭小粒を多く含む
 - 5 黒褐色 (10Y R3/2) 粘質土 炭小粒を含む
 - 6 褐色 (7.5Y R4/6) 粘質土 地山の土の崩落ブロック
 - 7 (床面小柱穴) 褐色 (7.5Y R4/5) 粘質土 微細の炭含む
- 地山：褐色 (7.5Y R4/6) 粘質土



第18図 SK 9～11・15・22 実測図

SK15 (第 18 図)

調査区北側東壁沿いに位置する。平面形は円形であり、長軸 96cm、短軸 91cm、深さは 49cm を測る。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。埋土には弥生土器 (21)、磨石、石器剥片が含まれていた。

SK22 (第 18 図)

調査区西側やや中央寄りの北に位置する。平面形は不整形円形であり、長軸 166cm、短軸 157cm、深さ 75cm を測る。断面形は逆台形であり、底面は平坦である。埋土は複層に分かれる。遺物は弥生土器 (22・23)、擬無文土器 (24)、石器剥片 (106) の他、骨片が出土した。出土遺物より遺構の時期は弥生時代中期前半と推定される。

SK25 (第 19 図)

調査区中央部西側に位置し、平面形は不整形円形であり、長軸 123cm、短軸 93cm、深さ 32cm を測る。断面形は逆台形であり、底面は平坦である。埋土は暗褐色粘質土と黒褐色粘質土の 2 層に分かれる。遺物は弥生土器 (25)、磨製石斧 (60)、炭が出土した。

SK29 (第 19 図)

調査区中央部西側に位置し、平面形は長楕円形であり、長軸 180cm、短軸 70cm、深さ 20cm を測る。断面形は逆台形であり、底面は中央に向かって緩やかに傾斜する。埋土は褐色粘質土の単層である。遺物は弥生土器、石鏃 (54)、石器剥片が出土した。

SK31 (第 19 図 図版 21)

調査区中央部やや北寄りに位置する。平面形は長楕円形であり、長軸 142cm、短軸 68cm、深さ 54cm を測る。断面形は逆台形であり、底面は平坦である。埋土は暗褐色粘質土の単層である。遺物は遺構上面から約 25cm の深さから弥生土器甕 (26・27) が検出された他、埋土から磨石、石器剥片などが出土した。

SK39 (第 19 図 図版 22)

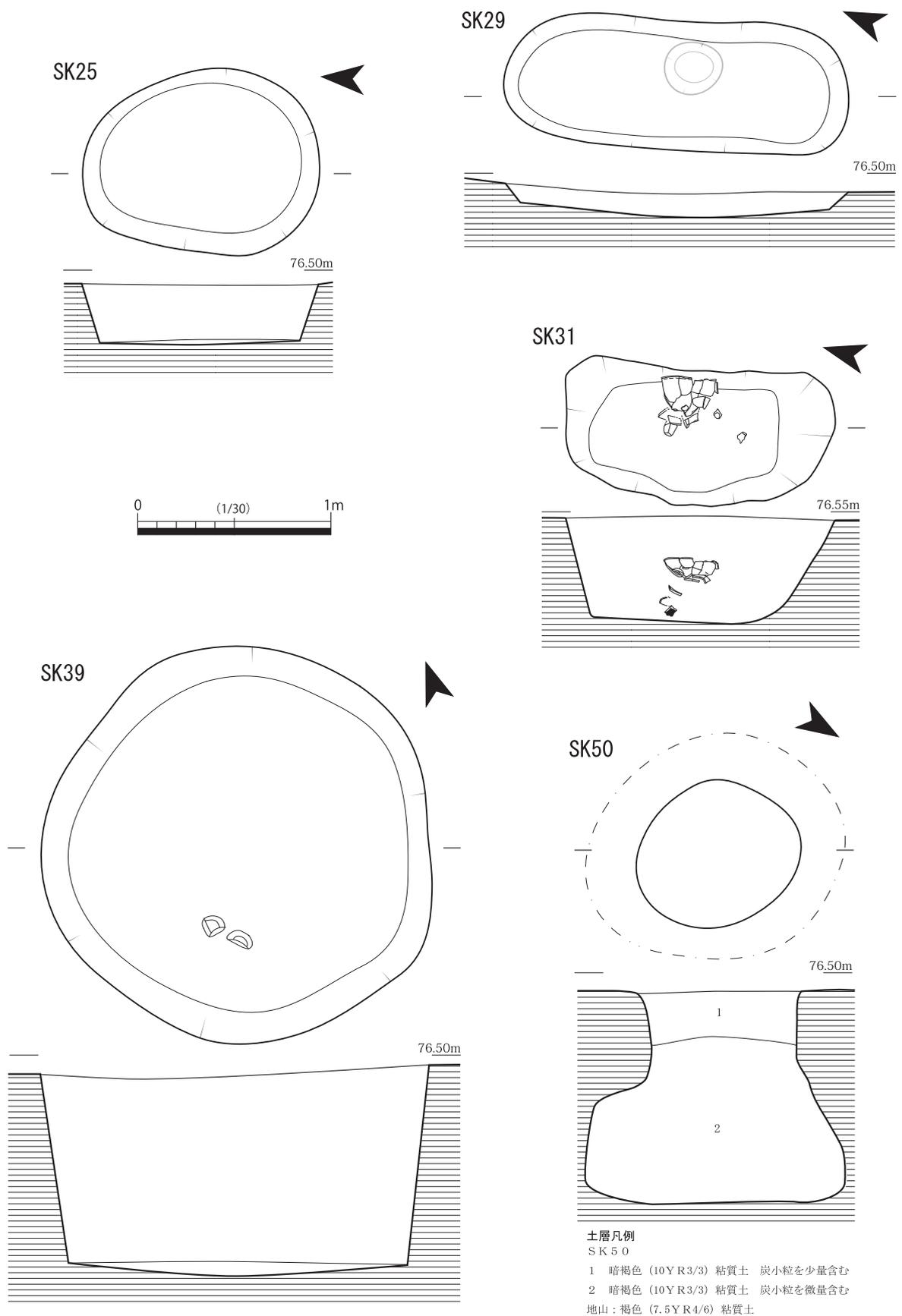
調査区中央部西側に位置する。平面形は円形であり、長軸 207cm、短軸 205cm、深さ 113cm を測る。断面形は方形であり、床面は平坦である。埋土は 3 層に分かれ、床面から炭化物が検出された。遺物は弥生土器片、磨石、砥石、石器剥片、炭が出土した。

SK43 (第 20 図 図版 23・24)

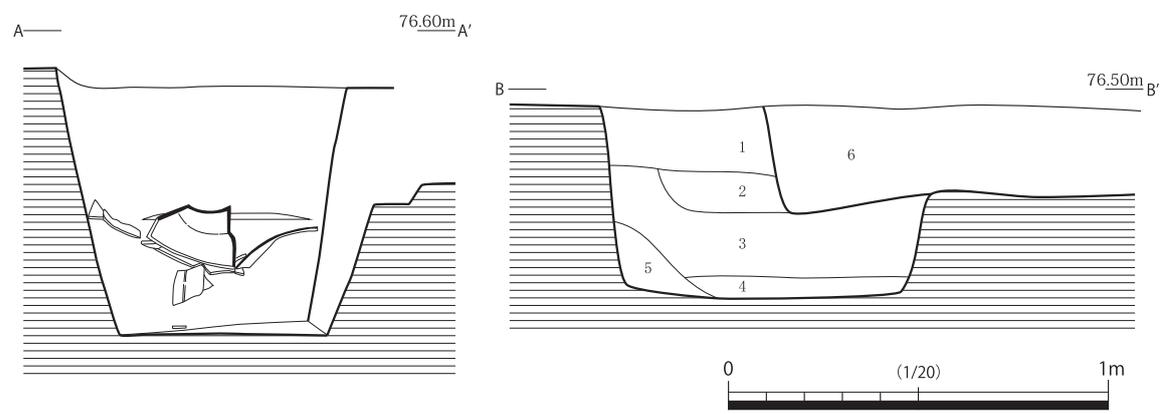
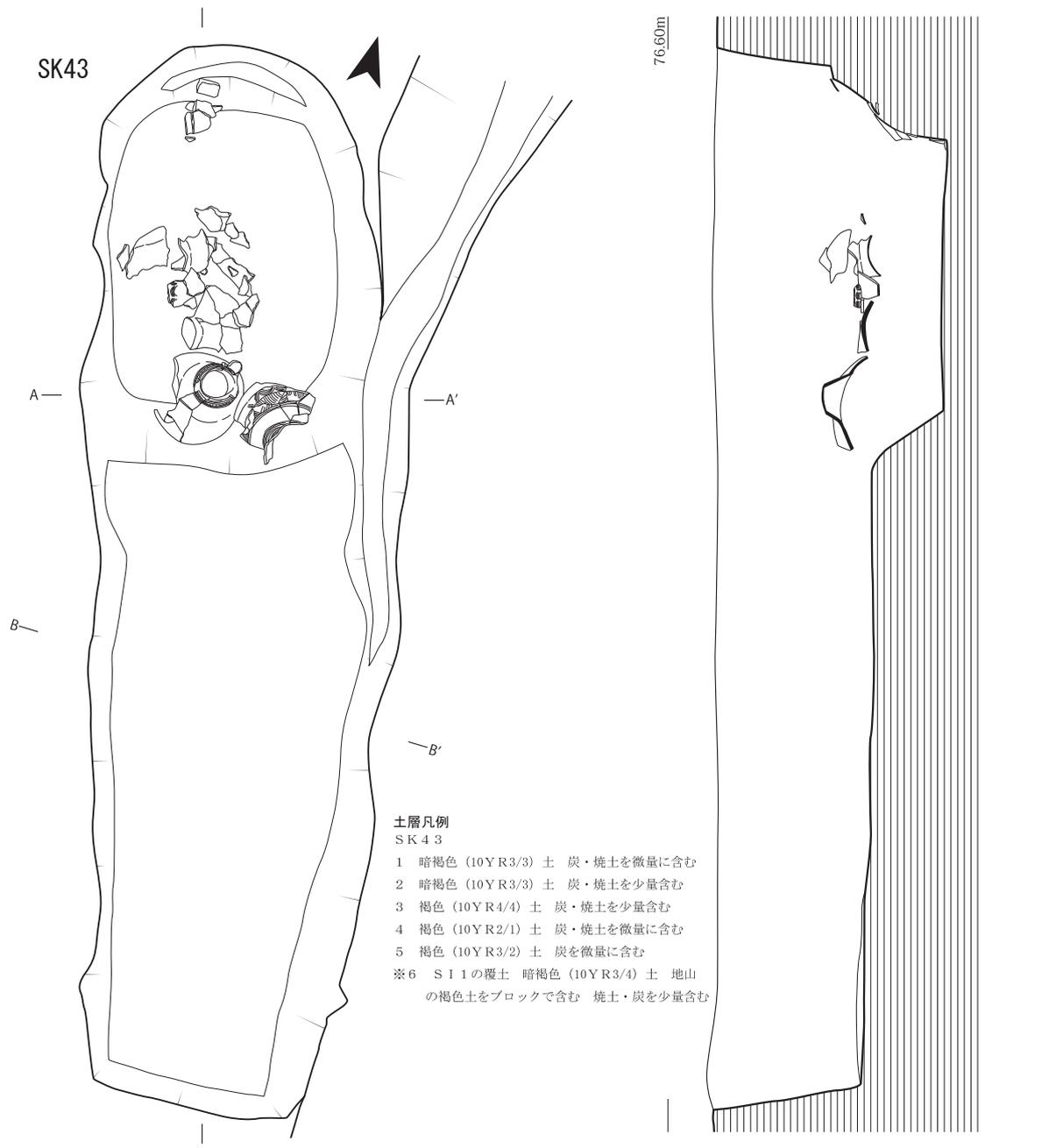
調査区西側中央に位置し、SI 1 と切り合う。平面形は細長い長方形であり、長軸 323cm、短軸 91cm を測る。土坑は二段掘りで南半は遺構上面から深さ 46～48cm にテラス状の平坦面を持つ。埋土は複層であり、SI 1 によって切られることから、時期は SI 1 に先行する。遺物は南半からはほぼ見られず、北半からは遺構上面から深さ 40cm 前後の地点から弥生土器 (28～30) がまとまって検出されたほか、埋土から石器剥片 (105) が出土した。遺物より、遺構の時期は弥生時代中期前半でも初頭に近い時期の可能性はある。

SK50 (第 19 図 図版 25)

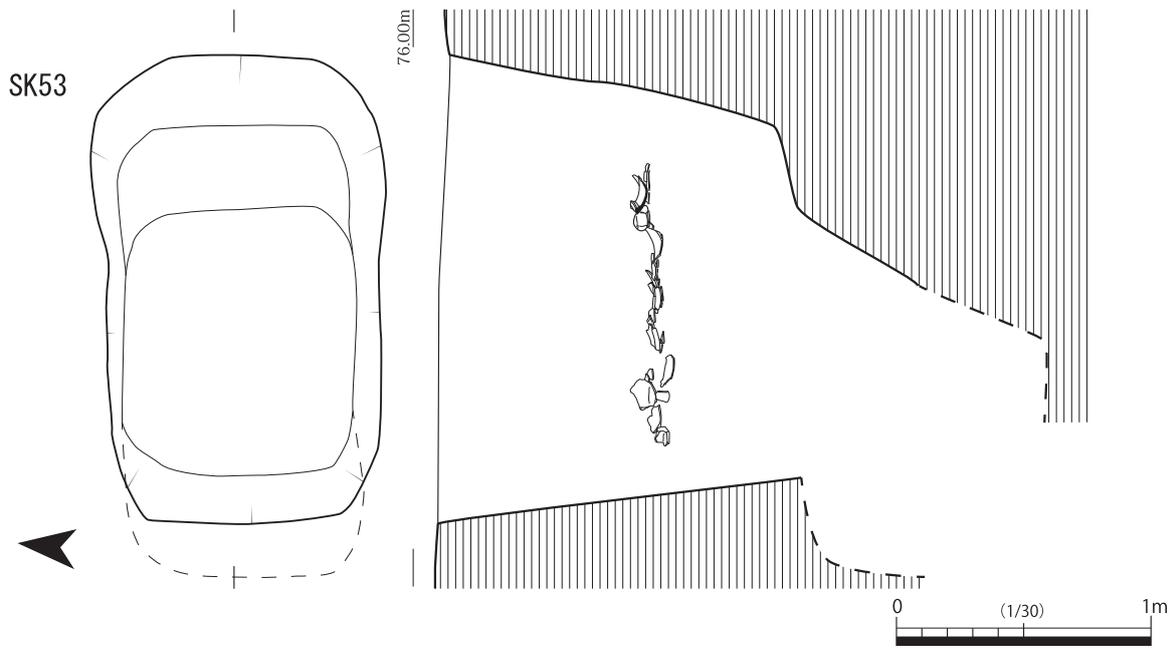
調査区南東部に位置する。平面形は円形であり、長軸 92cm、短軸 90cm、深さ 114cm を測る。断面形は袋状を呈し、上から垂直に掘り下げた後に丸く掘り上げられ、底面付近に最大径を持つ。底



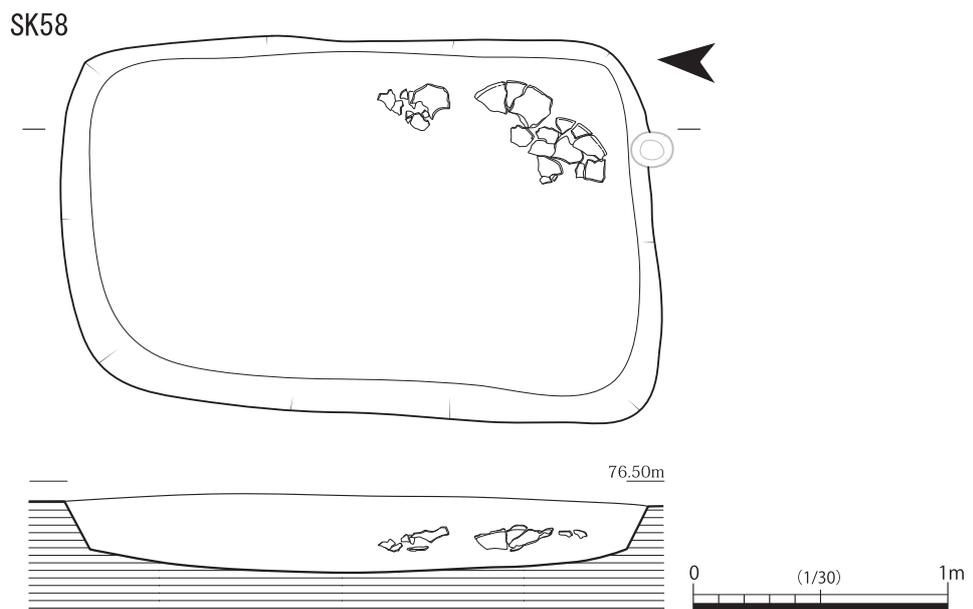
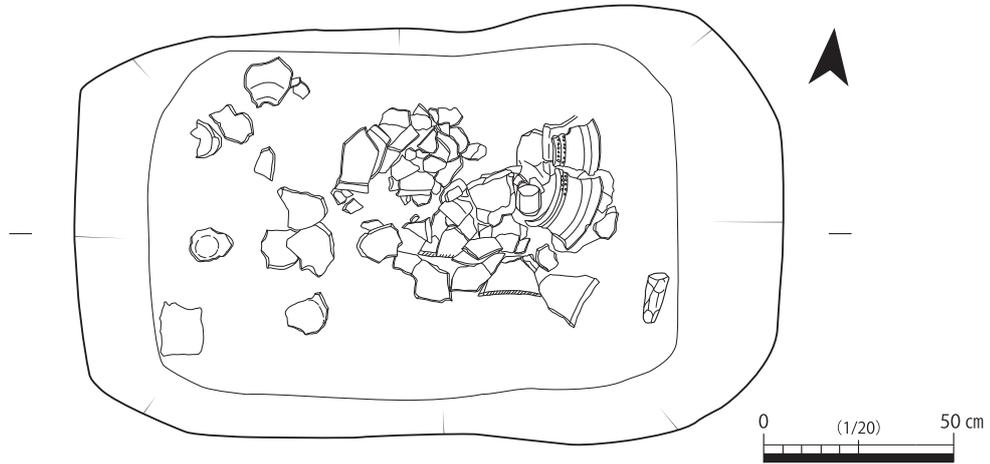
第19図 SK25・29・31・39・50 実測図



第 20 図 SK43 実測図



遺物出土状況



第 21 図 SK53・58 実測図

面は平坦である。埋土は暗褐色土が2層に分かれる。遺物は弥生土器、打製石斧、炭化物が検出された。

SK53 (第21図 図版26・27)

調査区中央部南側に位置、SK42と切り合う。平面形は隅丸長方形で、長軸187cm、短軸116cm、を測り、深さは160cm以上である。2段掘りの様相を呈しており、遺構面下深さ約140cmのレベルで東側は段を有し、西側はオーバーハングするような状況になっており、さらに深くなっている。下位部分は人為的なものではなく、ジバスの影響を受けたものである可能性がある。遺物は遺構上面から深さ約80～90cmの地点から弥生土器(37～43)、打製石斧未製品(71)、砥石(89)、用途不明品(95)、種実などが集中して検出された。時期は弥生時代中期前半。

SK58 (第21図 図版28)

調査区中央南側に位置する。平面形は南側がやや開いた隅丸長方形である。長軸243cm、短軸150cm、深さ31cmを測る。断面は逆台形で、袋状を呈する。底面は中央部にかけて緩やかに傾斜する。埋土は褐色粘質土の単層である。土坑南側の床面付近から弥生土器(44)が検出された。時期は弥生時代中期前半。

以下、個別の実測図及び写真の掲載は無いが、1区で検出された土坑のうち特徴的な検出状況を示すものについて紹介する。

SK5 北側調査区南部に位置し、SK39と似た検出状況を示す。平面形は円形であり、長軸186cm、短軸184cm、深さ89cmを測る。断面形は方形であり、底面は平坦である。埋土は7層に分かれ、底面付近からは炭化物が検出された。遺物は弥生土器、打製石斧、砥石(85)、磨石(75)、削器(74)などが出土した。

SK13 調査区中央北側に位置する。平面形は楕円形であり、長軸204cm、短軸200cm、深さ50cmを測る。断面形は逆台形であり、底面は中央に向かってすり鉢状に傾斜する。埋土は3層に分かれ、埋土中から弥生土器(14・15)、砥石(90)、姫島産黒曜石剥片(101)、安山岩剥片(58)、石器原石(96)、骨などが出土した。

SK14 調査区東側中央に位置する。平面形は円形であり、長軸142cm、短軸129cm、深さ123cmを測る。断面形は袋状を呈し、上から垂直に掘り下げられた後に丸く掘り広げられ、底面付近に最大径を持つ。底面は平坦であり、埋土は褐色土の単層である。土坑中位で弥生土器(16～20)が大量に投棄された状態で検出されたほか、埋土中からは打製石斧、姫島産黒曜石剥片、姫島産安山岩、チャート、片岩が出土した。時期は弥生時代中期前半。

SK17 調査区北部やや東よりに位置する。平面は不整形円形であり、長軸166cm、短軸146cm、深さ41cmを測る。断面形は台形であり、断面形から上部を削平された袋状土坑と推定される。底面は平坦であり、埋土は暗褐色土の単層である。遺物は、図化には至っていないが底面付近で弥生土器が投棄された状態で検出されほか、埋土中から打製石斧、安山岩剥片、緑色片岩、骨、炭などが出土した。

SK22 調査区北部西壁沿いに位置し、SK39と似た検出状況を示す。平面形は不整形円形で、長軸166cm、短軸157cm、深さ75cmを測る。断面形は方形であり、底面は平坦である。埋土は5層に分

かれ、底面付近からは炭化物が検出された。遺物は弥生土器（22・23）、打製石斧、安山岩剥片（106）、緑色片岩、チャート、炭、骨が出土した。

（6）柱穴

1区から3区を通じて約1,500個が比較的密な状態で分布する。柱穴密度が最も高いのは2区であり、検出された柱穴は670個以上を数える。平面形は円形と楕円形が主体である。規模は20cm～60cmと幅があり、比較的大型のものが多い。出土遺物は弥生土器細片がほとんどであるが、一部土師器が完形に近い状態で出土する。以下、特徴的な検出状況を示すものについて述べる。

SP83（第22図 図版29）

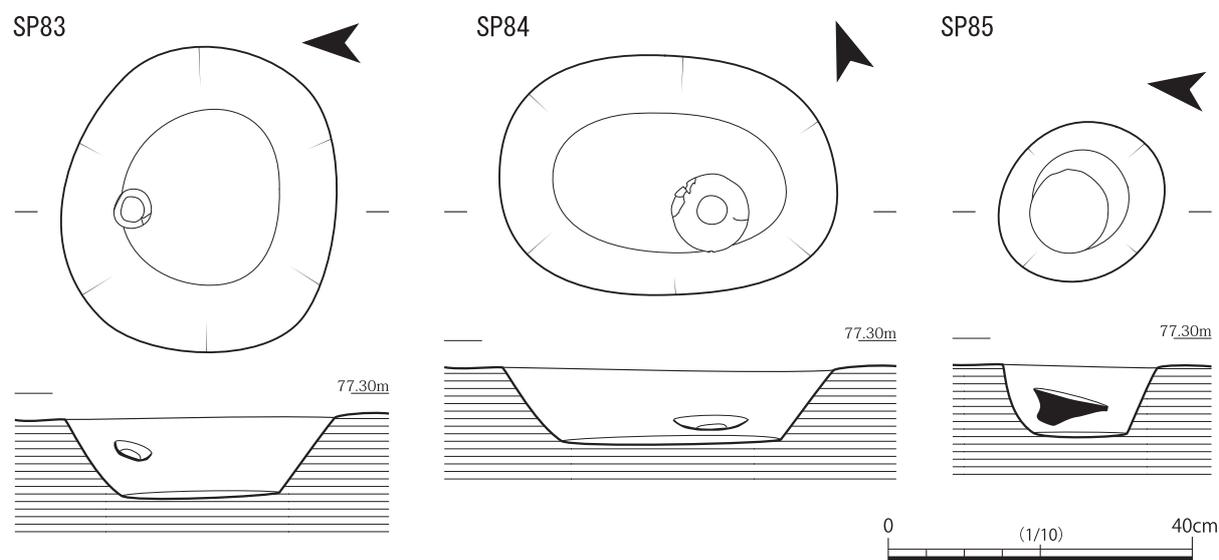
2区北西部に位置する。平面形はやや東西方向に長い不整楕円形を呈し、直径は長径が41cm、短径が36cmである。遺構面から底面までは深さ11cmを測る。埋土の中位で土師器皿（120）が完形の状態で1点出土した。概ね室町時代前半か。

SP84（第22図 図版29）

2区北西部に位置する。平面形は東西方向に長い楕円形を呈し、規模は長径が45cm、短径が31cmであり、遺構面から底面までの深さは10cmを測る。床面付近から土師器皿（124）が完形の状態で1点出土した。概ね室町時代前半か。

SP85（第22図 図版29）

2区北西部に位置する平面形は円形を呈し、規模は長径23cm、短径20cm、面から底面までの深さは10cmを測る。床面付近から高台付杯が1点（125）検出された。12～13世紀か。



第22図 SP83～85 実測図

第1表 主な土坑一覧表

遺構番号	地区	平面形	規模 (c m)			出土遺物	時代	備考
			長軸	短軸	深さ			
SK1	1区	円形	147	(90)	79	弥生土器、石器(黒曜石剥片)、炭	弥生時代	土層は複層。
SK2	1区	円形	115	(46)	25	弥生土器		土層は単層。
SK3	1区	円形	90	(35)	73	弥生土器、石器(安山岩剥片)	弥生時代	袋状土坑。
SK4	1区	楕円形	60	(32)	3			
SK5	1区	円形	186	184	89	弥生土器、石器(打製石斧・砥石・磨石・削器)	弥生時代	土層は複層。
SK6	1区	不整形	110	(47)	124	弥生土器	弥生時代	SD 1の床面で検出。
SK7	1区	円形か	(45)	(45)	13			
SK8	1区	方形か	(116)	(80)	12	弥生土器	弥生時代	竪穴建物跡の可能性あり。
SK9	1区	不整形	145	114	46	弥生土器、石器(敲石・緑色片岩剥片・姫島産安山岩剥片)、炭	弥生時代	土層は単層。
SK10	1区	円形	109	97	122	弥生土器、石器(打製石斧・砥石・削器)、炭	弥生時代	土層は複層。袋状土坑で、床面に小柱穴を伴う。
SK11	1区	不整形	(124)	(120)	63	弥生土器、石器(打製石斧・磨石・安山岩剥片)	弥生時代	東側がSK12と重複。土層は2層。
SK12	1区	不整形	(128)	(69)	25	弥生土器	弥生時代	西側がSK11と重複。土層は単層。
SK13	1区	楕円形	204	200	50	弥生土器、石器(石鏃・砥石・姫島産黒曜石剥片・姫島産安山岩剥片・原石)、骨、炭	弥生時代	土層は3層。
SK14	1区	円形	142	129	123	弥生土器、石器(打製石斧・姫島産黒曜石剥片・チャート・片岩)	弥生時代	土層は単層。多数の土器を投棄。
SK15	1区	円形	96	91	49	弥生土器、石器(磨石・安山岩剥片)	弥生時代	土層は2層。
SK16	1区	不整形円形か	(326)	(301)	(130)			井戸か。
SK17	1区	不整形円形	166	146	41	弥生土器、石器、炭(打製石斧・安山岩剥片・緑色片岩・チャート)、骨、炭	弥生時代	袋状土坑。土層は単層。
SK18	1区	不整形	178	112	17	弥生土器	弥生時代	土層は単層。一部に柱穴が重複。
SK19	1区	不整形	122	77	28	炭	弥生時代か	SI 8の炉か 土層は2層
SK20	1区	円形	70	70	2		弥生時代か	SI 9の炉か
SK21	1区	円形	72	70	13	弥生土器、炭	弥生時代	土層は単層。
SK22	1区	不整形円形	166	157	75	弥生土器、石器(打製石斧・安山岩剥片・緑色片岩・チャート)、骨、炭	弥生時代	土層は5層。
SK23	1区	円形	63	58	12			土層は単層。
SK24	1区	楕円形	138	47	14			土層は単層。
SK25	1区	不整形円形	123	93	32	弥生土器、土師器、石器(石斧・安山岩剥片)、炭		土層は2層。
SK26	1区	不整形円形	91	75	11	弥生土器、石器(磨石)	弥生時代	土層は単層。
SK27	1区	不整形円形	132	86	13	焼土		土層は単層。一部に柱穴が重複。
SK28	1区	不整形円形	115	107	43	弥生土器、炭	弥生時代	土層は単層。
SK29	1区	楕円形	180	70	20	弥生土器、石器(石鏃・安山岩剥片)、炭	弥生時代	土層は単層。一部に柱穴が重複。
SK30	1区	円形	49	46	30	弥生土器、石器(磨石)、炭	弥生時代	土層は2層。
SK31	1区	楕円形	142	68	54	弥生土器、石器(磨石・安山岩剥片)、炭	弥生時代	土層は単層。
SK32	1区	楕円形	95	73	22	弥生土器、炭	弥生時代	土層は単層。
SK34	1区	楕円形	(144)	(107)	12	炭		SK35の一部を切る。土層は単層。
SK35	1区	楕円形	203	106	44	弥生土器、石器(磨石・黒曜石剥片)、炭	弥生時代	SK34の一部を切られる。土層は単層。
SK36	1区	楕円形	144	89	24			SK37と一部重複
SK37	1区	不整形	(167)	120	29			SK36と一部重複。土層は2層。
SK38	1区	隅丸方形	210	204	19	弥生土器、石器(打製石斧・姫島産黒曜石剥片・安山岩剥片)、炭	弥生時代	北側肩部一部に柱穴が重複。土層は単層。
SK39	1区	円形	207	205	113	弥生土器、石器(磨石・砥石・姫島産黒曜石剥片・姫島産安山岩剥片・緑色片岩)、炭	弥生時代	床面に多くの炭化物。土層は3層。
SK40	1区	円形	78	72	50	弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器、炭	中世以降	土層は単層。
SK41	1区	楕円形	183	91	71	弥生土器、石器(黒曜石剥片・安山岩剥片)、炭	弥生時代	土層は単層。
SK42	1区	隅丸長方形	165	(75)	30	弥生土器、石器(安山岩剥片・緑色片岩)	弥生時代	土層は単層。
SK43	1区	長方形	323	91	71	弥生土器、石器(安山岩剥片・緑色片岩)	弥生時代	土層は5層。多数の土器を投棄
SK44	1区	不整形円形	63	51	18	弥生土器、骨?、炭	弥生時代	土層は2層。
SK45	1区	不整形楕円形	213	138	45	弥生土器、石器(姫島産黒曜石剥片・姫島産安山岩剥片)	弥生時代	SP225が重複。土層は2層。
SK46	1区	不整形円形	78	65	51	弥生土器、土師器、籬羽口か		土層は単層。
SK47	1区	円形	88	82	76	弥生土器、石器(安山岩剥片)、炭	弥生時代	土層は単層。
SK48	1区	楕円形	(184)	81	27	弥生土器、石器(姫島産黒曜石剥片・安山岩剥片)、炭	弥生時代	SK49の一部を切る。土層は2層。
SK49	1区	円形	119	97	94	弥生土器、石器、炭	弥生時代	SK48の一部を切られる。土層は単層。
SK50	1区	円形	92	90	114	弥生土器、陶器、石器(打製石斧)、炭	弥生時代	袋状土坑。土層は2層。
SK52	1区	隅丸長方形	196	(134)	38	弥生土器、石器(砥石・黒曜石剥片)、炭、種子	弥生時代	東側はST 1によって切られる。土層は2層。
SK53	1区	隅丸長方形	187	116	(161)	弥生土器、石器(打製石斧・用途不明品・片岩剥片他)、焼石、焼土塊、炭、種実	弥生時代	土層は上下に分かれる。多数の土器を投棄。

遺構番号	地区	平面形	規模 (c m)			出土遺物	時代	備 考
			長軸	短軸	深さ			
SK54	1区	隅丸長方形	148	88	51	弥生土器、石器 (局部磨製石斧・磨石・姫島産黒曜石剥片・緑色片岩)	弥生時代	土層は単層。他の土坑と一部重複。
SK55	1区	不整形円形	133	108	22	弥生土器、石器 (石鏃)、炭	弥生時代	土層は単層。他の土坑と一部重複。
SK56	1区	楕円形	103	65	17			土層は単層。
SK57	1区	隅丸長方形	137	84	34	弥生土器、石器 (磨石・安山岩・緑色片岩)、炭	弥生時代	土層は単層。
SK58	1区	隅丸長方形	243	150	31	弥生土器、石器 (打製石斧・磨石)、炭	弥生時代	土層は単層。
SK59	1区	楕円形	180	103	25	弥生土器、石器 (磨製石斧・打製石斧・砥石・磨石)	弥生時代	土層は2層。
SK60	1区	不整形	288	144	92			自然発生の穴か。土層は2層。
SK61	1区	楕円形	(182)	84	38	弥生土器、石器 (片岩剥片)、炭	弥生時代	SK62と一部重複。土層は単層。
SK62	1区	楕円形	98	(66)	45	弥生土器	弥生時代	SK61と一部重複。土層は単層。
SK63	1区	楕円形	(66)	47	17	弥生土器	弥生時代	
SK64	2区	不整形円形	98	82	8			焼土坑。
SK65	2区	不整形円形	106	97	13			焼土坑。
SK66	2区	不整形円形	92	73	46			土層は2層。
SK67	2区	不整形円形	72	63	29			土層は単層。
SK68	2区	楕円形か	(97)	(32)	20	弥生土器		土層は単層。
SK70	2区	隅丸長方形	111	80	53	炭		土層は単層。
SK81	3区	隅丸長方形	122	78	41	土師器、土師質土器、石器 (砥石)	近世以降	土層は単層。
SK82	3区	円形	(60)	(60)	30	陶器、磁器、土師質土器、磁器	近世以降	埋土坑。
SK83	3区	不整形円形	142	135	104	陶器、瓦質土器、土師質土器、石器 (安山岩剥片)、からみ、炭	近世以降	他の土坑の一部切る。土層は2層。
SK84	3区	円形	104	96	19	陶器、磁器	近世以降	土層は2層。
SK85	3区	不整形円形	(148)	153	(127)	土師質土器、陶器、貝殻	近世以降	土層は単層。多量の貝殻出土。ジバスの可能性もあり。
SK86	3区	円形	238	222	86	陶器、磁器、瓦、石器 (磨石か・片岩)、鉄製品	近代以降	土層は3層。
SK87	3区	円形	91	87	46	土師質土器	近世以降	土層は単層。
SK88	3区	楕円形	106	63	22			土層は単層。
SK89	3区	長円形	113	90	61	土師質土器、陶器	近世以降	土層は単層。
SK90	3区	隅丸方形か	(75)	68	15			SK91に一部切られる。土層は単層。
SK91	3区	長円形	255	164	76	石器 (片岩・チャート)		土層は2層。
SK92	3区	隅丸長方形	104	77	31	鉄滓か		土層は単層。
SK93	3区	不整形円形	73	60	6			土層は単層。
SK94	3区	長楕円形	330	148	14	弥生土器、須恵器	古代以降	南端にジバスが存在。土層は単層。
SK95	3区	不整形楕円形	161	66	27	土師質土器	近世以降	土層は単層。
SK96	3区	楕円形	195	(115)	24			SK97に一部切られる。土層は単層。
SK97	3区	不整形	280	156	67	弥生土器、土師器、青磁、石器 (姫島産黒曜石・黒曜石)	中世以降	複数の土坑が重複。土層は単層。
SK98	3区	隅丸方形	106	73	22			土層は単層。
SK99	3区	楕円形	155	142	58	土師器、瓦質土器、陶器、磁器、からみ、炭、片岩	近世以降	土層は単層。
SK100	3区	円形	(128)	110	54	弥生土器、陶器	近世以降	土層は単層。
SK101	3区	円形	116	112	47	陶器、磁器、瓦、瓦転用砥石	中世以降	土層は単層。
SK102	3区	円形	106	104	34	瓦質土器	中世以降	土層は単層。
SK103	3区	不整形円形	118	100	50	磁器、瓦質土器、石器 (打製石斧・砥石)	近世以降	床面に柱穴が重複。土層は単層。
SK104	3区	楕円形	66	55	16	瓦質土器、土師質土器	近世以降	土層は単層。
SK105	3区	不整形円形	192	193	(61)			井戸か。
SK106	3区	不整形円形	172	166	(141)	弥生土器、瓦質土器	中世以降	井戸か。土層は2層以上。
SK107	3区	不整形円形	(224)	(203)	69	陶器、磁器、石器 (安山岩剥片)	近世以降	南西端側にジバスが存在。土層は単層。
SK108	3区	不整形	108	76	7			土層は単層。
SK109	3区	不整形	(75)	60	7	石器 (石鏃)		土層は単層。
SK110	3区	不整形	62	50	27			
SK111	3区	不整形円形	75	60	8			
SK112	3区	不整形	65	49	11			
SK113	3区	楕円形	(137)	(116)	55			SK97を切る。
SK114	3区	不整形	(278)	(250)	53	弥生土器、石銅、石器 (磨石)	中世以降	土坑複数重複か。

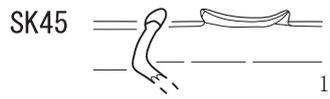
3 遺物

(1) 弥生時代以前の土器 (第 23 ~ 28 図 図版 32 ~ 35 第 2 表)

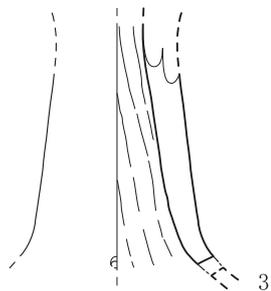
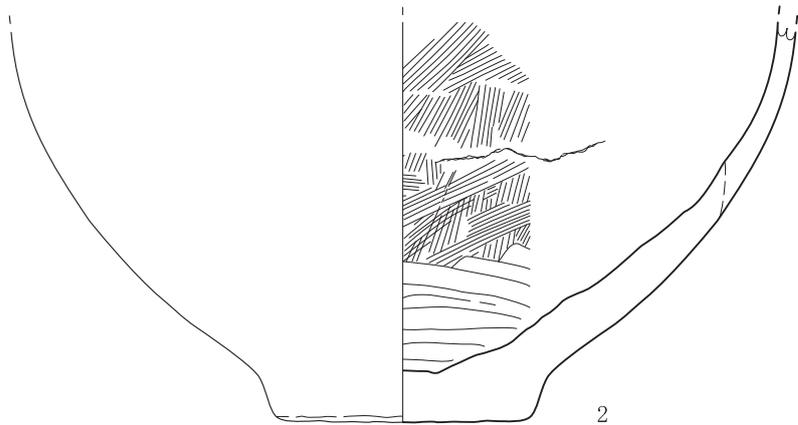
調査の結果、1区では土坑を主として内折口縁の壺、如意形口縁の甕を基本とする弥生時代中期前半、2区では弥生時代後期後半とみられる土器などが出土した。その他、1区から縄文土器が出土している。

1は1区SK45から出土した縄文土器浅鉢である。内外面にミガキが施され、口縁部にリボン状突起がつく。時期は縄文時代晩期である。弥生時代土坑への混入品とみられるが、本調査において出土した唯一の縄文土器である。

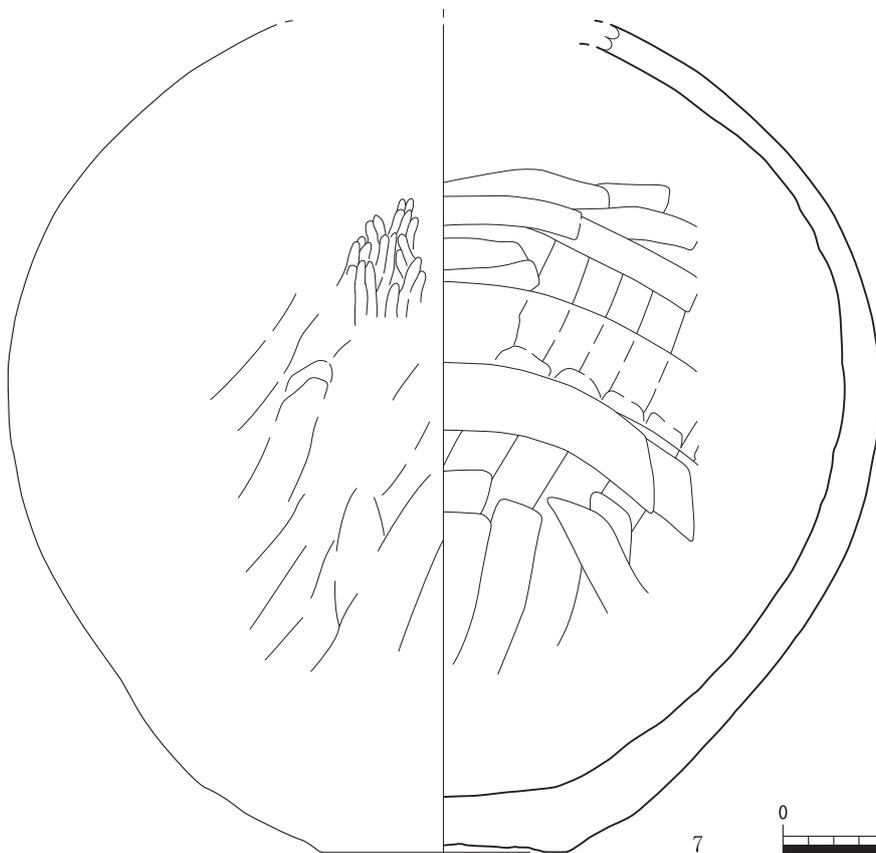
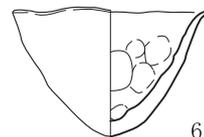
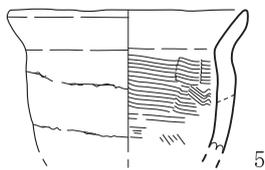
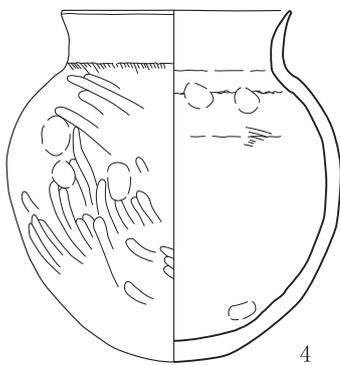
2・3はSI1から出土。2は弥生土器の甕下半で内面ハケ調整の後底部のみヘラナデ。3は高杯脚部で下部に穿孔が穿たれ、内面のシボリ目が顕著である。4~7はSI4から出土した弥生土器であり、いずれも弥生時代後期後半のものと思われる。4は完形品の壺である。丸底の底部を持ち、頸部はほぼ垂直に立ち上がる。外面はハケ後ミガキ、内面はハケ目がわずかに残る。5は甕の上半。小型で粘土紐積上げによる成形で内面のみハケ目が残る。6は鉢で尖底を持つ。手捏ねによる成形で内面には指頭圧痕が顕著に残る。7は大型の壺で、頸部を欠く。外面はヘラナデ後ミガキ調整、内面は不定方向から粗くヘラナデを施す。底面はやや上げ底である。8・9は弥生土器甕口縁部であり、両者とも口縁が「く」の字に屈曲する。8はSK3出土、9はSK9出土である。10~13はSK11出土の弥生土器壺である。10は内折口縁壺であり、口縁部内面には貼付突帯を持ち頸部下半に沈線5条が巡る。11~12は同一個体とみられる。外面胴部下半及び内面は非常に粗いハケ調整、外面胴部上半は丁寧なミガキ調整が施される。輪積みを利用して作出された突帯には貝殻復縁により山形文が描かれる。14・15はSK13出土である。14は甕の口縁部であり、擬無文土器の円形粘土帯である可能性がある。15は弥生土器壺肩部であり、貝殻復縁による木葉文が描かれる。16~20はSK14出土の弥生土器である。16は無頸壺であり、球形に近い体部を持つ。底面は平底で内外面はミガキ調整が施される。17は壺の肩部であるが、胎土が他のSK14出土遺物と異なるため搬入品の可能性がある。ミガキによる器面調整ののち、貝殻復縁により無軸羽状文が描かれる。18は如意口縁を持つ甕である。底部は台形上に開き、わずかに上げ底。内外面にハケ調整。19は特異な形態を持つ弥生土器鉢である。手捏ねによって胴部まで成形したのち、粘土紐を張り付け外反する口縁部を作る。底部はやや凸レンズ状に膨らみ、内外面にハケ目がわずかに残る。20は弥生土器甕。口縁端部は面を持ち、底部外縁に粘土を貼ることで上げ底を作る。内外面にハケ調整が施される。21はSK15出土の弥生土器壺口縁部である。口縁内部に粘土を貼り付けており、口縁を肥厚させる。22~24はSK22出土の弥生土器である。22は壺の口縁部である。口縁端部が下方に拡張し、口縁部内面には2重の列点文、口縁端部には櫛描波状文が巡る。内外面にハケ調整が施され、口縁下には指頭圧痕が巡る。23は直口壺であり、口縁部に双孔が穿たれる。摩滅により不鮮明であるが、頸部外面に波状文が描かれる。24は甕の口縁部であり、擬無文土器の円形粘土帯である可能性がある。25はSK25出土の弥生土器台付鉢であり、外面にハケ目が残る。26・27はSK31から出土した弥生土器である。26は甕口縁部である。口縁は強く外反する如意口縁であり、口縁部端全体に貝殻に



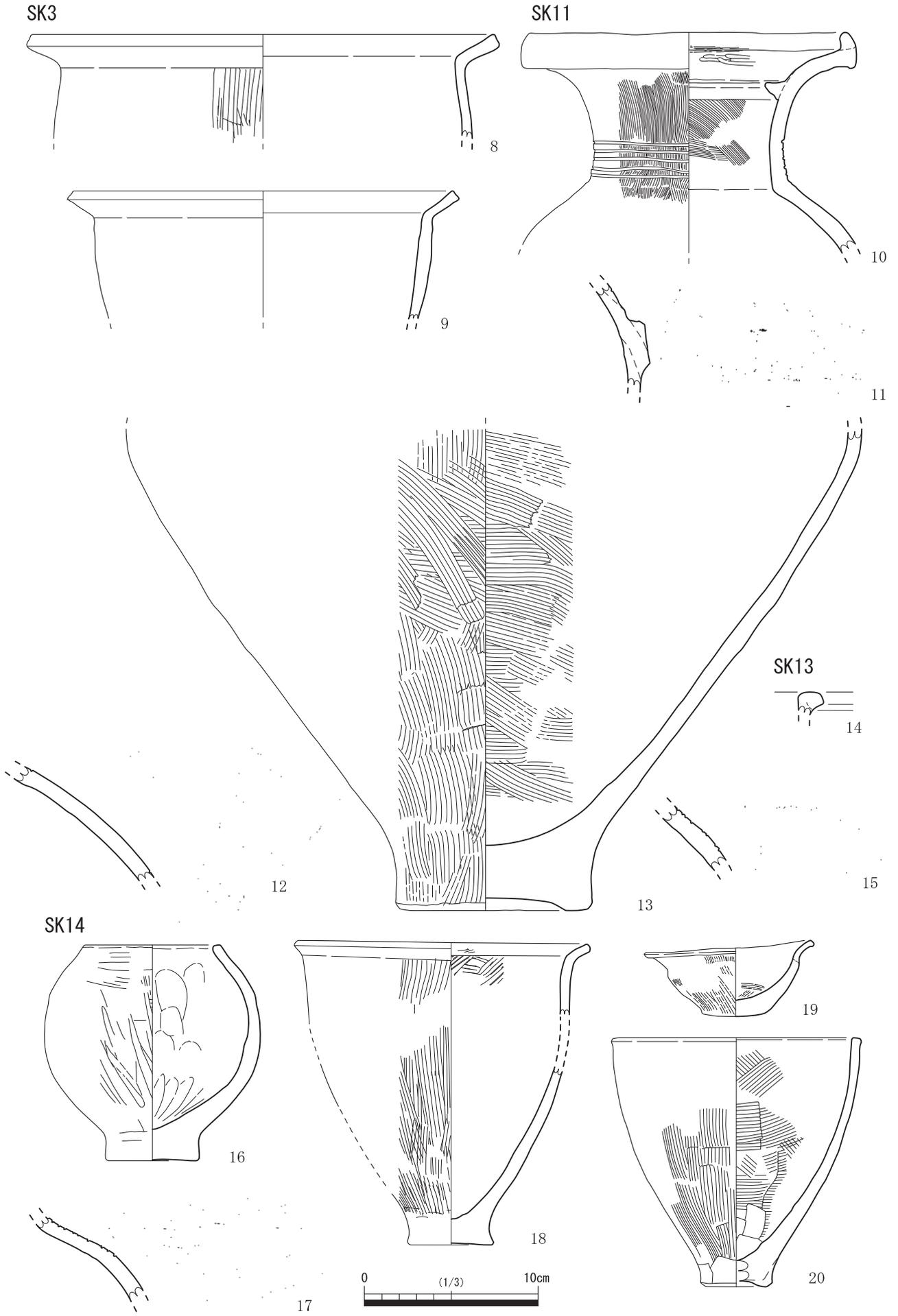
SI1



SI4



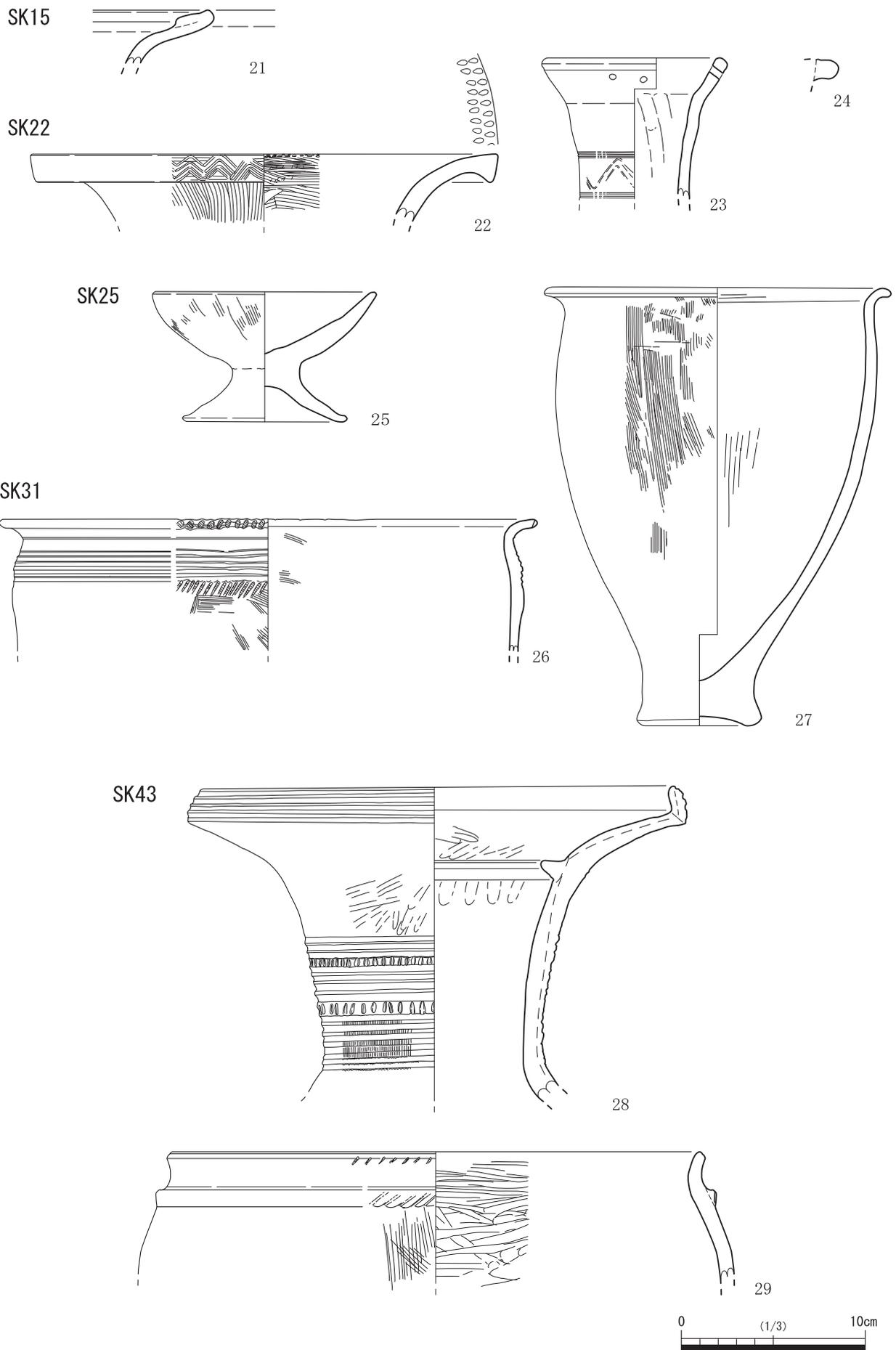
第 23 图 出土遺物実測図 1



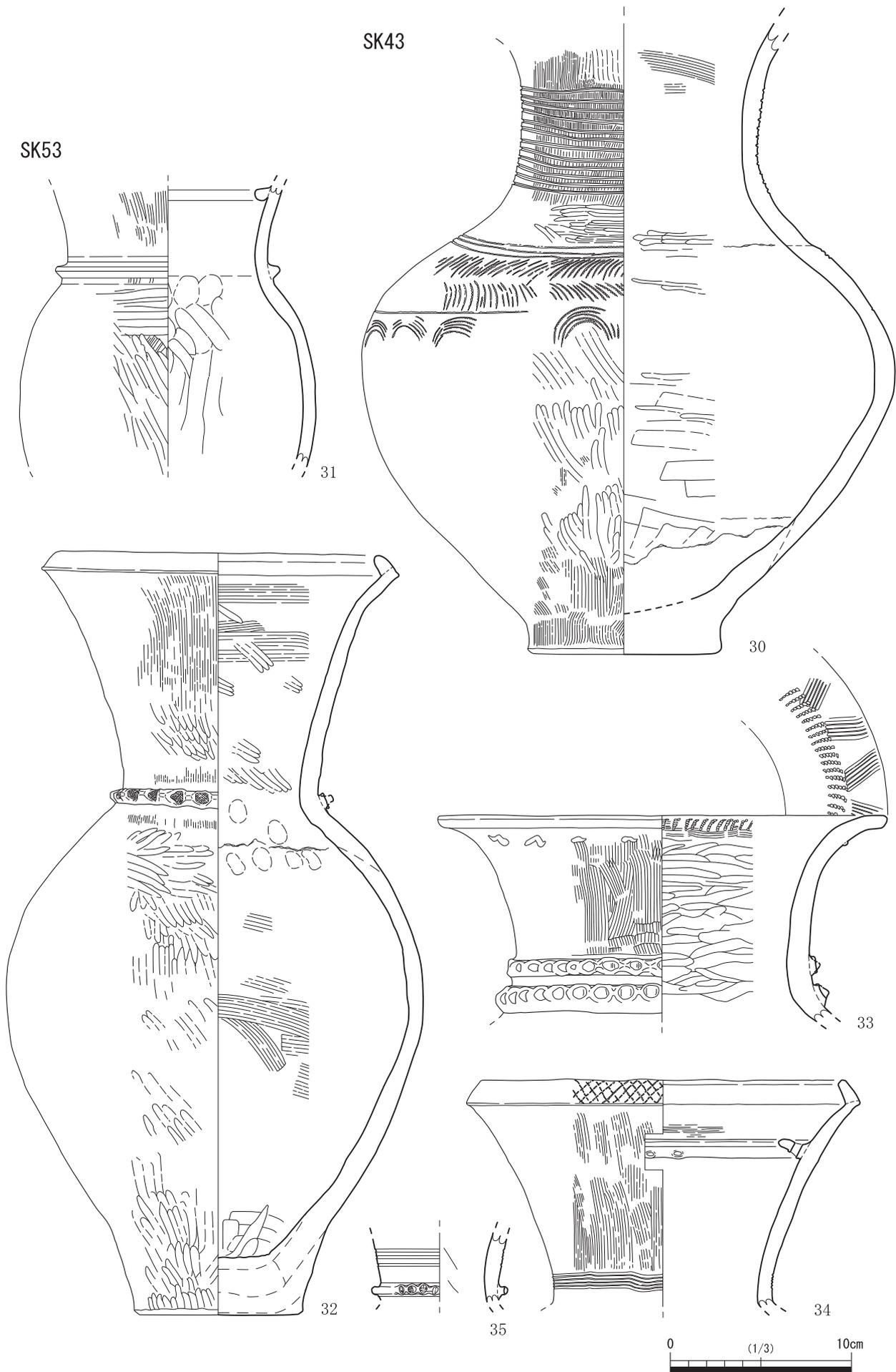
第 24 図 出土遺物実測図 2

よる刻目を持つ。口縁部下には5条の沈線、沈線下には貝殻圧痕文が巡る。27は甕である。短く外反する如意口縁を持ち、底部は台形に開く上げ底である。外面はハケ調整、内面ミガキ調整が施される。28～30はSK43出土の弥生土器。28は内折口縁壺の頸・口縁部で口縁内部には貼り付け突帯を持つ。口縁外部には4条の沈線が巡り、頸部には多条沈線と列点文が配される。29は甕口縁部。緩く外反する如意口縁で頸部には突帯を貼り付ける。口縁及び突帯下端に刻目を持ち、外面ハケ調整、内面ミガキ調整である。30は弥生土器壺で口縁部を欠損する。頸部には多条沈線が巡り、肩部には貝殻復縁により無軸羽状文、その下に山形重弧文が描かれる。31～43はSK53から出土。31～35・38は壺。31は頸部内面及び胴部外面屈曲部に貼付突帯を持つ。頸部外面ハケ調整、胴部ミガキ調整。内面はヘラナデであるが、頸部を接合した際の指頭圧痕が顕著に残る。32は筒状に開く頸部に、弧状に短く内傾する口縁部を持つ。外面屈曲部に刻目を持つ突帯が1条巡るが、刻目に布目痕がみられ、瀬戸内地域にみられる連鎖状突帯に影響を受けたものと推察される。底部は粘土を重ねることで厚みを持たせる。外面はハケ調整ののち頸部下半から胴部にかけて丁寧なミガキ。内面はハケ目とミガキの痕跡が残り、内底面は粘土を貼り付けた際の粗いナデが残る。33は外面屈曲部に32と同じ形状を持つ連鎖状突帯が2条巡る。強く外反する素口縁であるが、外面ハケ調整後に口縁下に粘土が貼り付けられた痕跡がわずかに残ることから、口縁部付近に何らかの加飾が施されていた可能性がある。口縁内側には6条1組の橢状工具により截頭山形文が描かれ、後同じ工具による刺突文が巡る。外面はハケ、内面ミガキ調整。34は内折口縁壺である。頸部は筒状に広がり、口縁部外面には貝殻復縁により斜格子文が描かれる。口縁内側の貼付突帯には、双孔が4カ所に穿たれた痕跡が残る。頸部外面には5条1組の橢状工具による沈線が巡る。外面ハケ調整。35は壺の頸部であり、胴部外面の屈曲部に連鎖状突帯をもち、頸部に3条の沈線が巡る。38は底部のみの出土であり、平底を持つ。36・37・39～42は弥生土器甕である。36は底部を欠損する。胴部が張り出し、短く外反する如意口縁を持つ。外面ハケ、内面ハケ後ミガキ調整である。37は強く屈曲する如意口縁を持ち、口縁部下端には貝殻復縁による刻目が施され、口縁部下には多条の沈線が巡る。39は内折口縁甕であり、口縁部端が凹状になる。内外面ハケ調整。40は底部欠損しており、口縁端全体に刻目を持つ。41は底部を欠損し、胴部に貝殻復縁による圧痕文が巡る。42は甕下半で外面ハケ、内面ミガキ調整である。43は弥生土器鉢または甕である。口縁部下を削ることにより突帯状の口縁部をつくり、口縁部外面に斜格子文をつける。44・45はSK58から出土した弥生土器壺である。44は頸部には沈線が複数条巡り、最下の1条が途中で途切れる。胴部は無文であり、わずかに顔料の痕跡が残る。45は胴部貼付突帯上に沈線が巡り、胴部上半には貝殻復縁文が施される。

46は2区ST2内柱穴から出土。複合口縁壺で口縁部外面に橢描波状文が巡る。47・48はSD4出土。47は高杯脚部で外面に黒斑が残る。48、49は複合口縁壺の口縁部である。48は口縁部が強く内傾し、端部が丸く収まる。口縁部外面に6条の沈線。49は口縁部端がわずかに外反し、瀬戸内系の影響がみられる。両者とも後期後半か。50はヒョウタン形の特異な形態を持つ小型壺である。胎土等から弥生時代と推察する。粘土紐積上げによる成形。51はSP308出土の甕の胴部。太筋で荒いタキ調整痕が明瞭に残る。弥生時代の終末期を含む後期後半か。

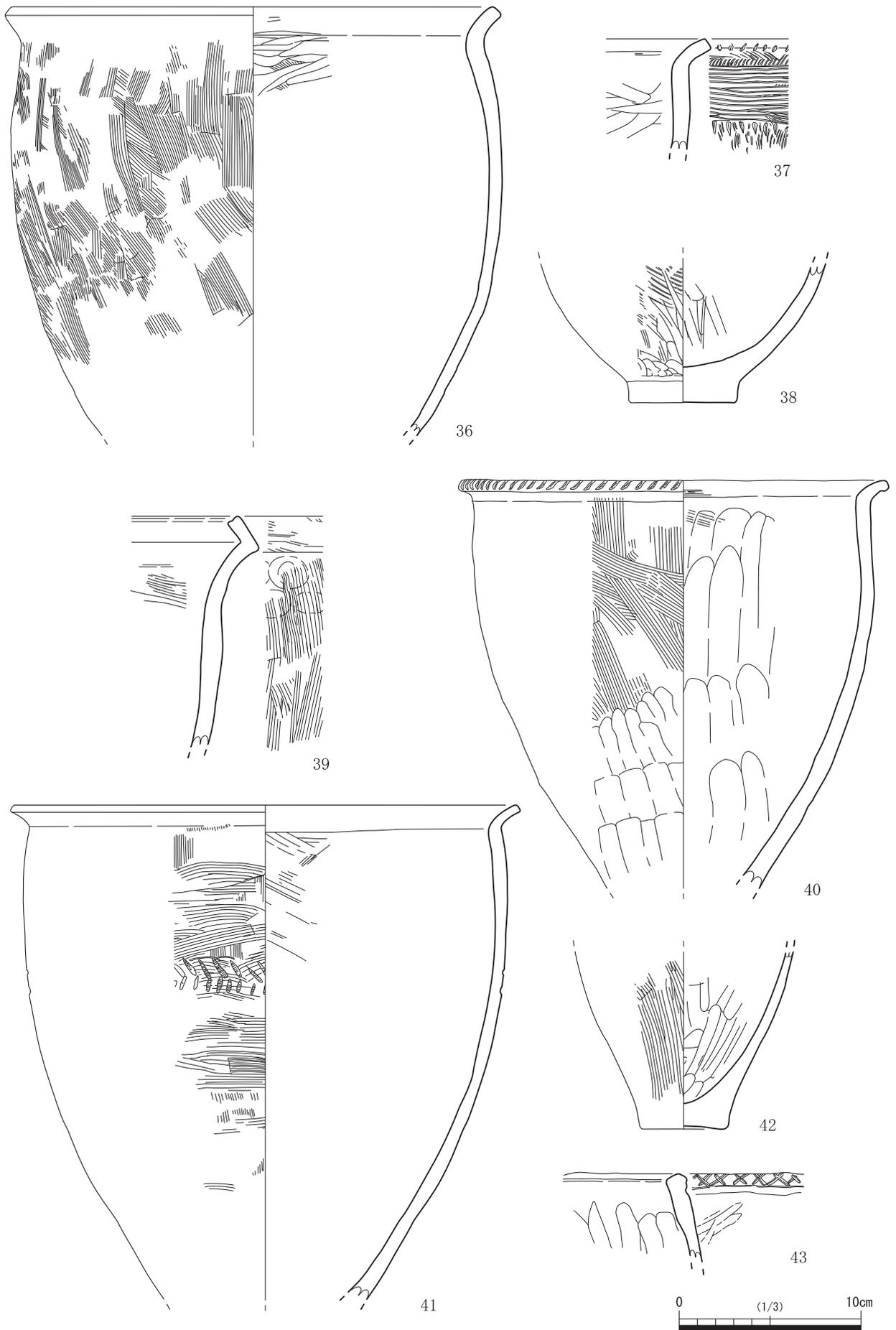


第 25 図 出土遺物実測図 3



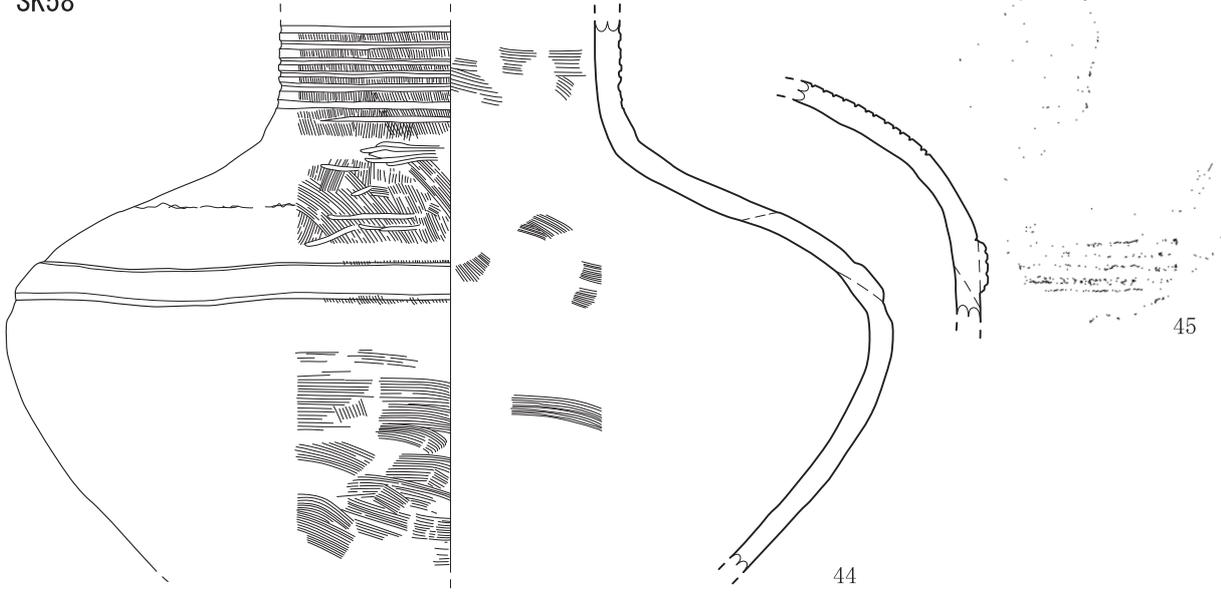
第 26 图 出土遺物実測図 4

SK53

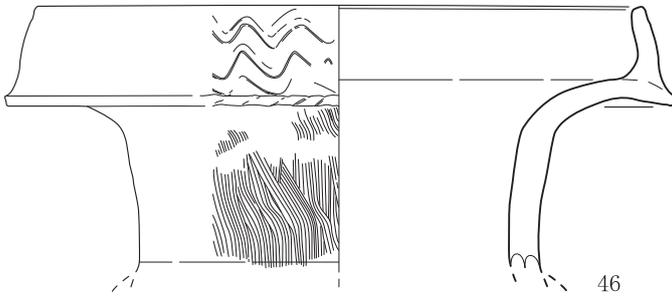


第 27 図 出土遺物実測図 5

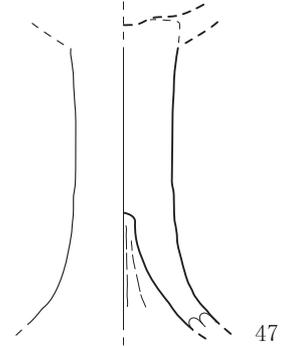
SK58



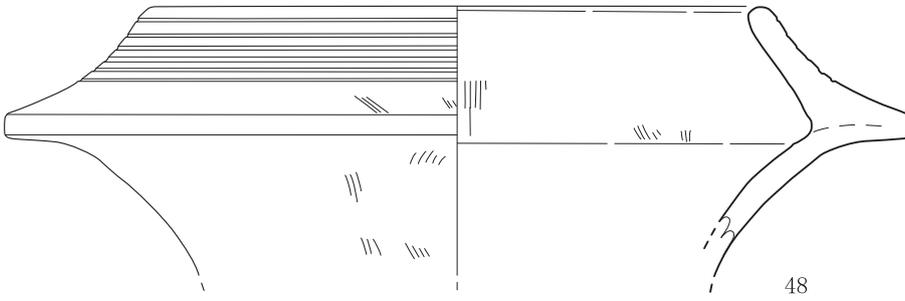
2区 ST4 内柱穴



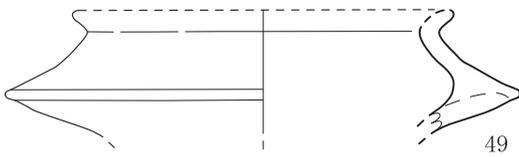
2区 SD4



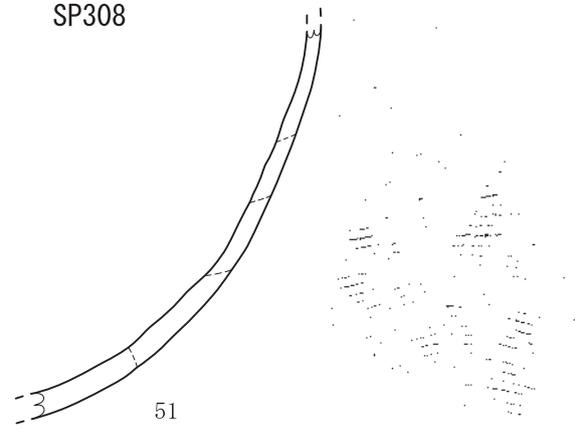
2区 SD4



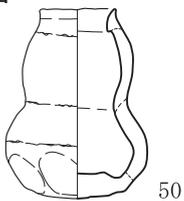
2区 北側



SP308



2区 壁面

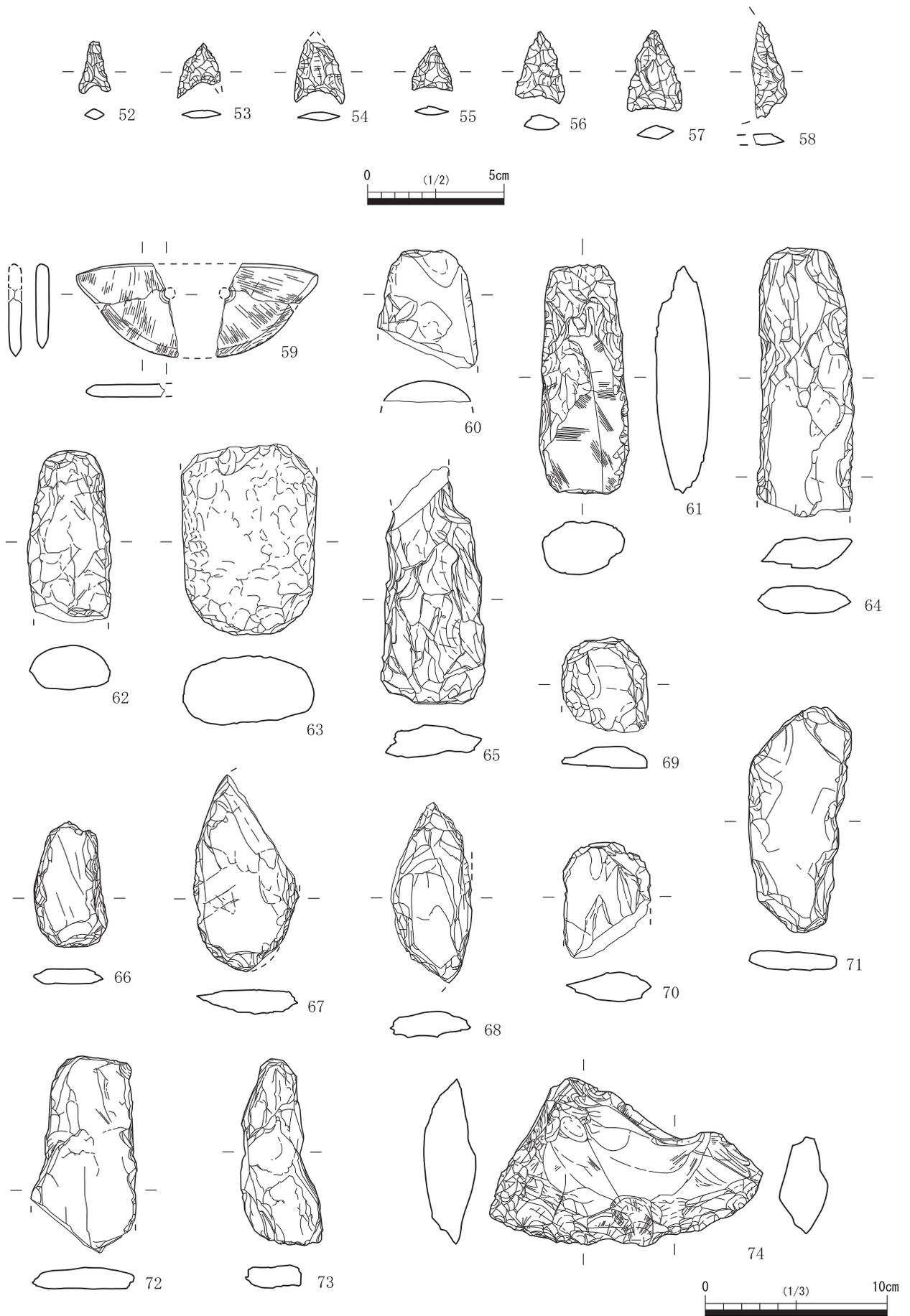


第 28 图 出土遺物実測図 6

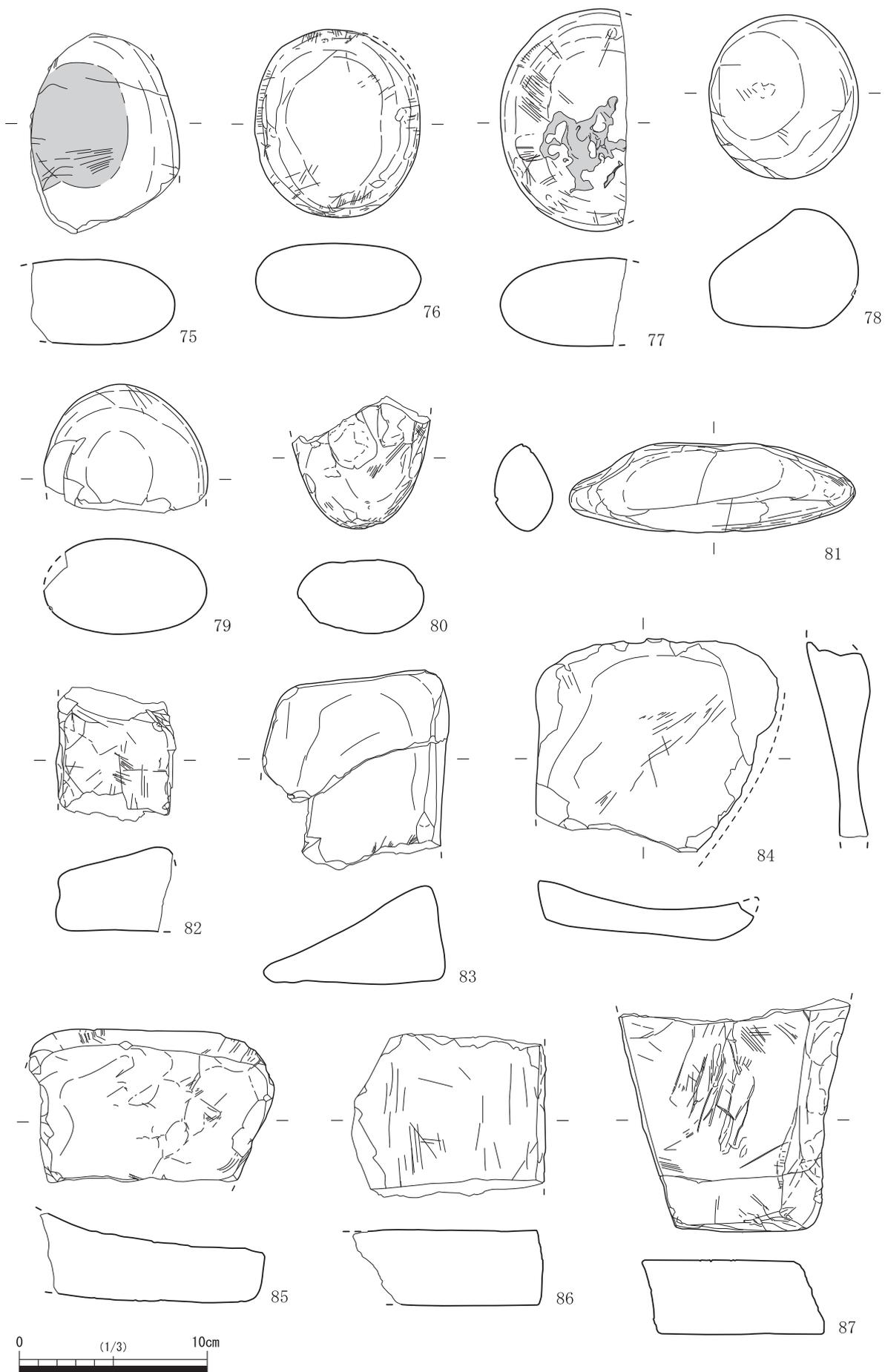
(2) 石器・石製品 (第 29 ~ 32 図 図版 36 ~ 39 第 3 表)

石器・石製品には石鏃・石包丁・石斧・削器・磨石・砥石・石錘・紡錘車・石鍋などがある。以下、主なものについて述べる。また、本遺跡では製品以外、弥生時代の多種の未製品や剥片、砥石、石器原石が多く出土しており、当時、集落内で石器の製作が行われていたことが窺える。なお、下記の説明で便宜的に実測図片面の場合は記載面を A 面、無記載の裏面を B 面とした。

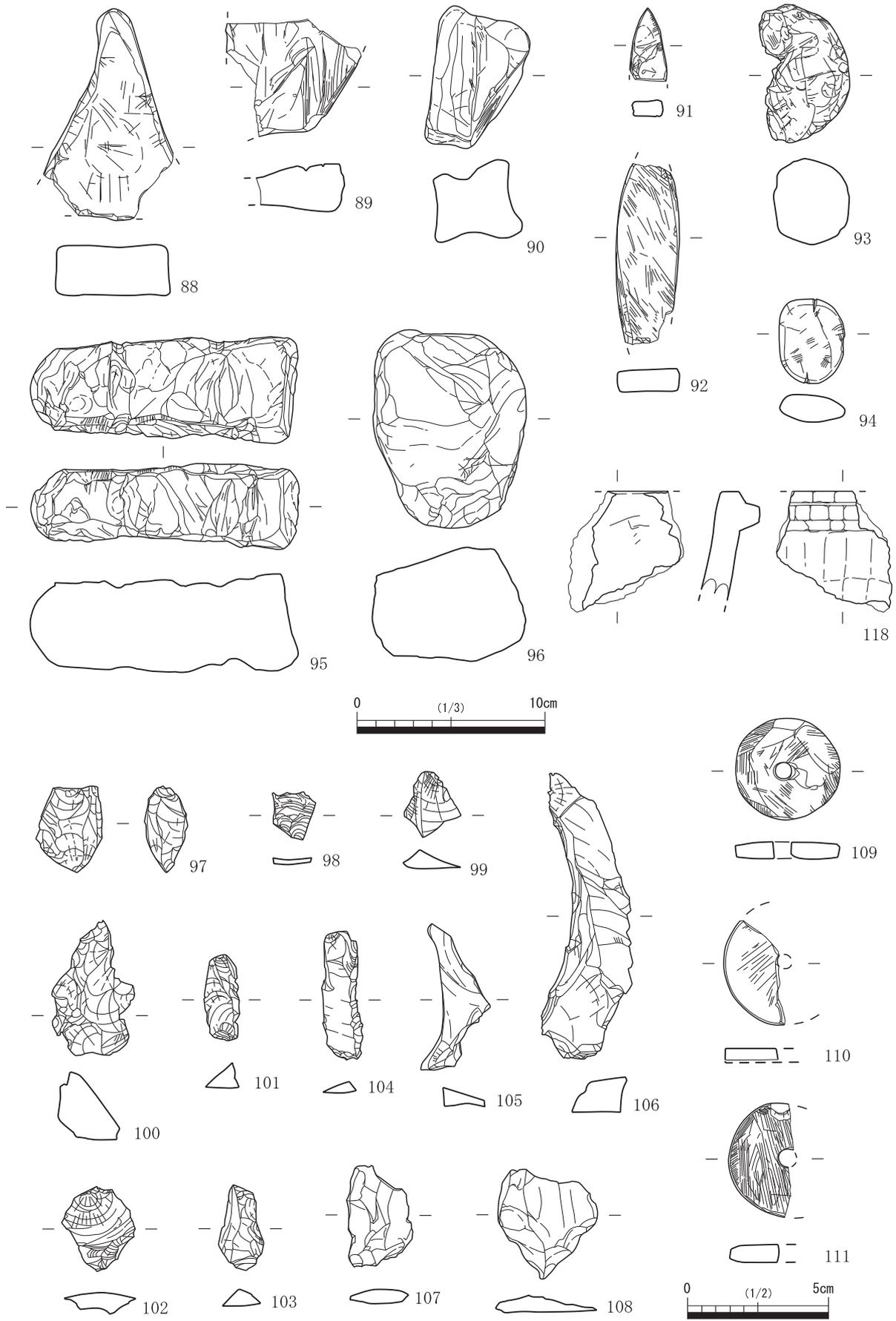
52 ~ 57 は打製石鏃で、全て安山岩製である。形状は凹基無茎式であるが、55 ~ 57 はやや平基式に近い。52 は細身で両面共に鑄が通る。先端および逆刺は若干丸味おびる。3 区 SK109 出土。53 は挟りが深いもので、一方の逆刺を欠損する。全面調整剥離であるが、一部側辺は非常に細かい調整を施している。断面は扁平なレンズ状を呈する。2 区表採。54 は両面共に調整剥離が全体に施されており、断面は扁平なレンズ状を呈する。1 区 SK29 出土。55 は先端がわずかに欠けている。側辺・基辺は丁寧な調整剥離が施されており、一部、階段状を呈する。1 区 SK29 出土。56 は全面調整剥離で、断面は厚みがある。逆刺は鋭い。1 区 SK55 出土。57 は全体に調整剥離が施されているが、比較的粗い。両面とも鑄が通る。1 区表採。58 も打製石鏃であるが、製品ではなく、製作途中で縦方向に割れた未製品と察するものである。右側辺の上部から中央部にかけては両面から細かい調整剥離が施されているが、基部は調整剥離による成形が不十分で、逆刺も欠損している。安山岩。1 区 SK13 出土。59 は石包丁で、外彎刃半月形態の半損品である。刃部は両刃で刃先は鋭く、一部に細かい刃毀れが認められる。また全面に多数の研磨痕が認められる。紐孔は一部が残存し、両面穿孔である。泥岩。1 区 SI 1 出土。60 ~ 73 は石斧である。60 ~ 63 は太型蛤刃石斧で、60 は磨製で、基部の近い部分が剥離したものであると思われる。器面は風化が著しい。泥岩。1 区 SK25 出土。61 は局部磨製で、A 面は着柄部から刃部、B 面は着柄部から基部かけて丁寧な研磨面部分があるが、剥離調整面のままの範囲も多い。側面には敲打痕、刃潰し痕が顕著に残る。また刃先は使用時に欠けたようであるが、再研磨せず、敲打により再成形している。チャート。1 区 SK54 出土。62 打製石斧で、着柄部・基部共に敲打により形状を整え、側面は刃潰しを施している。砂岩。1 区表採。63 は未製品で、広範囲に敲打痕が顕著に残る。上端は破損面であるが敲打痕があり、製作途中で折れたものを再加工しようとしたものか。砂岩。SK103 出土。64 ~ 73 は緑色片岩を用いた扁平な打製石斧である。64 は A 面着装部の一部に研磨を施しており、また全体的に大剥離面を残している部分が多い。1 区 SK14 出土。65 は比較的粗い調整剥離により成形されている。1 区 SK59 出土。66 は小型の石斧で、体部は大剥離面のままであるが、側面は調整剥離が施されている。全体摩滅をうけている。1 区表採。67 の側面は調整剥離により全体形状を整えており、とくに刃縁は細かい調整剥離により尖る。1 区 SK38 床出土。68 ~ 73 は未製品または製作途中で破損品またはその破片と考えるもので、68 は側辺に一部調整剥離を認める。1 区 SK58 出土。69 は基部で、A 面の縁辺は粗い調整剥離で、一部、階段状を呈する。B 面の大半は大剥離面が占め、側辺の大部分は細かい調整剥離が認められない。基部も粗い調整剥離にとどまる。1 区 SI 1 出土。70 は基部で、全体が粗雑な剥離面である。1 区 SK54 出土。71 ~ 73 は粗割のままで、細かい調整剥離が認められない。71 は 1 区 SK53、72 は 1 区 SI 1、73 は 1 区 SK50 出土。なお、緑色片岩を用いた扁平打製石斧は実測記載以外にも多数出土しているが、この類は県内では美祢市秋芳町国秀遺跡例^{註1}のよう



第 29 图 出土遺物実測図 7



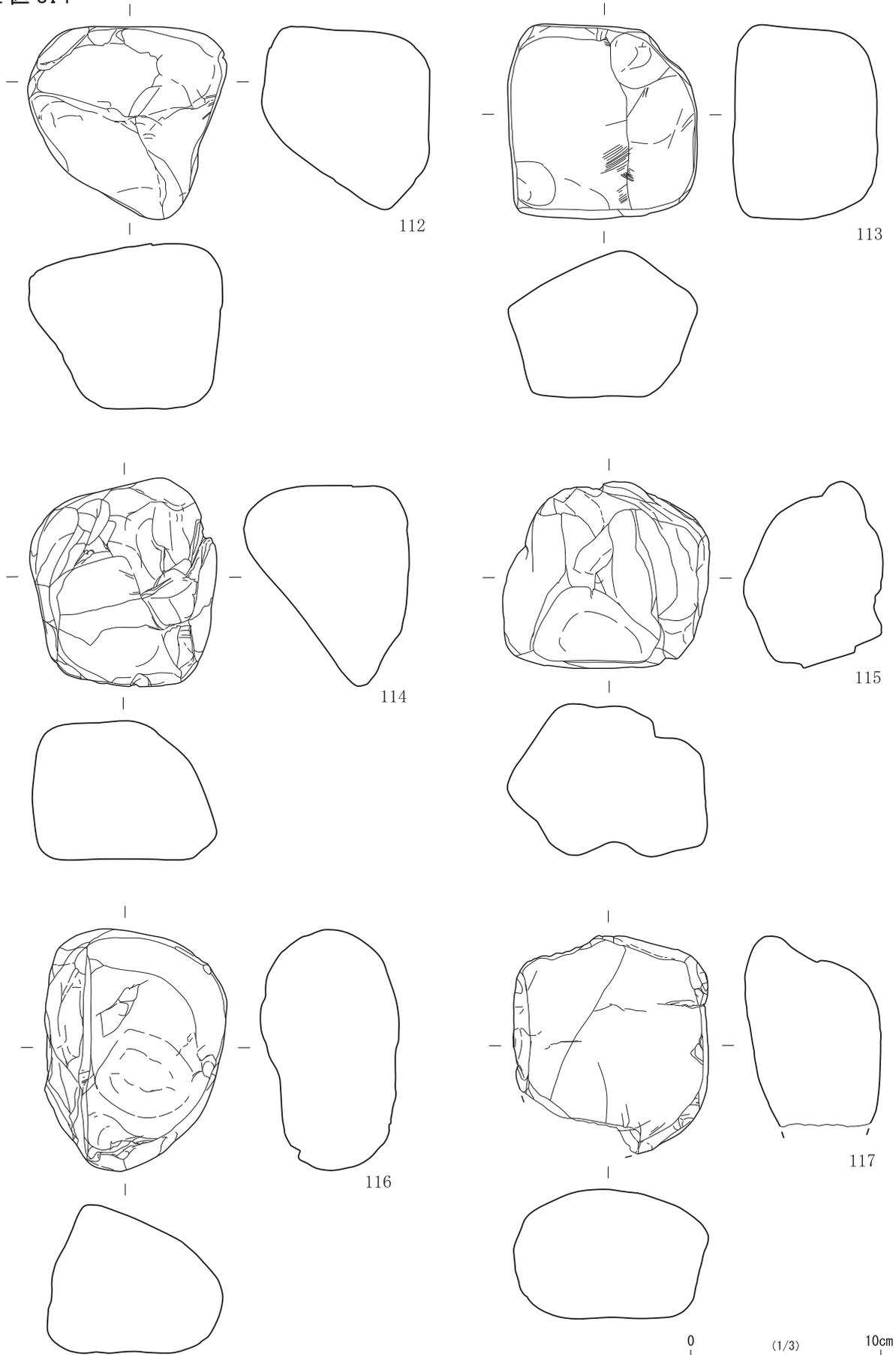
第 30 图 出土遺物実測図 8



第 31 图 出土遺物実測図 9

に縄文時代晩期に多用されており、本遺跡での出土例はこの地域で少なくとも弥生時代中期前半まで積極的に用いられていたこと示している。74 は大型の削器の完形品である。体部中央は大剥離面のままで縁辺を調整剥離により成形し、湾曲する下辺を刃部としており、一部細かい調整剥離も施している。他の側辺は粗い剥離面を有する。泥岩。1区SK 5出土。75～81 は磨石で、その大半は側面等に敲打痕が認められ、敲石としても使用されている。75 は全体に良く磨られており、擦痕も認められる。A面に煤が付着する。花崗斑岩。1区SK 5出土。76 はA面中央部が平滑な磨面になっているが、側面はざらつきがある。花崗斑岩。1区SK35出土。77 は側面も磨れており、A面に有機物質が薄く付着している。花崗斑岩。1区SK39出土。78 はA B面共に磨りによる平坦面2面を有し、その器面は滑らかである。側面に敲打痕が残る。砂岩。1区SI 1床直上出土。79 の側面はざらざらした面である。花崗斑岩。1区SI 1出土。80 はやや尖り気味の下端に敲打痕が残る。砂岩。1区SK59出土。81 は全体が棒状で、先細りになった両端が砥面で、摩擦により丸味を帯びている。砂質片岩。1区SK11出土。82～93 は砥石で、形状や石材は多様である。82 は器面全体摩擦している。凝灰岩。1区SK59出土。83 はB面、側面に黒色化した部分があり、火を受けた痕跡か。砂岩。1区SK39床面。84 はA B面共に研磨により大きく凹み、非常に滑ら砥面になっている。凝灰岩か。1区S P 254出土。85 はA B面・側面にキズ状の擦痕がある。凝灰岩。SK 5出土。86～88 はA B面共に平坦な砥面で、86 の砥面は比較的粗面である。花崗斑岩。SI 1出土。87 はA面に明瞭なキズ状の擦痕を有する。砂岩か。1区SK39出土。88 はとくに右側面は滑らかな砥面で、B面は剥離面の可能性がある。砂岩。1区SK39出土。89 には鋭い刃先を研いだような明瞭なV字形断面の浅い溝2条がある。軽石。SK53出土。90 はA面の研面が大きな溝状の凹となっている。砂岩。1区SK13出土。91・92 は小型の砥石で、全体の平面形が細長い杏仁形を呈すると思われるもので、91 は一方の先端部分、92 は両端を欠くものである。共に全体に丁寧な研磨整形をしており、器面に多数の研磨痕が認められる。また断面は長方形を成す。泥岩。91 は1区遺構面、92 は1区SI 1出土。93 は多孔質の軽石で、一部に切り込んで擦った溝状の痕が深く残る。2区SI 4炉内の北東隅柱穴出土。94 は石錘で、扁平な川原石の長軸の両端に切り込みによる極細く浅い溝が施されている。砂岩。1区SK57出土。95 は用途不明石。四角柱状石の長軸面の各左右2か所ずつ打ち欠けによる粗雑な凹みを施しており、その部分は本品を錘として使用するための紐掛け部分か。石英斑岩または凝灰岩。1区SK53出土。96 は石器の原石と推察するものある。器面は加工痕がなく、かなり風化している。泥岩。SK13出土。97 は剥片石核で、下端が尖っており、楔形をなす。上端に複数打点があり、縦長剥片を剥離した面などが認められる。両極石器の可能性もある。チャート。1区SD12出土。98～108 は石器剥片で、石材に黒曜石、姫島産黒曜石、姫島産安山岩、安山岩、緑色片岩がある。98 は極めて薄い小片である。黒曜石。1区SK41出土。99 は複数の大剥離面からなる。縁辺は鋭く尖る。姫島産黒曜石。1区SI 1出土。100 は複数の剥離面は加工によるものではなく、粗割の際に生じたものと察せられる。姫島産黒曜石。1区SK45出土。101 は断面三角形の縦長の剥片である。姫島産黒曜石。SK13出土。102 はA面の大剥離面には貝殻状裂痕が顕著にみられる。姫島産黒曜石。SK38出土。103 は断面三角形を呈し、調整加工による細かい剥離は認められない。姫島産安山岩。SK13出土。104：断面扁平な三角形を呈する縦長の剥片であ

2区 S14



第 32 图 出土遺物実測図 10

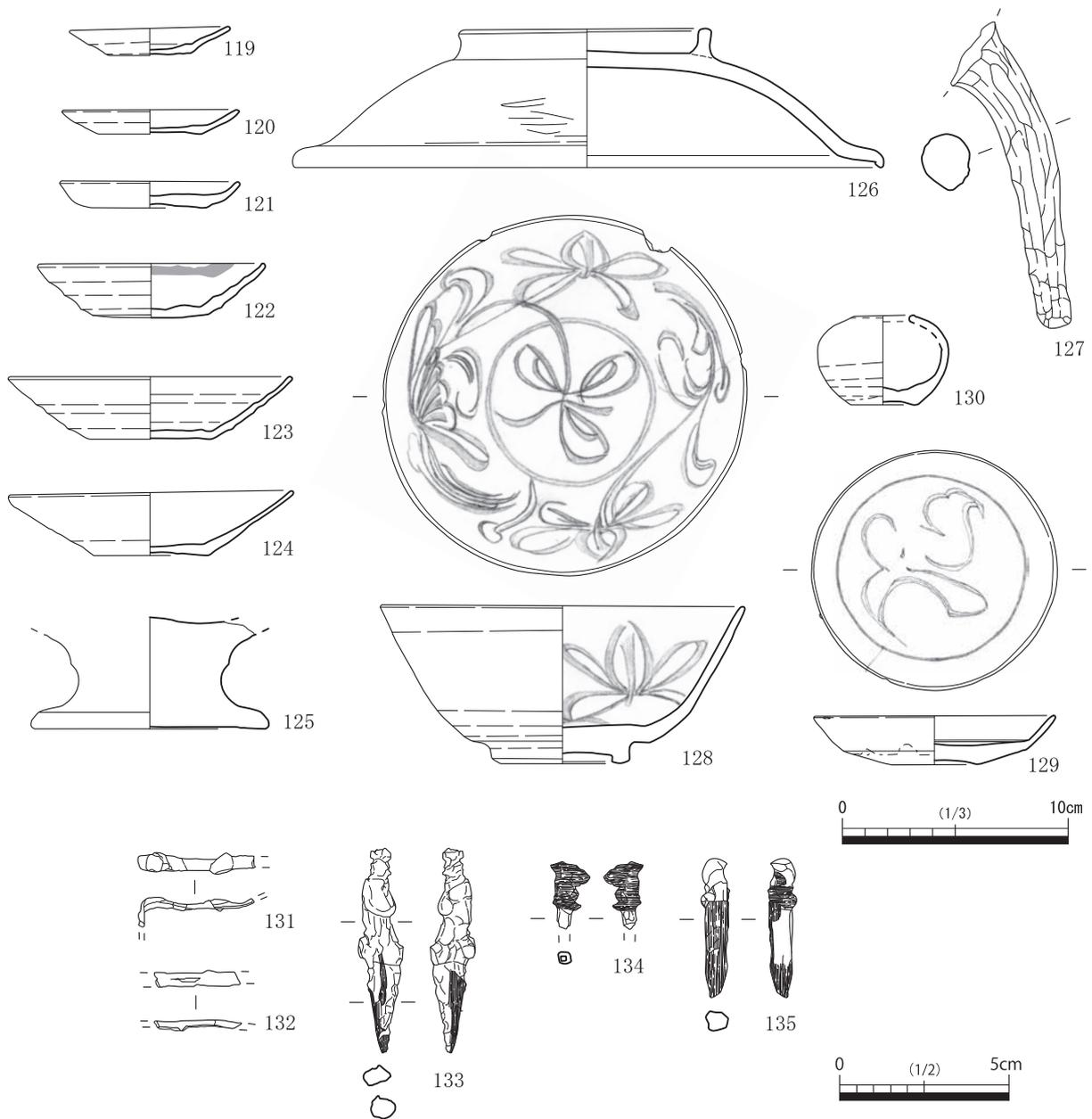
る。安山岩。SI 1 出土。105・106 は一側辺が弧状を呈する細長い剥片で、105 は安山岩。SK43 出土。106 は A 面が複数の剥離面からなるが、B 面は大剥離面の一面のみである。安山岩。SK22 出土。107・108 は緑色片岩製打製石斧の製作過程で生じた小剥片と思われる。共に SI 1 出土。なお、98・100・101・103・104 は一部または一面に自然面が残る。また、記載しなかったが、剥片には長さ 1 cm も満たない極小なものも出土している。109～111 は石製紡錘車。109 は完形品で、全面に多方向の細かい研磨痕が残る。孔は径 0.6cm で、片面穿孔による。110 は半分以上欠損し、B 面の器面が薄く剥離している。上面・側面に細かい研磨痕が多数残る。孔は一部残存し、径 0.5～0.6cm で、片面穿孔である。111 は半損品。全面細かい研磨痕が残る。孔は径 0.6cm で、両面穿孔である。いずれも泥岩製。SI 1 出土。112～117 は SI 4 内の南側床面に集められていた川原石の礫石 10 個中の 6 個である（図版 12）。いずれも大きめのこぶし大で角がとれた花崗斑岩または砂岩である。一部擦痕を認めるが加工はされていない。重さは 1.14kg～1.374kg で、平均約 1.2kg を測る。なお、石材の花崗斑岩または砂岩は本遺跡の立地場所で採取できないもので、明らかに外から持ち込まれたものである。また、本礫石の用途は定かでないが、集落内出土のこぶし大の礫石に関しては、島根県田和山遺跡に例があるつづて石^{註2}、また福岡県伊崎遺跡では建物の柱の固定に用いられたものかとの指摘もあり^{註3}、ほかにも土器等を固定する支え石に用いた可能性なども考えられよう。118 は中世の石鍋である。断面台形状の鐺を有し、成形はケズリで、口縁部から鐺部分は横方向、外面胴部は縦方向に施している。外面は煤の付着が顕著である。滑石。3 区 SK114 出土。

註

1. 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会 1992 『国秀遺跡』
2. 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2005 『田和山遺跡』
3. 財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2010 『伊崎遺跡（4・5区）』

(3) 中近世の土器（第 33 図 図版 40 第 2 表）

119～124 は中世の土師器皿である。119～121 は小皿で、119・120 は共に薄手作りであるが、体部は 119 が外反しながら立ち上がるものに対し、120 はやや内湾して外方向にのびる。119 が 2 区 SP102、120 は 2 区 SP83 出土。121 の作りは厚手で、体部の立ち上がりも短い。2 区 SP79 出土。122 と 123 は共に 2 区 ST 2 出土で、122 は内面上部の一部に煤が付着しており、燈明皿として使用された可能性がある。123 は 122 に比して一回り大きく、器壁が薄い。124 は 123 の形状に近いが、全体に摩滅している。2 区 SP84 出土。なお、119～124 はいずれも外底部は糸切りである。125 は高台付杯の高台部分である。2 区 SP85 区出土。12～13 世紀か。126・127 は瓦質土器で、126 は消し壺の蓋である。平坦な天井部の外周に輪状つまみが貼り付く。体部は内湾しながら大きく開き、下位で大きく屈曲して口縁と成し、端部は若干つまみ上げ丸くおさまる。外面に大きな黒斑がある。外面ヘラミガキ。2 区 SD 2 出土。17 世紀後半。127 は足鍋の脚で、その端部は丸くおさまる。器面に指オサエ痕が顕著に残る。15～16 世紀。3 区 SP11。128～130 は 1 区 ST 1 出土の副葬品で、128 は龍泉窯系の青磁椀である。成形は丁寧で、内面に花文 3 単位の蓮花文が片彫りで施され、高台部畳付けおよびその内部は露胎である。大宰府編年龍泉窯系青磁椀 I 類（I



第33図 出土遺物実測図11

— 2a) 註¹。129は白磁皿で、体部中位でくの字に屈曲する。平坦な底部内面見込みに草花文が施されている。外底部は露胎。大宰府編年白磁皿Ⅷ類(Ⅷ-2b)。130は白磁小壺である。偏球形の胴部を有し、上端部はわずかにひき上げ、丸味を持たせてそのまま口縁とする。外底部は露胎。128～130はおおむね12世紀中頃～後半。

なお、割愛したが、近世以降の陶器や土師質土器などが主に3区の土坑から多数出土している。

註

1. 太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』

第2表 出土土器・土製品観察一覧表

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)					
1	23	32	1区 SK45 西半	縄文土器	浅鉢	-	[2.5]	-	密	良	黒色 (5Y2/1) 褐灰色 (5YR6/1)	ミガキ ミガキ	
2	23	32	1区 SI1 南床面	弥生土器	甕	-	[15.9]	10.1	粗	やや良	橙色 (7.5YR7/6) 浅黄橙色 (7.5YR8/3)	ハケ目、ミガキ 不明	体部外面に黒斑
3	23	32	1区 SI1 床 直	弥生土器	高杯	-	[9.55]	-	粗	やや良	灰色 (N4/) 灰白色 (2.5Y8/1)	ナデか ミガキか	脚部内面にシボリ目顕著
4	23	32	2区 SI4	弥生土器	壺	9.0	14.0	最大径 13.2	やや粗	良	暗青灰色 (5PB4/1) 浅黄橙色 (10YR3/4)	ハケ目、ナデ、指オサエ ナデ、ハケ目、ミガキ	体部外面に黒斑
5	23	32	2区 SI4	弥生土器	甕	9.4	[5.6]	-	やや粗	やや良	浅黄橙色 (10YR8/4) 浅黄橙色 (10YR8/4)	ハケ目 不明	
6	23	32	2区 SI4	弥生土器	鉢	7.6	5.0	-	やや密	やや良	明黄褐色 (10YR7/6) 浅黄橙色 (10YR8/3)	指オサエ、ナデ ナデ	
7	23	32	2区 SI4 内 東端	弥生土器	壺	-	[32.9]	9.6	粗	不良	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 浅黄褐色 (2.5Y7/4)	ヘラナデ ナデ後ミガキ、ヘラケズリ	体部外面に黒斑
8	24	32	1区 SK3	弥生土器	甕	(26.6)	[6.0]	最大径 27.2	やや密	良	にぶい赤褐色 (2.5YR5/4) 明褐灰色 (7.5YR7/2)	ミガキか ハケ目	
9	24	32	1区 SK9	弥生土器	甕	(21.8)	[7.25]	最大径 22.6	やや粗	不良	褐灰色 (7.5YR6/1) 灰褐色 (7.5YR5/2)	ナデか 不明	
10	24	32	1区 SK11	弥生土器	壺	18.0	[12.3]	-	やや密	良	浅黄褐色 (10YR8/4) 浅黄褐色 (10YR8/4)	ハケ目、指オサエ、ナデ、 ミガキ ハケ目、ナデ	
11	24	32	1区 SK11	弥生土器	壺	-	-	-	やや密	やや良	褐灰色 (10YR4/1) 灰黄褐色 (10YR5/2)	ハケ目、 ハケ目、ミガキ	
12	24	32	1区 SK11	弥生土器	壺	-	-	-	やや密	やや良	褐灰色 (10YR4/1) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	ハケ目 ミガキ	
13	24	33	1区 SK11	弥生土器	壺	-	[52.9]	12.3	やや密	不良	褐灰色 (10YR4/1) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	ハケ目 ハケ目	
14	24	33	1区 SK13	弥生土器	甕	-	[1.3]	-	やや密	やや良	灰白色 (10YR8/1) 灰褐色 (7.5YR6/2)	不明 不明	擬無文土器か
15	24	33	1区 SK13	弥生土器	壺	-	-	-	密	不良	にぶい黄褐色 (10YR7/4) 明黄褐色 (10YR7/6)	不明 不明	
16	24	33	1区 SK14	弥生土器	壺	(7.6)	12.5	5.2	やや粗	良	灰白色 (7.5YR8/1) 灰白色 (7.5YR8/1)	ミガキ、指オサエ ミガキ	
17	24	33	1区 SK14	弥生土器	壺	-	-	-	密	良	橙色 (7.5Y7/6) 橙色 (7.5YR6/6)	ミガキ ミガキ	
18	24	33	1区 SK14	弥生土器	甕	16.6	17.6	4.6	粗	良	灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	ハケ目 ハケ目、ミガキ	
19	24	33	1区 SK14	弥生土器	鉢	9.8	4.4	3.6	粗	不良	にぶい黄褐色 (10YR7/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	ハケ目 ハケ目	
20	24	33	1区 SK14	弥生土器	甕	(14.4)	14.5	(4.2)	粗	やや良	灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	ハケ目、ヘラナデ ハケ目、ヘラナデ	
21	25	33	1区 SK15	弥生土器	壺	-	[2.8]	-	やや密	やや良	浅黄褐色 (7.5YR8/4) 橙色 (5YR7/6)	ヨコナデ ヨコナデ、ハケ目	
22	25	33	1区 SK22	弥生土器	壺	(25.2)	3.65	最大径 (25.4)	密	良	明赤褐色 (2.5YR5/6) 明赤褐色 (2.5YR5/8)	ハケ目 ハケ目	
23	25	33	1区 SK22	弥生土器	壺	(9.5)	[7.7]	現存最大 径 (20.1)	密	不良	灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	不明 ミガキか	
24	25	33	1区 SK22	弥生土器	甕	-	[1.3]	-	やや密	良	橙色 5YR7/6	不明	擬無文土器か
25	25	33	1区 SK25	弥生土器	台付鉢	11.9	7.1	8.5	やや密	良	にぶい黄褐色 (10YR7/4)、褐灰色 (10YR4/1) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	ナデ、指オサエ ハケ目、ナデ	
26	25	33	1区 SK31	弥生土器	甕	28.8	7.2	最大径 29.3	やや粗	良	灰白色 (7.5YR8/1) 灰褐色 (7.5YR6/2)	ナデ、ミガキ ハケ目	
27	25	33	1区 SK31	弥生土器	甕	18.0	24.05	5.8	粗	良	灰白色 (2.5Y8/2) 灰白色 (2.5Y8/2)、橙 色 (2.5YR7/6)	ミガキ、指オサエ ハケ目	
28	25	34	1区 SK43	弥生土器	壺	26.0	[17.3]	-	やや粗	やや良	灰白色 (2.5Y8/2) 灰白色 (10YR8/2)、 褐灰色 (10YR5/1)	指オサエ、ナデ、ミガキか 指オサエ、ナデ、ミガキか	
29	25	34	1区 SK43	弥生土器	甕	(28.6)	[7.2]	現在最大 径 32.4	粗	やや良	橙色 5YR7/8 橙色 5YR7/6	ミガキ ヨコナデ、ハケ目	
30	26	34	1区 SK43	弥生土器	壺	-	[35.1]	112	やや粗	良	にぶい褐色 (7.5YR5/4) にぶい褐色 (7.5YR5/4)	ハケ目、ヘラナデ、ミガキ ハケ目、ミガキ	
31	26	34	1区 SK53	弥生土器	壺	-	15.6	最大径 16.3	密	良	灰白色 (10YR8/2) 浅黄褐色 (7.5YR8/3)	指ナデ、指オサエ ハケ目、ミガキ	
32	26	34	1区 SK53	弥生土器	壺	17.3	[42.5]	(9.3)	密	良	褐灰色 (10YR4/1) 褐灰色 (10YR4/1)	ハケ目、ナデ、指オサエ、 ミガキ ハケ目、ミガキ	

No.	挿図	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
						口径 (復元値)	器高 [残存値]	底径 (復元値)					
33	26	34	1区 SK53	弥生土器	壺	24.8	[11.5]	-	やや密	良	浅黄褐色 (10YR8/4) にぶい黄褐色 (10YR7/2)	ハケ目、ミガキ ハケ目、ナデ	
34	26	34	1区 SK53	弥生土器	壺	20.2	[12.6]	-	やや粗	やや良	橙色 (7.5YR7/6) 橙色 (7.5YR7/6)	ハケ目、ヨコナデ ハケ目、ナデ	内面貼付突帯の4ヶ所に 双孔を穿つ
35	26	34	1区 SK53	弥生土器	壺	-	[3.7]	-	やや密	良	明赤褐色 (5YR5/6) 橙色 (5YR6/6)	ナデ ヨコナデ	
36	27	34	1区 SK53	弥生土器	甗	26.0	[23.3]	最大径 (27.3)	やや密	良	橙色 (2.5YR7/8) 橙色 (2.5YR7/8)	ハケ後ミガキ ハケ目	
37	27	34	1区 SK53	弥生土器	甗	-	[6.1]	-	やや密	やや良	浅黄褐色 (7.5YR8/4) 浅黄褐色 (7.5YR8/4)	ハケ目 ミガキ	
38	27	35	1区 SK53	弥生土器	壺	-	[7.7]	5.7	やや粗	良	褐色 (5YR7/6) 褐色 (5YR7/6)	ナデ、ケズリ ハケ目、ミガキ、ケズリ	外面に煤付着
39	27	35	1区 SK53	弥生土器	甗	-	[12.8]	-	やや粗	良	褐色 5YR7/6 褐色 5YR7/6	ハケ目 ハケ目	外面に指頭痕顕著 外面に煤付着
40	27	35	1区 SK53	弥生土器	甗	23.2	[22.6]	-	やや密	やや良	褐色 (7.5YR6/8) 褐色 (7.5YR7/6)	ハケ目、ヘラナデ 刻目、ハケ目、ヘラナデ	
41	27	35	1区 SK53	弥生土器	甗	24.8	[27.4]	最大径 25.2	やや密	良	赤褐色 (10R6/8) 赤褐色 (10R6/8)	ハケ目 ハケ目、ナデ	
42	27	35	1区 SK53	弥生土器	甗	-	[9.8]	4.4	やや粗	良	褐色 (5YR7/6) 褐色 (5YR7/6)	ミガキ ハケ目	
43	27	35	1区 SK53	弥生土器	鉢か	(16.6)	[4.9]	-	密	良	にぶい褐色 (10YR5/3) 灰黄褐色 (10YR4/2)	ヘラナデ ミガキ	口縁部を突帯状に成形し 斜格子に刻目を入れる
44	28	35	1区 SK58	弥生土器	壺	-	[21.9]	最大径 35.0	やや粗	良	にぶい黄褐色 (10YR7/2) にぶい褐色 (7.5YR5/3)、 灰褐色 (7.5YR4/2)	ハケ目 ハケ目、ミガキ	胴部外面に顔料痕か
45	28	35	1区 SK58	弥生土器	壺	-	-	-	やや密	良	浅黄褐色 (10YR8/3) にぶい黄褐色 (10YR5/3)	ハケ目 ミガキ	
46	28	35	2区 ST4 内柱穴	弥生土器	壺	(23.8)	[10.6]	最大径 (26.3)	やや粗	良	浅黄褐色 (10YR8/3) にぶい赤褐色 (5YR4/4)	ミガキ ハケ目、ミガキ	
47	28	35	2区 SD4	弥生土器	高杯	-	[12.4]	現存最大 径 (7.6)	粗	不良	淡褐色 (5YR8/4) 灰白色 (10YR8/2)	回転ナデ 不明	外面に黒斑
48	28	35	2区 SD4	弥生土器	壺	(23.95)	[10.7]	現存最大 径 (35.7)	粗	不良	灰黄褐色 (10YR6/2) 浅黄褐色 (10YR8/3)	ヨコナデ、一部ハケ目 一部ハケ目	
49	28	35	2区 SD4 北側	弥生土器	壺	(14.5)	[4.8]	最大径 (20.3)	粗	不良	浅黄褐色 (7.5YR8/6) 浅黄褐色 (7.5YR8/6)	不明 ヨコナデ	
50	28	35	2区 西側 壁面	弥生土器	壺	(2.9)	7.6	最大径 5.5	やや粗	やや良	にぶい黄褐色 (10YR7/4) にぶい黄褐色 (10YR7/4)	指オサエ 指オサエ、ナデ	
51	28	35	1区 SP308	弥生土器	甗	-	-	-	密	良	浅黄褐色 (7.5YR8/6) 黄褐色 (7.5YR8/8)	ハケ目、ヘラケズリ タタキ、ハケ目	
119	33	40	2区 SP162	土師器	皿	6.95	1.3	3.6	密	良	灰白色 (10YR8/2) 灰白色 (10YR8/2)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り、板目圧 痕
120	33	40	2区 SP83	土師器	皿	7.8	1.1	4.6	密	良	にぶい褐色 (7.5YR7/3) にぶい褐色 (7.5YR7/3)	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
121	33	40	2区 SP79	土師器	皿	7.8	1.2	5.6	密	良	灰褐色 (7.5YR5/2) 灰褐色 (7.5YR5/2)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
122	33	40	2区 ST2	土師器	皿	(10.0)	2.4	5.2	やや密	やや良	にぶい黄褐色 (10YR7/2) 灰黄褐色 (10YR6/2)	ロクロナデ ロクロナデ	底部回転糸切り、内面に 煤付着、灯明皿か
123	33	40	2区 ST2	土師器	皿	12.4	2.8	5.3	密	良	灰白色 (10YR8/1) 灰白色 (10YR8/2)	回転ナデか 回転ナデか	底部回転糸切り、板目圧 痕
124	33	40	2区 SP84	土師器	杯	12.6	2.9	5.2	密	良	にぶい褐色 (5YR7/3) にぶい褐色 (5YR7/3)	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
125	33	40	2区 SP85	土師器	高台付杯	-	[5.0]	10.4	密	良	褐色 (7.5YR6/6) 褐色 (7.5YR6/6)	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	底部糸切り後ナデ
126	33	40	2区 SD2 東側壁	瓦質土器	蓋	26.0	6.2	つまみ部 径 10.6 最大径 26.1	やや密	良	褐灰色 (7.5YR4/1) 灰白色 (10YR7/1)	ミガキか ミガキ	外面に黒斑あり 火消し壺用
127	33	40	2区 SP61	瓦質土器	足鍋	-	[13.7]	-	やや粗	やや良	灰色 (10YR8/1)	指オサエ	
128	33	40	1区 ST1	青磁	椀	16.2	7.1	6.1	密	良	オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 釉色 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1)	回転ナデ、 回転ナデ、ヘラケズリ	底部回転ヘラ切り
129	33	40	1区 ST1	白磁	皿	10.8	2.2	3.9	密	良	浅黄色 (2.5Y7/3) 釉色 灰黄色 (2.5Y7/2) 釉色	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズリ (左)	
130	33	40	1区 ST1	白磁	小壺	2.6	4.0	2.8	密	良	灰白色 (5Y7/2) 釉色 灰白色 (5Y7/2) 釉色	回転ナデ、施釉 回転ナデ後回転ヘラケズリ (左)	底部回転ヘラケズリ (左)

第3表 出土石器・石製品観察一覧表

No.	挿 図	図 版	出土場所	器種	法量 (cm)			重さ (g)	石材・材料	備考
					長さ [残存値]	幅 [残存値]	厚さ [残存値]			
52	29	36	3区 SK109 上面	打製石鏃	1.9	1.2	0.4	0.6	安山岩	
53	29	36	2区 表採	打製石鏃	2.0	1.6	0.3	0.5	安山岩	
54	29	36	1区 SK29	打製石鏃	2.4	1.9	0.3	1.2	安山岩	
55	29	36	1区 SK29	打製石鏃	1.8	1.5	0.3	0.5	安山岩	
56	29	36	1区 SK55	打製石鏃	2.7	1.8	0.6	1.9	安山岩	
57	29	36	1区 表採	打製石鏃	3.0	2.0	0.5	2.3	安山岩	
58	29	36	1区 SK13	打製石鏃	3.1	1.3	0.4	1.6	安山岩	製作途中の破損品
59	29	36	1区 SI1 サブトレンチ南東・ 南東区	石包丁	[5.6]	[5.2]	0.7	0.87	泥岩	紐孔内径 0.6cm
60	29	36	1区 SK25	磨製石斧	[6.7]	[6.5]	[1.2]	49.9	泥岩	
61	29	36	1区 SK54	局部磨製石斧	12.65	4.9	2.9	232	チャート	
62	29	36	1区 表採	打製石斧	9.5	4.8	2.45	161	砂岩	
63	29	36	3区 SK103	石斧	[10.6]	[8.0]	3.7	220	砂岩	未製品
64	29	36	1区 SK14	打製石斧	[14.4]	5.2	1.85	243	緑色片岩	一部研磨面有り
65	29	36	1区 SK59	打製石斧	13.2	5.7	1.9	176	緑色片岩	
66	29	36	1区 表採	打製石斧	7.3	4.0	0.9	161	緑色片岩	
67	29	36	1区 SK38 床直上	打製石斧	10.95	5.8	1.9	116.2	緑色片岩	
68	29	36	1区 SK58	打製石斧	10.0	4.5	1.4	73.1	緑色片岩	未製品
69	29	36	1区 SI1 北西区	打製石斧	[5.25]	[4.7]	1.25	46.4	緑色片岩	製作途中での破損品
70	29	36	1区 SK54	打製石斧	8.4	4.8	1.8	64.7	緑色片岩	製作途中での破損品
71	29	36	1区 SK53	打製石斧	12.55	5.7	1.3	114.2	緑色片岩	製作途中での破損品
72	29	36	1区 SI1 サブトレンチ南東	打製石斧	[10.85]	[5.8]	1.2	114.7	緑色片岩	製作途中での破損品
73	29	37	1区 SK50	打製石斧	1.35	4.5	1.5	83.4	緑色片岩	製作途中での破損品
74	29	37	1区 SK5	削器	15.1	9.2	2.9	424	泥岩	
75	30	37	1区 SK5	磨石	[10.7]	[7.9]	4.6	589	花崗斑岩	敲石としても使用
76	30	37	1区 SK35	磨石	10.0	8.8	4.0	572	花崗斑岩	敲石としても使用
77	30	37	1区 SK39	磨石	11.9	6.7	4.75	591	花崗斑岩	有機質付着
78	30	37	1区 SI1 床直上	磨石	8.8	7.9	6.4	628	砂岩	敲石としても使用
79	30	37	1区 SI1 南東区	磨石	[6.9]	[8.8]	5.1	401	花崗斑岩	敲石としても使用
80	30	37	1区 SK59	磨石	7.1	7.3	3.9	230	砂岩	敲石としても使用
81	30	37	1区 SK11	磨石	15.2	4.9	3.5	352	砂質片岩	
82	30	37	1区 SK59	砥石	7.2	6.4	4.5	287	凝灰岩	
83	30	38	1区 SK39 床面	砥石	[10.7]	[9.9]	5.4	506	砂岩	
84	30	38	1区 SP254	砥石	[11.4]	[12.9]	3.4	369	凝灰岩か	
85	30	38	1区 SK5	砥石	[8.2]	[13.1]	4.3	369	凝灰岩	
86	30	38	1区 SI1 西ベルト内	砥石	[8.25]	[10.3]	4.05	674	花崗斑岩	
87	30	38	1区 SK39	砥石	13.05	12.3	4.0	815	砂岩か	
88	31	38	1区 SK39	砥石	[11.3]	[7.0]	2.7	254	砂岩	
89	31	38	1区 SK53	砥石	6.2	7.2	2.8	84.6	軽石	
90	31	38	1区 SK13	砥石	7.55	5.5	4.1	168	砂岩	
91	31	38	1区 遺構面	砥石	[3.9]	[1.95]	[1.0]	11.0	泥岩	
92	31	38	1区 SI1 西南区	砥石	9.75	3.35	1.2	78.1	泥岩	
93	31	38	2区 SI4 中央土坑内 北東端の 小柱穴	砥石	7.4	4.8	4.1	42.3	軽石	浮石の可能性もあり
94	31	38	1区 SK57	石錘	4.4	3.5	1.5	31.4	砂岩	
95	31	38	1区 SK53	用途不明品	14.3	5.7	5.2	564	石英斑岩 または凝灰岩	錘の可能性あり
96	31	39	1区 SK13	石器原石	10.7	8.1	6.1	725	泥岩	
97	31	39	1区 SD12	剥片石核	3.1	2.4	1.55	12.5	チャート	

No.	挿 図 版	出土場所	器種	法量 (cm)			重さ (g)	石材・材料	備考	
				長さ [残存値]	幅 [残存値]	厚さ [残存値]				
98	31	39	1区 SK41	剥片	1.8	1.5	0.25	0.6	黒曜石	自然面残る 両極石器の可能性あり
99	31	39	1区 SI1 南東区	剥片	2.4	2.0	0.7	1.5	姫島産黒曜石	
100	31	39	1区 SK45	剥片	4.8	3.0	2.4	18.4	姫島産黒曜石	自然面残る
101	31	39	1区 SK13	剥片	3.1	1.3	0.9	3.2	姫島産黒曜石	自然面残る
102	31	39	1区 SK38	剥片	3.0	2.6	0.9	0.6	姫島産黒曜石	
103	31	39	1区 SK13	剥片	3.1	1.6	0.6	2.5	姫島産安山岩	自然面残る
104	31	39	1区 SI1 西南区	剥片	4.6	1.5	0.45	3.1	安山岩	
105	31	39	1区 SK43 下層	剥片	5.2	1.6	0.7	5.0	安山岩	
106	31	39	1区 SK22	剥片	10.2	4.25	1.25	29.9	安山岩	
107	31	39	1区 SI1 北東区	剥片	3.65	2.3	0.6	6.4	緑色片岩	
108	31	39	1区 SI1 西南区	剥片	3.95	3.6	0.7	8.5	緑色片岩	
109	31	39	1区 SI1 セクション北 ベルト	石製紡錘車	3.7	3.6	0.6	14.0	泥岩	孔径 0.6 ~ 0.7cm
110	31	39	1区 SI1 北東区	石製紡錘車	[3.7]	[2.0]	0.5	5.7	泥岩	復元径 4.5cm 孔径 0.5 ~ 0.6cm
111	31	39	1区 SI1 北東区	石製紡錘車	[4.1]	[2.3]	0.63	9.6	泥岩	復元径 4.2cm 孔径 0.6cm
112	32	39	1区 SI4 床面	礫石	10.2	10.5	8.8	1243	花崗斑岩	つぶて石または支え石等か
113	32	39	2区 SI4 床面	礫石	10.35	10.0	7.9	1374	花崗斑岩	つぶて石または支え石等か
114	32	39	2区 SI4 床面	礫石	11.0	9.8	8.4	1206	花崗斑岩	つぶて石または支え石等か
115	32	39	1区 SI4 床面	礫石	9.9	10.9	8.5	1140	花崗斑岩	つぶて石または支え石等か
116	32	39	2区 SI4 床面	礫石	12.85	9.6	7.9	1272	花崗斑岩	つぶて石または支え石等か
117	32	39	1区 SI4 床面	礫石	11.5	10.3	6.9	1149	砂岩	つぶて石または支え石等か
118	31	39	3区 SK114	石鍋	[6.5]	-	[1.5]	-	滑石	
136	-	39	2区 SI4 床面	礫石	7.3	6.7	5.4	1149	花崗斑岩	つぶて石または支え石等か
137	-	39	2区 SI4 床面	礫石	7.05	5.2	6.1	1178	花崗斑岩	つぶて石または支え石等か
138	-	39	2区 SI4 床面	礫石	7.5	6.7	5.85	1186	砂岩	つぶて石または支え石等か
139	-	39	2区 SI4 床面	礫石	9.8	6.3	4.5	1165	砂岩	つぶて石または支え石等か

第4表 出土鉄製品観察一覧表

No.	挿 図 版	出土場所	器種	法量 (cm)			重さ (g)	備考	
				長さ [残存値]	幅 [残存値]	厚さ [残存値]			
131	33	40	1区 ST1	鋸	[4.4]	0.6	0.2	2.0	半損品。錆膨れ2ヶ所あり。
132	33	40	1区 ST1	鋸	[3.9]	0.6	0.25	1.3	渡り部のみ。
133	33	40	2区 ST2	釘	9.15	1.95	1.2	14.8	頭部の錆化が著しい。木質付着。
134	33	40	1区 ST3	釘	[3.0]	1.7	0.9	3.1	頭部錆化。木質付着。
135	33	40	1区 ST3	釘	7.7	1.3	1.2	6.9	頭部錆化。木質付着。

(4) 鉄製品 (第33図 図版40 第4表)

131・132はST1出土の鉄鋸で、131は渡り部から一方の爪部にかかるもので、その先端は欠け、錆膨れが2か所にある。132は渡り部の一部。共の断面は非常に扁平である。133はST2出土の鉄釘で、頭部から胴部中央部にかけて錆化が著しく、下半部には木質の付着がみられる。134・135はST3出土の鉄釘で、134は頭部、135は胴部に木質が顕著に残る。134は胴部が錆化で空洞化している。

IV 自然科学分析

放射性炭素年代測定・樹種・種実同定

株式会社加速器分析研究所

1 はじめに

道場・中村遺跡は縄文時代から近世にわたる複合遺跡で、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑などの遺構が検出されている。今回分析を行う試料は1区、2区で検出された遺構から出土した炭化材、炭化種実の合計11点で、各試料についてAMS法による放射性炭素年代測定(2)、樹種・種実同定(3)を実施した。

2 AMS法による放射性炭素年代測定

(1) 試料

測定対象試料は、1区、2区の遺構から出土した炭化材9点と炭化種実2点の合計11点である(表5)。試料1、3～10は弥生時代前期末から中期、2は弥生時代後期、11は平安時代から中世と推定されている。

(2) 化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。

(2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第5表に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。

(6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(3) 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(4) 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (第 5 表)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第 5 表に、補正していない値を参考値として第 6 表に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第 5 表に、補正していない値を参考値として第 6 表に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.3\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20 較正曲線 (Reimer et al. 2020) を用い、OxCalv4.4 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第 6 表に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

(5) 測定結果

測定結果を第 5・6 表に示す。

竪穴建物、竪穴建物柱穴出土試料 5 点 (試料 1 ~ 5) の ^{14}C 年代は、 $2040 \pm 20\text{yrBP}$ (試料 1) から $450 \pm 20\text{yrBP}$ (試料 3) とかなり幅がある。暦年較正年代 (1σ) は、最も古い試料 1 が 88cal BC ~ 9cal AD の間に 2 つの範囲、最も新しい試料 3 が 1435 ~ 1455cal AD の範囲で示される。試料 1、2、4、5 は推定と一致する年代値である。試料 3 は推定よりかなり新しい年代値を示しており、新しい時期の炭化材が混入した可能性がある (佐原 2005、藤尾 2009、小林 2009)。

土坑出土試料 5 点 (試料 6 ~ 10) の ^{14}C 年代は、 $2290 \pm 20\text{yrBP}$ (試料 6、7) から $2210 \pm 20\text{yrBP}$ (試料 8) の間にまとまる。暦年較正年代 (1σ) は、最も古い試料 6 が 399 ~ 266cal BC の間に 2 つの範囲、試料 7 が 399 ~ 364cal BC の範囲、最も新しい試料 8 が 357 ~ 204cal BC の

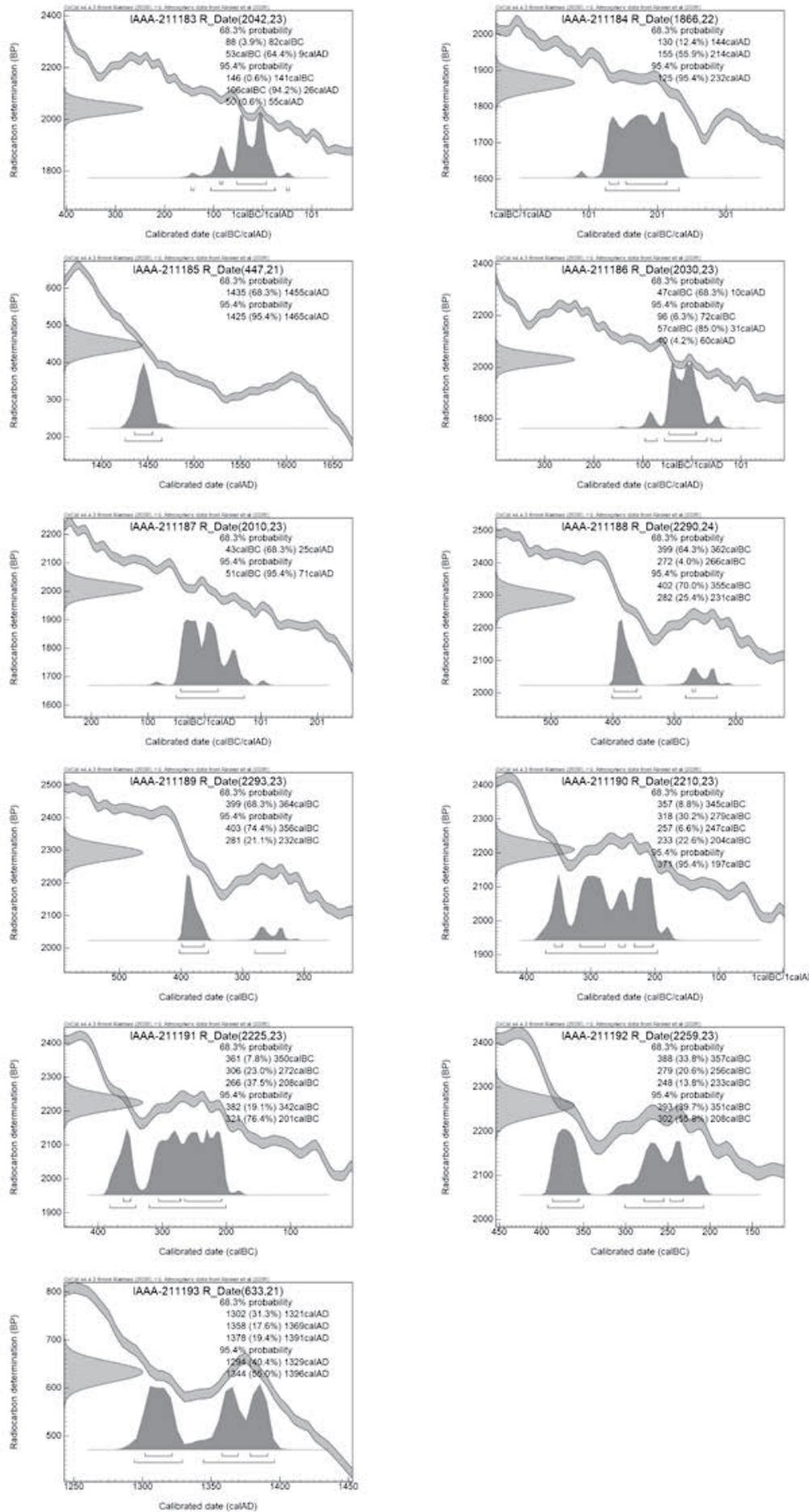
第5表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-211183	1	1区 竪穴建物 SI1P13	炭化材	AAA	-27.23 ± 0.18	2,040 ± 20	77.55 ± 0.22
IAAA-211184	2	2区 竪穴建物 SI4 炉	炭化材	AAA	-26.89 ± 0.22	1,870 ± 20	79.26 ± 0.22
IAAA-211185	3	2区 竪穴建物 SI7P2	炭化材	AAA	-25.76 ± 0.22	450 ± 20	94.58 ± 0.25
IAAA-211186	4	2区 竪穴建物柱穴 SI10 (SP117)	炭化材	AAA	-27.97 ± 0.23	2,030 ± 20	77.66 ± 0.23
IAAA-211187	5	1区 竪穴建物柱穴 SI9 (SP273)	炭化材	AAA	-27.7 ± 0.21	2,010 ± 20	77.86 ± 0.23
IAAA-211188	6	1区 土坑 SK31	炭化材	AAA	-25.45 ± 0.28	2,290 ± 20	75.2 ± 0.22
IAAA-211189	7	1区 土坑 SK39	炭化材	AAA	-29.71 ± 0.21	2,290 ± 20	75.17 ± 0.22
IAAA-211190	8	1区 土坑 SK50	炭化材	AAA	-26.64 ± 0.24	2,210 ± 20	75.95 ± 0.22
IAAA-211191	9	1区 土坑 SK53	炭化種実	AAA	-25.74 ± 0.23	2,230 ± 20	75.8 ± 0.22
IAAA-211192	10	1区 土坑 SK53	炭化種実	AaA	-25.66 ± 0.21	2,260 ± 20	75.48 ± 0.22
IAAA-211193	11	2区 墓 ST2	炭化材	AAA	-29 ± 0.24	630 ± 20	92.42 ± 0.25

第6表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-211183	2,080 ± 20	77.19 ± 0.22	2,042 ± 23	88calBC - 82calBC (3.9%) 53calBC - 9calAD (64.4%)	146calBC - 141calBC (0.6%) 106calBC - 26calAD (94.2%) 50calAD - 55calAD (0.6%)
IAAA-211184	1,900 ± 20	78.95 ± 0.22	1,866 ± 22	130calAD - 144calAD (12.4%) 155calAD - 214calAD (55.9%)	125calAD - 232calAD (95.4%)
IAAA-211185	460 ± 20	94.43 ± 0.24	447 ± 21	1435calAD - 1455calAD (68.3%)	1425calAD - 1465calAD (95.4%)
IAAA-211186	2,080 ± 20	77.19 ± 0.22	2,030 ± 23	47calBC - 10calAD (68.3%)	96calBC - 72calBC (6.3%) 57calBC - 31calAD (85.0%) 40calAD - 60calAD (4.2%)
IAAA-211187	2,050 ± 20	77.43 ± 0.22	2,010 ± 23	43calBC - 25calAD (68.3%)	51calBC - 71calAD (95.4%)
IAAA-211188	2,300 ± 20	75.12 ± 0.22	2,290 ± 24	399calBC - 362calBC (64.3%) 272calBC - 266calBC (4.0%)	402calBC - 355calBC (70.0%) 282calBC - 231calBC (25.4%)
IAAA-211189	2,370 ± 20	74.44 ± 0.21	2,293 ± 23	399calBC - 364calBC (68.3%)	403calBC - 356calBC (74.4%) 281calBC - 232calBC (21.1%)
IAAA-211190	2,240 ± 20	75.69 ± 0.22	2,210 ± 23	357calBC - 345calBC (8.8%) 318calBC - 279calBC (30.2%) 257calBC - 247calBC (6.6%) 233calBC - 204calBC (22.6%)	371calBC - 197calBC (95.4%)
IAAA-211191	2,240 ± 20	75.68 ± 0.22	2,225 ± 23	361calBC - 350calBC (7.8%) 306calBC - 272calBC (23.0%) 266calBC - 208calBC (37.5%)	382calBC - 342calBC (19.1%) 321calBC - 201calBC (76.4%)
IAAA-211192	2,270 ± 20	75.38 ± 0.22	2,259 ± 23	388calBC - 357calBC (33.8%) 279calBC - 256calBC (20.6%) 248calBC - 233calBC (13.8%)	393calBC - 351calBC (39.7%) 302calBC - 208calBC (55.8%)
IAAA-211193	700 ± 20	91.66 ± 0.24	633 ± 21	1302calAD - 1321calAD (31.3%) 1358calAD - 1369calAD (17.6%) 1378calAD - 1391calAD (19.4%)	1294calAD - 1329calAD (40.4%) 1344calAD - 1396calAD (55.0%)

[参考値]



第 34 図 暦年校正年代グラフ (参考)

間に4つの範囲で示される。いずれも推定と一致する年代値である（藤尾 2009、小林 2009）。

墓出土試料 11 の ^{14}C 年代は $630 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は 1302 ~ 1391cal AD の間に3つの範囲で示され、推定に一致する結果である。

なお、試料 11 点のうち炭化材 9 点については、以下に記述する古木効果を考慮する必要がある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる（古木効果）。今回測定された9点の試料は樹皮が確認されていない（試料 8 には炭化樹皮片が含まれていたが、樹種同定の対象と同一炭化材片を測定した）ことから、試料となった木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

また、試料 1、2、4、5 が含まれる 1 ~ 3 世紀頃の暦年較正に関しては、これまで北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘があった（尾崎 2009、坂本 2010 など）。2020 年に更新された較正曲線 IntCal20 (Reimer et al. 2020) では、新たに日本産樹木のデータが採用された結果、この範囲の較正年代値が日本産樹木の測定値に近づいた。系統的に認められる差異の原因究明を含め、今後関連する研究の動向を注視する必要がある。

試料の炭素含有率はすべて 60% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

3 樹種・種実同定

(1) 試料

試料は、竪穴建物 (SI1、SI4、SI7)、竪穴建物柱穴 (SP117、SP273)、土坑 (SK31、SK39、SK50)、墓 (ST2) より出土した炭化材 9 点と、土坑 (SK53) より出土した種実 2 点である。試料詳細は結果第 7 表に記す。

(2) 分析方法

(1) 樹種同定

試料を割り折りして新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面を作製し、落射顕微鏡 (OPTIPHOTO-2 : Nikon) によって 50 ~ 1000 倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

(2) 種実同定

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。

(3) 結果

第7表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を第35～38図に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

(1) 炭化材

1) ヒノキ科 *Cupressaceae*

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞がみられる。放射柔細胞の分野壁孔はやや小型であるが型は不明瞭であり、1分野には1～3個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、樹脂細胞が存在する。

試料の状態が悪く、以上の特徴からヒノキ科までの同定に留める。

2) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

3) スダジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima ブナ科

年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型を示す。

4) コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

5) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科

中型から大型の道管が1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管

第7表 道場・中村遺跡における樹種・種実同定結果

番号	地区	遺構種類	遺構名	試料形態	樹種	備考
1	1区	竪穴建物柱穴	SI1P13	炭化材	クリ	
2	2区	竪穴建物炉	SI4 炉	炭化材	クリ	
3	2区	竪穴建物柱穴	SI7P2	炭化材	コナラ属コナラ節	
4	2区	竪穴建物柱穴	SI10 (SP117)	炭化材	カナメモチ	
5	1区	竪穴建物柱穴	SI9 (SP273)	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	
6	1区	土坑	SK31	炭化材	スダジイ	
7	1区	土坑	SK39	炭化材	ヒノキ科	
8	1区	土坑	SK50	炭化材	サクラ属	
9	1区	土坑	SK53	種実	ツブラジイ	子葉1
10	1区	土坑	SK53	種実	イチイガシ	子葉破片2 同一個体
11	2区	墓	ST2	炭化材	ハイノキ属	

は単独で複合しない。道管の穿孔は単穿孔、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

6) サクラ属 *Prunus* バラ科

丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性放射組織型を示す。

7) カナメモチ *Photinia glabra* Maxim バラ科

小型でやや角張った道管がほぼ単独で散在する散孔材である。道管の径は早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。軸方向柔細胞が晩材部で接線方向に連なる傾向を示す。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が見られる。放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。

8) ハイノキ属 *Symplocos* ハイノキ科

小型で角張った道管が単独あるいは2～4個不規則に複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～50本ぐらいである。放射組織は異性放射組織型で、1～4細胞幅である。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

(2) 種実

1) ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schott. 子葉 ブナ科

炭化していて黒色で、広卵形を呈す。

2) イチイガシ *Quercus gilva* Blume 子葉 ブナ科

炭化していて黒色で、楕円形を呈する。表面はなめらかで、縦方向に一条の凹線が入る。

(4) 所見

同定の結果、道場・中村遺跡の炭化材は、ヒノキ科1点、クリ2点、スダジイ1点、コナラ属コナラ節1点、コナラ属アカガシ亜属1点、サクラ属1点、カナメモチ1点、ハイノキ属1点、種実はツブラジイ子葉1点、イチイガシ子葉破片2点であった。なお、種実のイチイガシ子葉2点は同一個体である。

竪穴建物からはクリとコナラ属コナラ節が同定された。なお、クリは炉からの出土である。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。重硬で保存性の良い材であり、柱材などの建築部材として比較的良く利用される樹木である。なお、燃料材としては燃やすと弾け、火力はあるがやや火持ちが悪いが、縄文時代にはよく利用されていた。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。強靱で弾力に富み、建築部材として用いられる木材である。燃料材としては火力も火持ちも良く優良である。

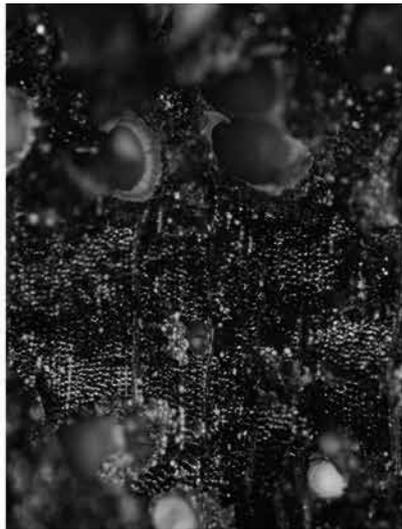
竪穴建物柱穴からはコナラ属アカガシ亜属、カナメモチが同定された。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高

木で、高さ 30m、径 1.5m以上に達する。堅硬で粘り気があり水湿にも強い材であり、建築部材に適している。建築部材にも用いられるが、西南日本では弥生時代以降、特に農耕具を中心に用いられる傾向にある。カナメモチは、本州（東海以西）、四国、九州の暖地に分布する。常緑の小高木で、通常高さ 5～10m、径 15～30cmである。極めて堅く、現在では農具の柄、扇の要、算盤の珠などに利用される。

土坑からはヒノキ科、スダジイ、サクラ属の炭化材、ツブラジイ、イチイガシの種実が同定された。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロ、ネズコなどがある。ヒノキ科は木理通直で大きな材が取れる種類が多く、加工工作が容易で耐朽・保存性が高い。建築部材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。スダジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ 20m、径 1.5mに達する。やや重硬で耐朽・保存性は低い材であり、杭としての利用が多く、次いで建築部材、鉢などの容器に用いられる。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。サクラ属は耐朽・保存性の高い材で、切削・加工の難度は中庸で、概して堅硬な材と言える。なお、古くは鉢などの容器や柱材などの報告例がある。SK53 ではツブラジイ、イチイガシの子葉が出土しており、いずれも渋抜きなしに食べられる種類で、食用として利用されたと考えられる。

墓からはハイノキ属が同定された。ハイノキ属には、ハイノキ、クロバイ、サワフタギ、クロキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑または落葉性の高木または低木である。ハイノキ属はやや堅硬、比較的強靱で弾性に富み、切削・加工は容易である。器具、小細工物などに利用される。また、灰を染料の媒染剤として用いる種がある。出土例は少ないが、岡山県の百間川原尾島遺跡（平安時代・室町時代前半）からは錘、下駄などが出土しており、比較的まっすぐな小径木を利用するようである。

同定された樹種および種実 は温帯から温帯下部の暖温帯に分布する樹木であった。クリは乾燥した台地や丘陵地を好み、スダジイ、ツブラジイは山地の適潤で肥沃な深層を好み、コナラ属コナラ節、コナラ属アカガシ亜属（イチイガシ）は陽当たりの良い山野に生育する。なお、いずれの樹種も二次林要素を含む。ヒノキ科は適潤性であり、尾根、急峻地または岩盤上にも生育する。サクラ属は排水の良い傾斜地に分布する。カナメモチは耐暑性が高く肥沃な山地の傾斜地を好むが、乾燥した尾根筋や沿海地にも生育する。ただし寒さに弱く降雪地域では大きく育たない。ハイノキ属は湿潤な二次林の林床や谷沿いや沿岸域、山頂や尾根筋などの乾燥地にも分布する。これらの樹種および種実 は本遺跡周辺に分布する樹木であり、当時遺跡周辺からか近隣地域よりもたらされたものと考えられる。種実 は食用としてアケの少ないツブラジイ、イチイガシなどのドングリが周囲の山林より採取された。なおハイノキ属は時期が中世であるため、二次林が周囲に分布していた可能性もある。



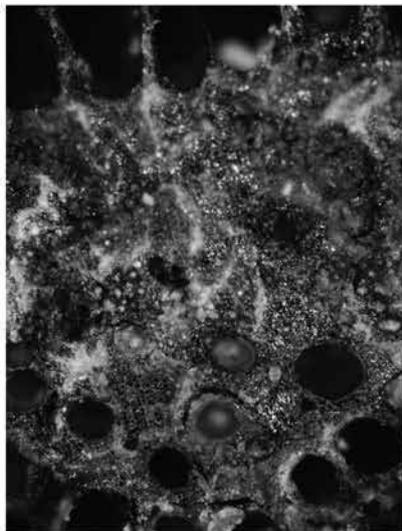
横断面
試料1 クリ 1区 S11P13



放射断面



接線断面



横断面
試料2 クリ 2区 S14炬



放射断面



接線断面



横断面
試料3 コナラ属コナラ節 2区 S17P2

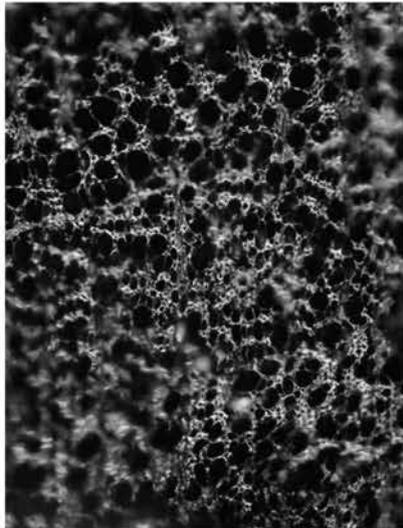


放射断面

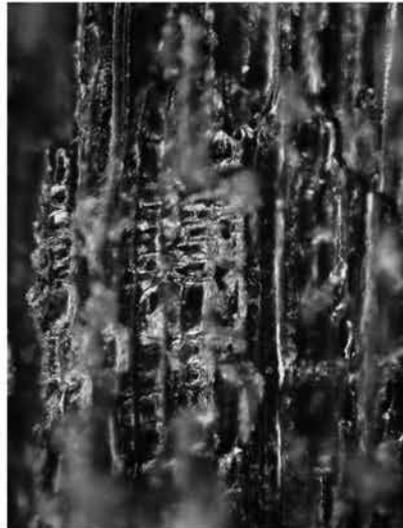


接線断面

第 35 図 道場・中村遺跡の木材 (1)



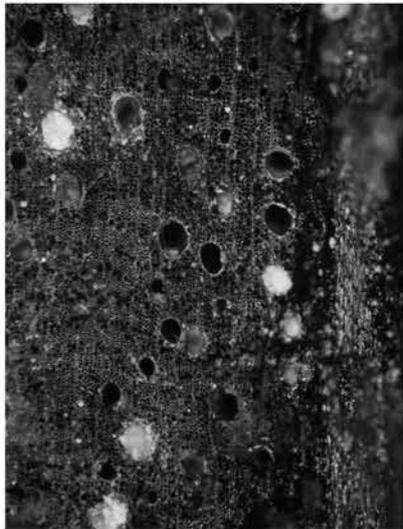
横断面
試料4 カナメモチ 2区 SP117



放射断面



接線断面



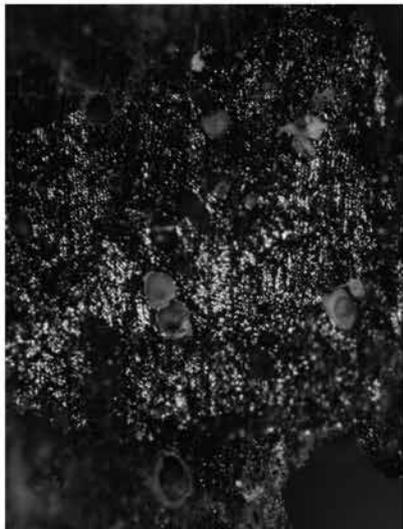
横断面
試料5 コナラ属アカガシ亜属 1区 SP273



放射断面



接線断面



横断面
試料6 スダジイ 1区 SK31

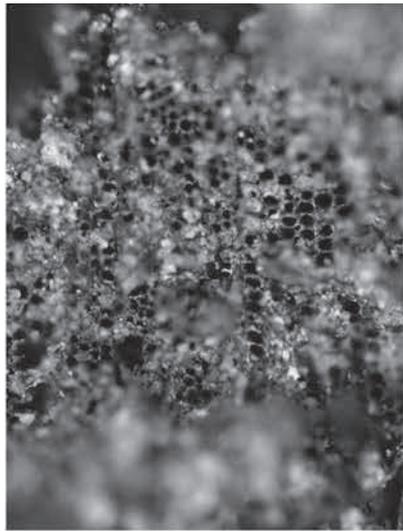


放射断面



接線断面

第 36 図 道場・中村遺跡の木材 (2)



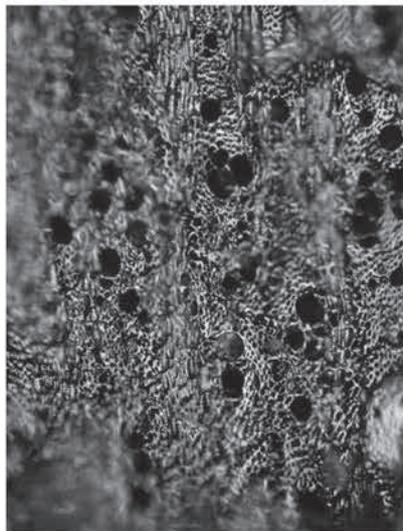
横断面
試料7 ヒノキ科 1区 SK39



放射断面



接線断面



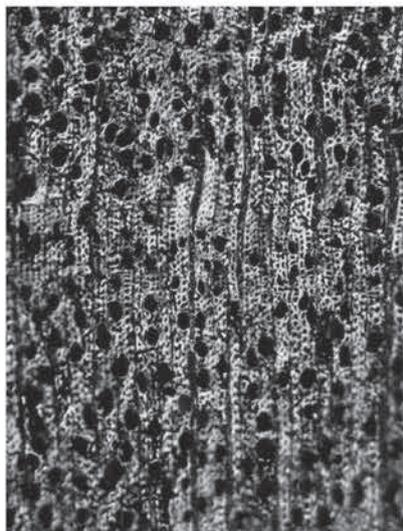
横断面
試料8 サクラ属 1区 SK50



放射断面



接線断面



横断面
試料11 ハイノキ属 2区 ST2



放射断面



接線断面

第 37 図 道場・中村遺跡の木材 (3)

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360
- 藤尾慎一郎 2009 弥生時代の実年代, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 9-54
- 伊東隆夫・山田昌久 2012 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社.
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82
- 尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素 14 年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編, 弥生時代の考古学 1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235
- パリノ・サーヴェイ 1996 百間川原尾島遺跡出土の木製品樹種同定, 百間川原尾島遺跡 5 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査 XI, 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 106, 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会・岡山県古代吉備文化財センター, 251-259
- 佐伯浩・原田浩 1985 針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, 20-48
- 佐伯浩・原田浩 1985 広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, 49-100
- 佐原真 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学 上 ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19
- 坂本稔 2010 校正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ-, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株)加速器分析研究所, 85-90
- 島地謙・伊東隆夫 1982 図説木材組織, 地球社, p.176.
- 島地謙・伊東隆夫 1988 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, p.296.
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363
- 山田昌久 1993 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成, 植生史研究特別第1号, 植生史研究会, p.242.



第 38 図 道場・中村遺跡の種実

V 総括

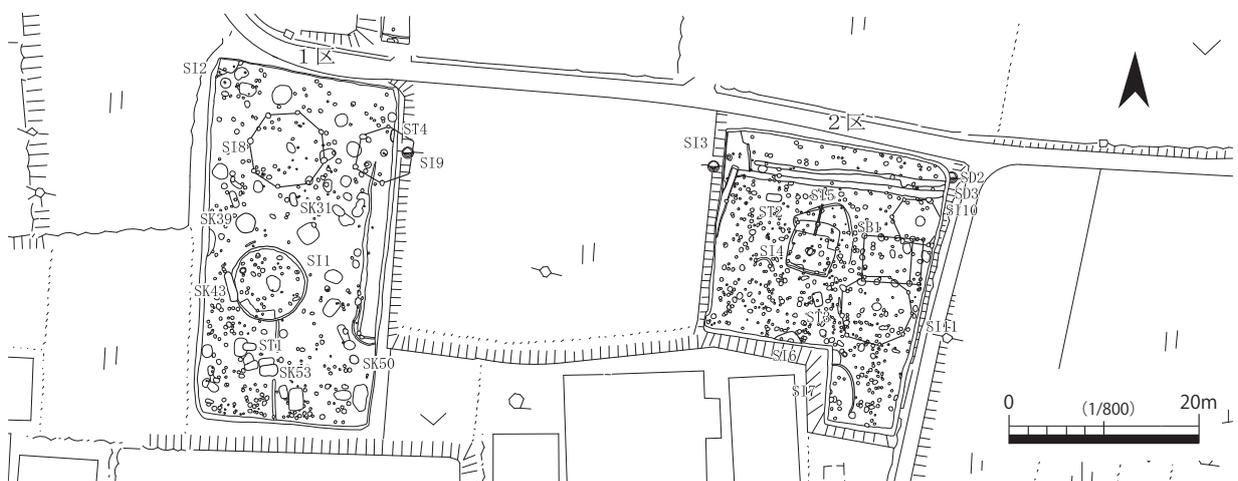
道場・中村遺跡では、東西に3箇所、合計2,380㎡の発掘調査を実施した。遺跡は本郷川の左岸に位置し、標高約76.0～78.0 mに立地する。西側に1区、中央部に2区、東側に3区と3区画に分かれており、1・3区が直線距離にして東西に約400 m離れる。いずれも、現在の本郷川から約50～120 m離れ、北・北西側の丘陵縁辺部に位置する遺跡である。遺跡からは、縄文時代から古墳時代・平安時代、中世から近世に至る多くの遺構・遺物を検出し、その主体は弥生時代中期前半の竪穴建物と土坑群である。ここでは、調査で得られた成果について述べてみたい。

遺構

遺構は弥生時代の竪穴建物と土坑、古代から中・近世の掘立柱建物、溝、墓、土坑、柱穴が検出された。

弥生時代中期を主体とし、後期後半の竪穴建物11棟は西側の1・2区に集中する。最も西側の1区で検出されたSI 1・2、中央部の2区SI 3～7はいずれも掘り込みが浅く、上部が削平されている。SI 7については最南端に位置し、南壁を欠失している。これは、調査区壁面の土層観察などから、中・近世段階の水田開発に伴う削平の影響と推定される。そのため、今回は壁面が確認されなくても、中央に炉状の掘り込み（土坑）を有し、主柱穴が円形に均等に並び、なおかつ石灰岩の礎石、あるいは石灰岩片の埋納柱穴を持つものも、竪穴建物として報告している（SI 8～11）。柱穴列だけでは建物としていないため、2区南西側などには、同様に壁面が失われている、あるいは、4本主柱穴や方形の別の竪穴建物があった可能性がある。

1・2区あわせて約1,690㎡の範囲内に、11棟の竪穴建物が検出され、隣接あるいは一部は切りあっており、かなり遺構分布密度は高い。両区の間には東西約30 mの未調査範囲も含まれ、集落はさらに東・北側の丘陵上に展開していたものと想定される。1～3区全域にわたって、上段が中・近世の水田開発によって削平されたと推定され、東側の3区についても弥生時代の集落は展開していたものの残っておらず、確認できなかった可能性がある。竪穴建物内の柱穴からは、石灰岩の礎石、あるいは石灰岩片を埋納したような出土状況の柱穴が多くみられ、礎石利用と、それ以外の何らかの風習・習俗を示すものと考えられる。



第39図 道場・中村遺跡1・2区主要遺構

また、1・2区で検出された土坑の多くは、円形・袋状を呈する貯蔵用途の土坑と推定され、竪穴建物の周辺で利用され、埋没時に多くの遺物が廃棄されたものと考えられる。

掘立柱建物については、遺物が出土しておらず、時期の特定が難しいが、側柱建物で東側に廂を持つなどの構造から、平安時代以降、中世と推定しておきたい。墓については、4基が確認され、1区のST 1は青磁・白磁・鉄釘などを出土しており、屋敷区画内に埋葬施設が点在していたことが想定される。また、副葬品の輸入陶磁器の様相から、有力層の存在が推定される。

溝も様々な規模で検出され、2区の2・3号溝などは東西ともに調査区外へ至り、全容や区画などを把握できなかったが、掘立柱建物と墓の分布域との関係などから、中世以降においても活発な土地利用が推定される(第39図)。また、西側の1・2区は、室町期以降の遺構があまりみられないことから室町時代以降に入ってから水田利用が想定され、3区は近世17・18世紀の遺物を含んだ土坑などみられることから、近世段階までは屋敷地内にあり、水田として利用されるのは近世後半から近代にかけてと推定される。柱穴についても多く検出され、弥生時代から中世までの各時期の遺物を出土しており、活発な土地利用の一端を示す。

遺物

弥生土器については、中期前半の土器を中心に、弥生時代後期までの幅広い時期のものが出土している。弥生時代の竪穴建物は11棟検出されたが、前述の後世の水田開発の削平により、遺物の出土は少なく、床面付近の遺物だけが残されていた。貯蔵を目的とする袋状の土坑が竪穴建物周辺に展開しており、その覆土中からの出土が多い。1区のSK43はSI 1に切られる長方形の土坑からの一括資料で、SK53も覆土中から多くの土器が出土している。

弥生土器は中期のものが主体となり、北部九州系の土器群と、県東部瀬戸内系の土器群が混在しており、沿岸部から内陸部への土器の移動様相を表す良好な資料といえる。

放射性炭素年代測定の結果、竪穴建物の年代は紀元後1～3世紀の時期を示し、出土土器の年代観である前期末葉から中期、後期と一致する。また、竪穴建物は中期の円形から、終末期に至ると方形へと変化することも、周辺の遺跡と傾向が一致する。また、土坑の年代がやや古く、1区においては、貯蔵空間としての利用から、居住域の変遷・変化の片鱗をみることもできる。

奈良・平安時代の遺物は少ないが、墓からは古代末の青磁や白磁が出土しており、土坑や柱穴覆土から須恵器の小片などが出土した。3区では近世の陶磁器類も検出されている。

本郷川対岸の堀の内遺跡(山口県埋蔵文化財センター2020他)でも弥生時代前期末から中期の遺構・遺物が出検され、本郷川の両岸に集落が展開していたと想定される。中世においては、岩永本郷は大内氏に仕える地頭職、岡部氏の居館が置かれた推定地であり、さらに南側には向山城が所在する。南対岸の「堀の内」の地名が居館の中心と推定され、その北側にも関連集落が展開していたことが想定される。

引用参考文献

- 山口県埋蔵文化財センター 2007 『下村遺跡』
- 山口県埋蔵文化財センター 2020 『堀の内遺跡 川東遺跡 土井敷遺跡』
- 山口県埋蔵文化財センター 2021 『堀の内遺跡2』

図 版



遺跡遠景（南西から）

図版 2



遺跡遠景（北西上空から）



遺跡遠景（南東上空から）



調査区全景（南上空から）



調査区全景（東上空から）

図版 4



調査区全景（上が北）



1・2区全景（上が北）



1区北側全景（南から）



1区全景（北東から）

図版 6



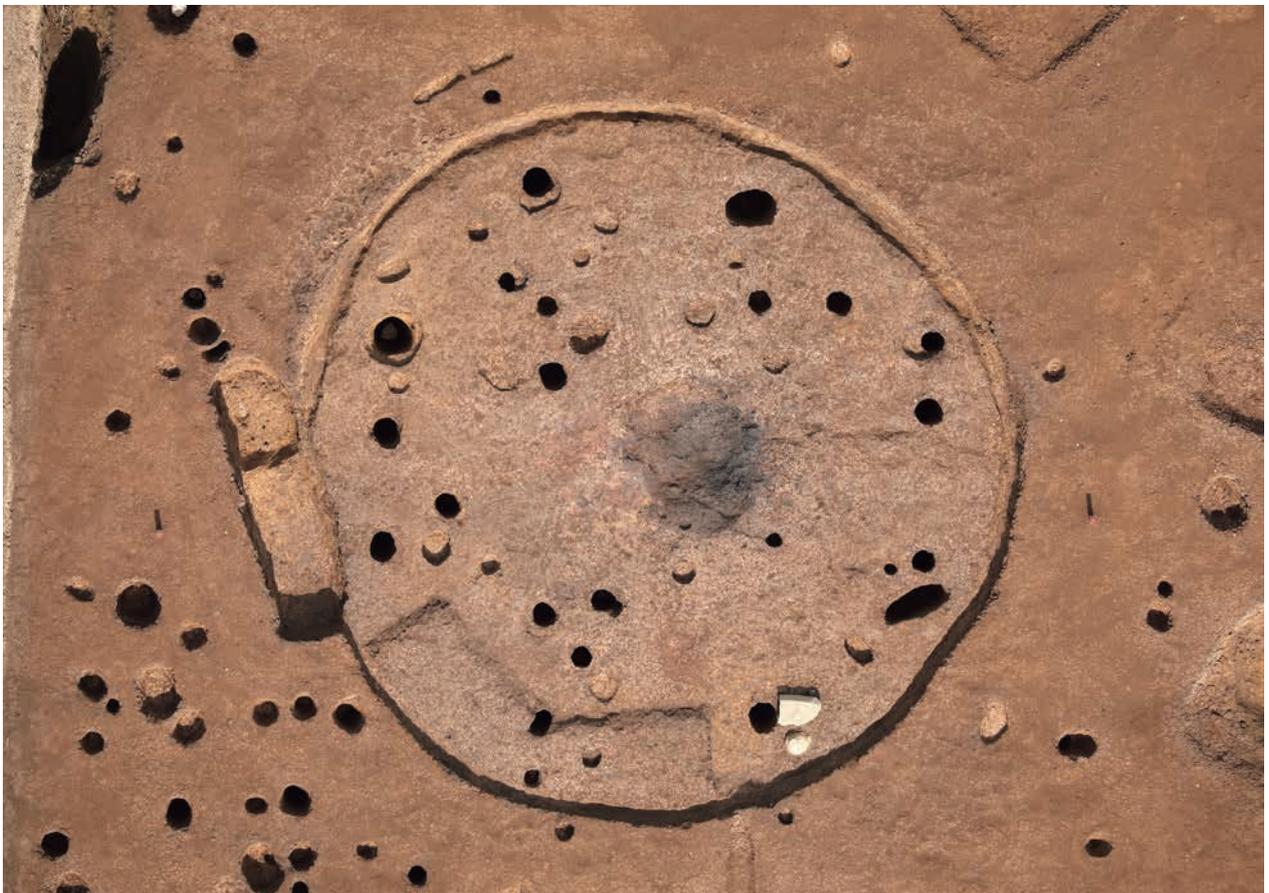
2区全景 (北東から)



3区全景 (上が北)



2区南壁土層断面（北から）



SI 1 全景（上が北）

図版 8



SI 1 全景 (北東から)



SI 1 ベッド状遺構下面 全景 (東から)



SI 1 炉全景（南から）



SI 1 炉土層断面（南から）

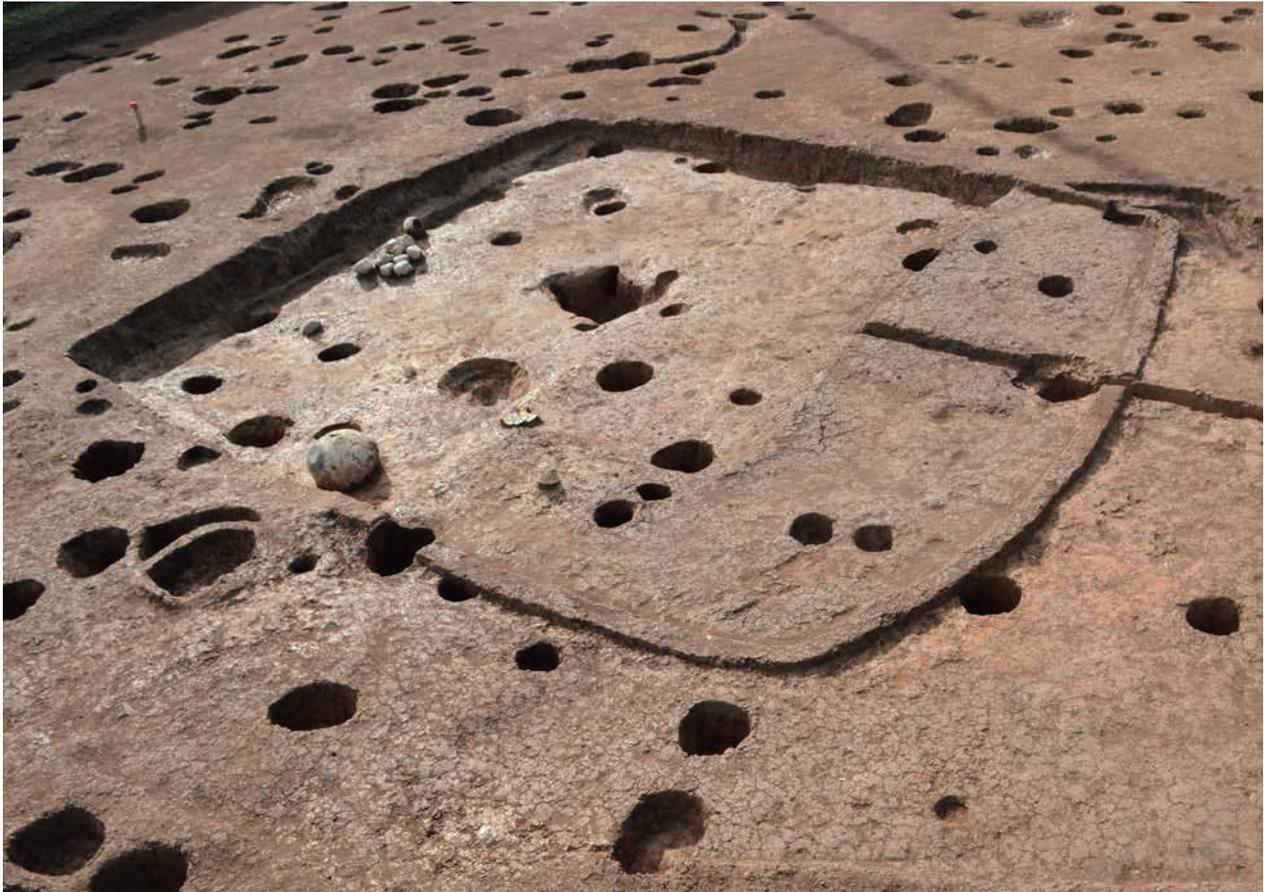
図版 10



SI 2 全景 (上が南)



SI 4・5 全景 (上が北)



SI 4 全景 (北東から)



SI 4 土層断面 (北西から)

図版 12



SI 4 炉全景（南から）



SI 4 遺物出土状況（西から）



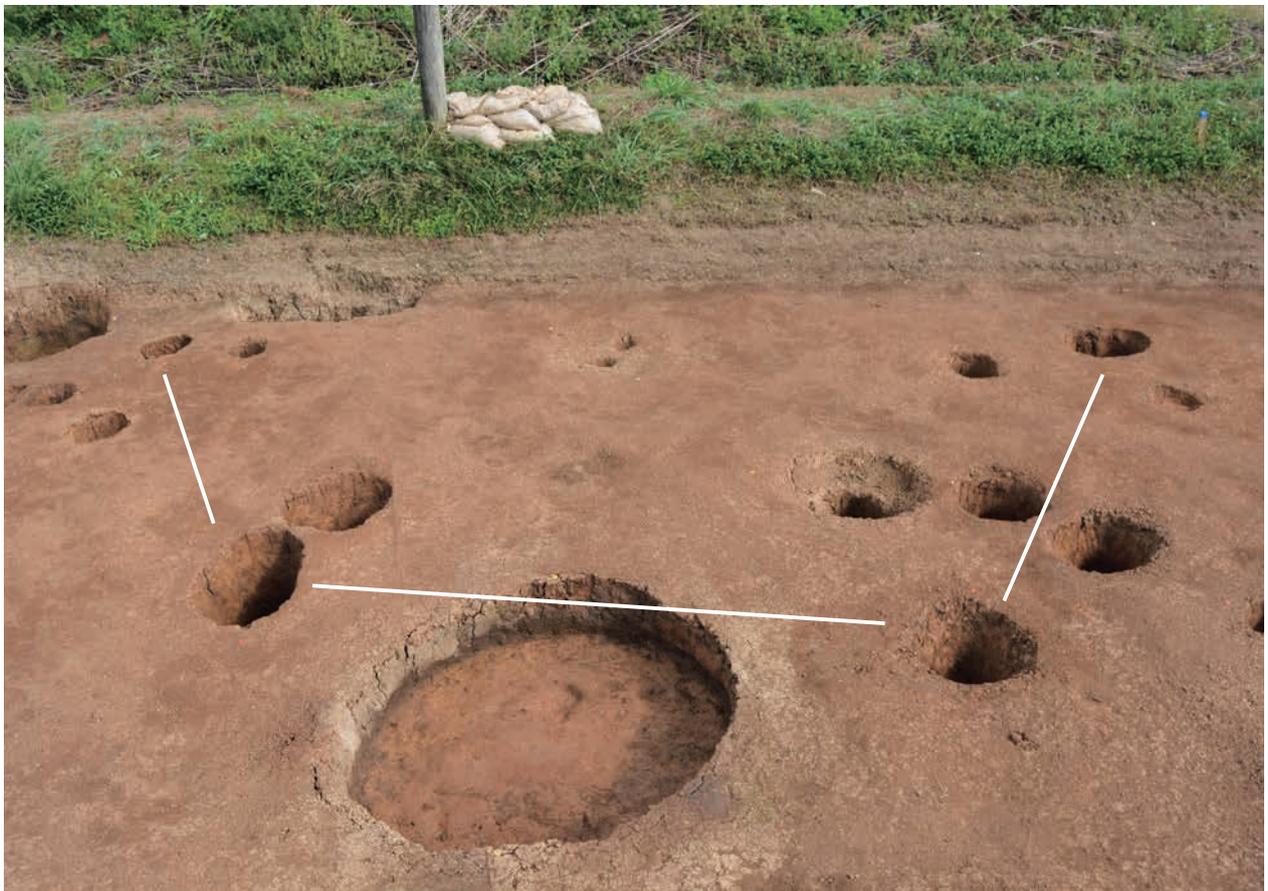
SI 6 全景 (北から)



SI 7 全景 (東から)



SI 8・9全景（上が北）



SI 9全景（西から）



S110・11、SB 1 全景 (左が北)



S110 全景 (西から)

図版 16



SB 1 全景 (東から)



SB 1 全景 (北から)



ST 1 全景 (西から)



ST 1 遺物出土状況 (北西から)

図版 18



ST 2 全景 (南東から)



ST 2 遺物出土状況 (北から)



ST 3全景（南から）



ST 4全景（西から）



SK10 全景（南東から）



SK10 土層断面（南から）



SK31 全景 (西から)



SK31 遺物出土状況 (西から)



SK39 全景（北から）



SK39 底部炭化物出土状況（南から）



SK43 全景 (南東から)



SK43 遺物出土状況 (東から)



SK43 遺物出土状況（南から）



SK43 土層断面（南から）



SK50 全景 (西から)



SK50 土層断面 (西から)



SK53 全景 (南から)



SK53 遺物出土状況 (南から)



SK53 遺物出土状況（西から）



SK53 底部全景（北から）



SK58 全景（東から）



SK58 遺物出土状況（西から）



SP85 遺物出土状況 (南から)



SP85 遺物出土状況 (東から)



SP83 遺物出土状況 (南から)



SP84 遺物出土状況 (北から)



SK82 全景 (南から)



SK87 全景 (南から)



SK101 全景 (南東から)



SK104 全景 (北から)

图版 32



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

图版 34



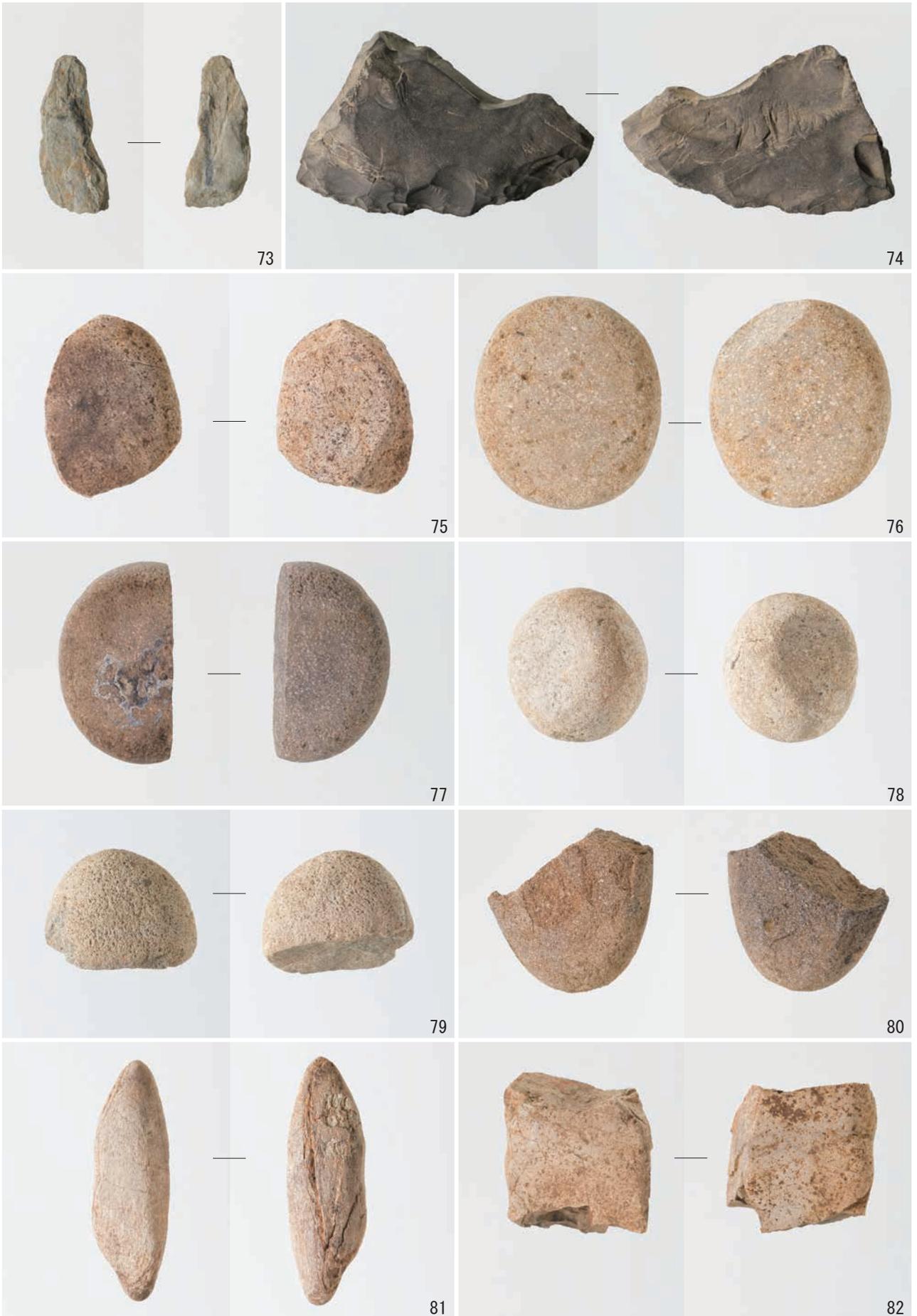


出土遺物 (4)

图版 36



出土遺物 (5)



图版 38





图版 40



出土遺物 (9)

報告書抄録

ふりがな	どうじょう・なかむらいせき
書名	道場・中村遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第112集
編集著者名	宮下孝優 森田孝一 鷹野あきこ
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073
	山口県山口市春日町3番22号
	TEL 083-923-1060
発行年月日	西暦2022年3月24日(令和4年3月24日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな所 在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
どうじょう なかむら 道場・中村 いせき 遺跡	やまぐちけん みねし 山口県美祢市 しゅうほうちょう 秋芳町 いわながほんごう 岩永本郷	35213		34° 11' 59"	131° 16' 41"	20210607) 20211117	2,380㎡	ほ場 整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
道場・中村 遺跡	集落	弥生 中世	竪穴建物11棟、掘立 柱建物1棟、溝10条、 墓4基、土坑102基、 柱穴約1,500個	縄文土器、弥生土 器、石器、土師器、 須恵器、青磁、白磁、 瓦質土器、石製品、 土製品、鉄製品	
要約	<p>道場・中村遺跡では、弥生時代の竪穴建物11棟、貯蔵を目的とする土坑群、平安時代～中世の掘立柱建物1棟、溝、墓、土坑、柱穴などを検出した。竪穴建物は弥生時代中期前半及び後期後半と時期幅が認められる。袋状の断面を呈する土坑群は貯蔵用と推定され、調査区西側は弥生時代の中期・後期の集落域であったことが明らかとなった。</p> <p>出土した弥生土器は北九州・下関、北部九州から瀬戸内西部地域、山口県東部にかけての特徴を合わせ持つ独特の様相を呈する。</p> <p>古代から中世にかけては、掘立柱建物、溝、墓、土坑、柱穴から土師器・輸入陶磁器・瓦質土器などが検出された。中世には、大内氏に仕える地頭職である岡部氏の館跡が本郷川対岸の堀の内遺跡に推定されており、それらとの関係が注目される。中でも、墓から出土した青磁・白磁などの高級輸入陶磁器が副葬品として埋納されている点などは、有力層の存在を推定させる。また、岩永本郷地区は赤間関街道・肥中街道との結節点にある点などからも、交通の要衝として栄えたことが推定される。</p>				

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第112集

道場・中村遺跡

2022年3月24日

編集・発行 公益財団法人山口県ひとつくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
〒752-0927 山口県下関市長府扇町9番50号

